常盤台遺跡

——横浜国立大学構内における
埋蔵文化財発掘調査の概報——

昭和57年3月

横浜国立大学

序に代えて

学長　野　村　正　七

埋蔵文化財の調査は骨の折れる仕事であるが，一方，はるか遠い昔にわれわれの先祖がどういう生活をしていたかをあとづけるという意義ある仕事でもある。

常盤台キャンパス一帯については，大正震災後わが国考古学の先達，八幡一郎博士が調査，縄文後期の遺跡を発見され，これを帷子貝塚と命名されたという記録が残っている。

本学の常盤台への移転統合以来，教育学部史学教室の菊地康明教授，岡本勇講師をはじめ又史学専攻の学生諸君，その他一般の有志の学生諸君の協力により，工学部建築学科研究棟建設用地，いわゆる三角台地の職員宿舎建設予定地，教育学部新研究棟建設用地，桜美林ハイツ西側の統合寮建設予定地などについて埋蔵文化財調査が次々と精力的に行われ，多数の土器や古代の住居址と覚しきものなどが発見された。そして，これらの遺跡は新たに常盤台遺跡の名で総称されることになった。

作業は今後もなお継続されるはずであるが，関係者の間で，これまでの経過と成果とをいちおう纒めて報告することが適当であるとの議がまとまり，その結果生れ出たのが本書である。この書物がこれまで関心のなかった人々にも考古学への興味をよびおこすことが出来れば幸である。

ま　え　が　き

1974年の夏，私たちの教育学部は，全学の先陣をうけたまわって，清水ケ丘からこの常盤台に移転した。当時この広大なキャンパスには，まだ本部と教育学部の建物しか出来上っておらず，見わたす限り赤土の丘であった。所々に保土ケ谷カントリー時代のクラブ・ハウスや森と木立が残っていたが，芝生もゴルフ・コースもすっかり削り去られて，赤い地膚をブルドーザーが這い廻り，あちこちで整地や建築工事が進められていた。このような状況だったから，校舎周辺の環境整備もまだ出来ておらず，一度雨が降ると赤土は一面の泥濘と化し，少し晴天が続くと黄塵が空高く舞上って，最上階の研究室でさえ埃がつもる有様だった。しかし夏休みが終って新学期が始まる頃には，校舎周辺に撒布された芝の種子も一斉に芽をふき，植樹も次第にふえ，道路やコンクリートの石段も整って，常盤台での新しい研究・教育活動が始まったのであるが，それと同時に，その後の全学の建築・環境整備工事の進展の中で，私たちは新たな問題に直面することとなった。それはキャンパス内の埋蔵文化財の問題である。

移転後２年たった1976年10月，中央噴水広場の西側の工学部建築学科研究棟の敷地をユンボで掘削整地していた時，崖面で偶然縄文中期の埋め甕が見付かり，歴史学科の学生O君が私の所に知らせに来た。早速飛んでいって見ると，完形土器ではないが保存状態が良好なので，施設部にお願いして工事を一時中止して頂き，非常勤講師として考古学の特講をお願いしていた岡本勇先生に指導して頂き，歴史科の学生に手伝って貰って緊急発掘調査を実施することとなった。調査は十日ほどで終り，円形の竪穴住居址と思われる遺構１基と多数の土器片のほか，貯蔵穴遺構も発見したが，この遺構はゴルフ場時代にすでに破壊され，一部が残存していたものらしく，附近には破壊された貝塚のものと思われる貝殻も散乱していた。幸い住居址遺構は建物の予定地外にあったので，埋戻して保存されたが，この機会にキャンパス内の埋蔵文化財の分布調査をする必要性を感じ，翌11月岡本先生の指導の下に，歴史学科の学生の協力を得て３日間ほどで全キャンパス内の遺物の表面採集を実施した。その結果はこの報告書の第１図に示したとおりである。

後で分ったことだが，この常盤台には縄文後期の遺跡があることが，すでに1977年(大正11)に『人類学雑誌』に載せられた八幡一郎氏の「保土ケ谷貝塚雑記」という論文で紹介されていたのである。この遺跡は，論文の記述からみて，恐らく中央噴水広場の西側の台地上にあったのではないかと推測され，キャンパスの整地工事の際にも，その附近で土器の出土があったという話も聞いている。もっと早く埋蔵文化財への配慮がなされていたならばと惜まれてならない。

しかし常盤台の遺跡の破壊は，さきにも述べたとおり，保土ケ谷ゴルフ場の創設当初から始まっていたらしい。このゴルフ場は震災直後に作られ，日本でも最も古いものの一といわれている。当時は今日のように発達した土木機械もなかったから，人力でやられたのであろうが，発掘調査してみると，バンカーの跡とみられる砂層や，土盛りなどの人工的造成の形跡が至る所に見られ，コースの改修工事が頻繁にやられたことが推測できる。さらに敗戦後になると，アメリカ軍に接収され，ブルドーザーで改修工事がやられたらしい。今行われている教育学部の新研究棟の工事現場では，この敗戦後の改修工事の跡が生々しく見られるのである。戦後の埋蔵文化財の破壊の中でも，全国各地で開発されたゴルフ場建設の被害はよく挙げられる。私などはゴルフ場建設がそれほど埋蔵文化財を破壊するとは信じられなかったのだが，常盤台の調査を進めるにつれて，初めて納得できた。機械力のない時代でさえも，これほど大がかりな自然の改造が行われたのである。

これほど大規模な改造の手の加えられた常盤台ではあるが，しかし詳しく調査してゆくと，まだ方々に貴重な遺跡が残っていることも段々に明かになってきた。キャンパスの西南隅のいわゆる三角台地に岩井の官舎を移転する計画が起り，1979年夏試掘調査を行い，翌年3月に10日間の日程で本調査を行った。幸い建築予定地内には遺構がなかったが，その直ぐ西側で偶然にも複合した竪穴住居址7軒が発見され，縄文中・後期の多量の土器や石器が出土した。この遺構は経理部の御好意で保存しようということになっている。

近年，東大・京大をはじめ，全国各地の大学キャンパス内で遺跡が発見され，その処置が問題となっている。私などは多年学外で遺跡の保存運動にたずさわってきたが，その場合自分が直接開発の当事者となる機会はなかったから，比較的気楽に文化財の重要性を訴えることができた。ところが，学内の遺跡の場合は，教官の一員として学内施設の開発にも責任を負わなければならないので，それだけ深刻に開発と保存のジレンマに直面せざるを得なかった。

しかし，よく考えてみると，学内の遺跡だから深刻だというのはおかしな話で，学外の場合でも，開発と保存のジレンマをどう調和的に解決するかという問題は，文化財の保存運動にたずさわる際常に真剣に考えていなければならないことなのである。そうでなければ，いかに文化財が大切だと訴えても，学者の独り良がりの主張だと誤解されて，文化財保存の社会的意義は仲々理解されない。こういう苦い経験を，私たちはこれまで文化財保存運動の中で幾度となく味わってきたのである。先年在外研究でイギリスに行った時，最近出来たばかりのロンドン博物館を見て，文化財保護と開発の調整に対する英国の人々の真剣な取組みに頭の下がる思いをした。この博物館は市内の高速道路の交叉点に道路と建物を立体化して作られているが，建物の基礎部分にはローマ時代の石壁の遺構が館内から見下せるように取り込まれているのである。このように市街地の地下遺構をそっくり博物館の中に取り込む保存法は，有名なバースのローマ風呂などもその一例であるが，西ドイツのケルンの大聖堂の傍のローマ風呂の遺跡やパリのノートルダム寺院の前庭の地下遺構なども同様の手法で保存されている。日本でももっと文化財の保護と開発の調整が真剣に取上げられる必要があるのではないかと痛感した次第である。

話はいささか脇道にそれてしまったが，この報告書には，これまでの調査で明かになった常盤台の遺跡の様子が初めて公にされている。私は残されたこれらの貴重な遺跡の保存について，これからも大学の事務局や教官各位の御理解と御協力を心から願ってやまない。同時に，本報告書の公刊に当り，貴重な時間を割いて調査発掘の指導と報告書の作成に当って下さった横浜市文化財審議委員・港北ニュータウン調査団長の岡本勇先生，ならびに調査の実施と報告書の刊行について並々ならぬ御尽力を下さった経理部・施設部の皆様，および教育学部の教官各位，担当事務職員の皆様，さらに調査に協力された学生諸君と一般の有志の方々に，厚く御礼を申上げる次第である。

1972年 3 月

教育学部教授（歴史学）

菊　地　康　明

目　　次

序に代えて
まえがき

Ⅰ　調査の動機と経過 …… 1

Ⅱ　常盤台における遺跡の分布 …… 2
1.　常盤台の遺物発見地 …… 2
2.　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　いわゆる保土ケ谷貝塚について …… 6

Ⅳ　第１地区の調査 …… 7
1.　調査の概要 …… 7
2.　発見された遺構 …… 8
3.　出土した遺物 …… 10

Ⅴ　第２地区の調査 …… 11
1.　１次調査の概要 …… 11
2.　２次調査の概要 …… 13
3.　３次調査について …… 14

Ⅵ　まとめ …… 25

挿　図　目　次

第１図　常盤台遺跡の位置 …… 2
第２図　常盤台における遺物発見地 …… 3
第３図　第１地区の発掘トレンチ …… 7
第４図　第１地区崖面の断面 …… 7
第５図　第１地区発見の貯蔵穴断面 …… 8
第６図　第１地区発見の住居址 …… 9
第７図　第２地区の発掘区域 …… 12
第８図　第２地区A′トレンチの東壁断面 …… 13
第９図　第２地区Cトレンチの西壁断面 …… 13
第10図　住居址群とその他の遺構 …… 15
第11図　１号住居址 …… 16
第12図　２号住居址 …… 18
第13図　イ・ニ区東壁の断面 …… 18
第14図　３～５号住居址 …… 19
第15図　３号住居址の炉址 …… 20
第16図　４号住居址の炉址 …… 20
第17図　５号住居址の炉址 …… 20
第18図　ロ区発見の土壙 …… 22
第19図　１号住居址覆土出土の集石 …… 22

図　版　目　次

図版１　空からみた常盤台
図版２　第１地区　遠景（上）と近景（下）
図版３　第１地区　断面の露出（上）と住居址の発掘（下）
図版４　第１地区　土器の包含（上），貯蔵穴の断面（下）
図版５　第１地区出土の土器（一）
図版６　第１地区出土の土器（二）
図版７　第１地区出土の土器（三）
図版８　第１地区出土の土器（四），石器
図版９　第２地区　近景（上：南より　下：北より）
図版10　第２地区　トレンチの調査（A′・Eトレンチ）
図版11　第２地区　Ⅰ区（上），Ⅱ区の発掘
図版12　第２地区　土器の出土（Dトレンチ），土壙の発見（Ⅰ区）
図版13　第２地区　土器の出土（１号住居址覆土）
図版14　第２地区　集石の平面（上）と断面（下）
図版15　第２地区　発掘された住居址群
図版16　第２地区　１号住居址（下は覆土中の土器の出土状態を示す）
図版17　１号住居址炉址（上），２号住居址炉址（下）
図版18　３号住居址炉址（上），４号住居址炉址（下）
図版19　５号住居址炉址（上・下）
図版20　４号住居址の柱穴（上），Ⅱ区出土の土壙（下）
図版21　第２地区出土の土器（一），（Ⅰ群）
図版22　第２地区出土の土器（二），（Ⅰ群）
図版23　第２地区出土の土器（三），（Ⅰ群）
図版24　第２地区出土の土器（四），（Ⅱ群）
図版25　第２地区出土の土器（五），（Ⅱ群）
図版26　第２地区出土の土器（六），（Ⅱ群）
図版27　第２地区出土の土器（七），（Ⅱ群）
図版28　第２地区出土の土器（八），（Ⅱ群）
図版29　第２地区出土の土器（九），（Ⅱ群）
図版30　第２地区出土の土器（十），（Ⅱ群）
図版31　第２地区出土の土器（十一），（Ⅱ群）

図版32　第２地区出土の土器（十二），（Ⅱ群）
図版33　第２地区出土の土器（十三），（Ⅲ群）
図版34　第２地区出土の石器（一），（打製石斧）
図版35　第２地区出土の石器（二），（打製石斧）
図版36　第２地区出土の石器（三），（打製石斧）
図版37　第２地区出土の石器（四），（礫器，磨製石斧，磨石，石皿，たたき石，石錘）
図版38　第２地区出土の石器（五）・土製品　（石鏃，土錘，土製円盤，凹み石）

I　調査の動機と経過

横浜国立大学のキャンパス常盤台は，国鉄横浜駅の西北西，約3㎞の位置にある。

ここに縄文時代の貝塚が存在することは，すでに『日本石器時代人民遺物発見地名表』（東京帝国大学，明治31年刊）に記載されているから，その事実はかなり早くから知られていたわけである。その後，大正11年，東京大学理学部人類学教室の八幡一郎氏らによって，はじめて発掘がおこなわれ，翌年にはその調査結果が報告され学界の周知するところとなったのである。しかるに，畑と樹林からなる付近一帯は，このあと保土ケ谷ゴルフ場として造成され，大幅な地形変更をうけ，まったく面目を一新するにいたったらしい。また，芝生におおわれたゴルフ場内には，一般の立入りが不自由であったために，貝塚の存否もわからぬまま，以後ながい年月が経過したのである。

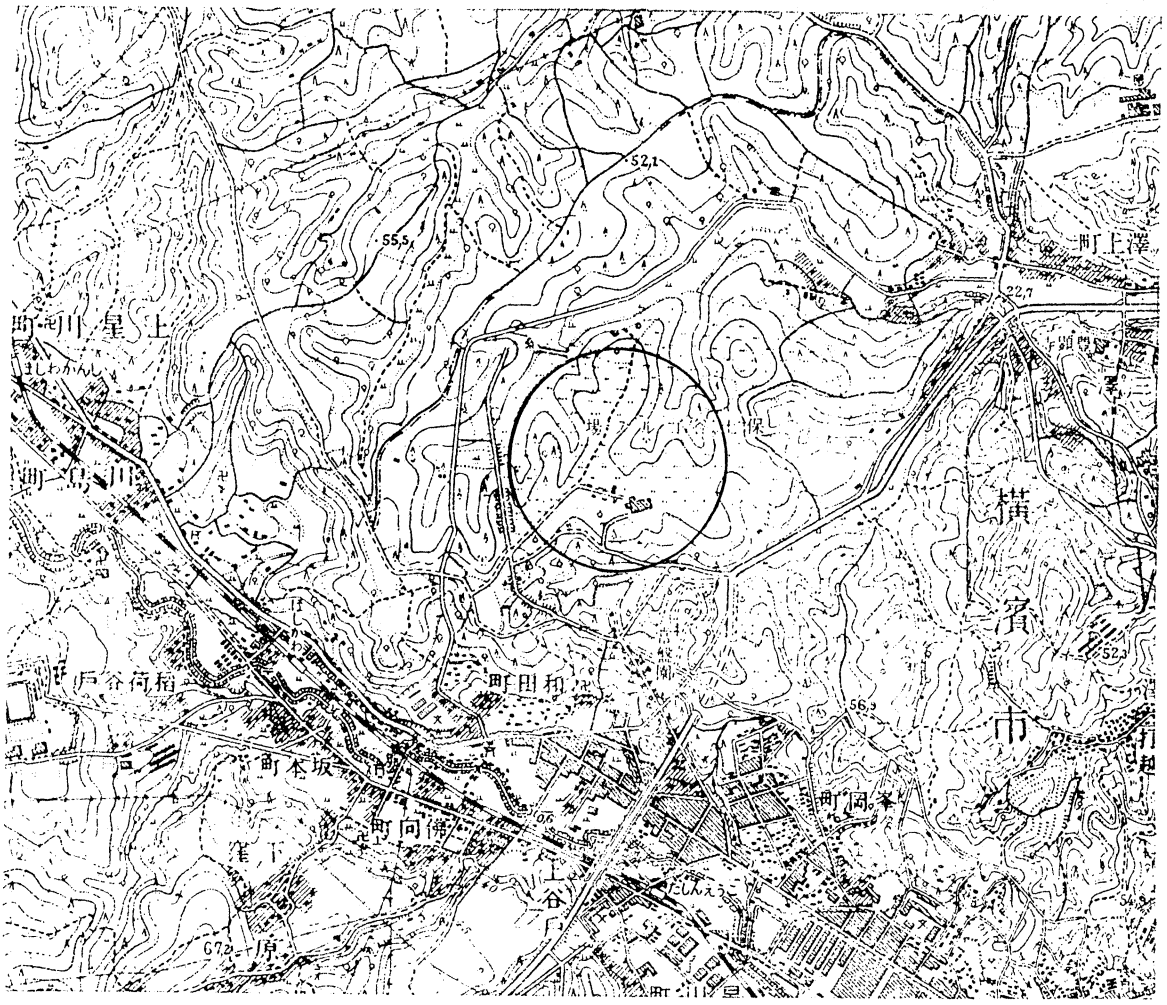
昭和48年，ゴルフ場の跡地に大学が移転することとなり，そのための造成工事がおこなわれた。このさい，敷地の一角に広い範囲にわたって貝殻が一面に散布していたという。あきらかに貝塚の貝ではあったが，すでに攪乱をうけたものであり，まともな貝層はみられなかったという（横浜市教育委員会，井上義弘氏の教示による)。こえて，昭和51年の秋，工学部研究棟の建設工事の進行中に，たまたまその付近に多量の貝がみとめられ，また切崩した崖面には縄文土器の包含されているのが発見された。貝のなかには，縄文時代の貝塚に特有のハイガイがふくまれており，また土器は縄文時代中期末のものであった。この事態を看過することのできなかった本学教育学部歴史学教室では，応急的に調査を実施することとした。調査は10月12日から25日までの期間，有志学生の協力をえて，もっぱら放課後におこなわれた。その結果の概要は，後述するごとくである。

キャンパス内には，他にも土器片の散布する個所がみとめられた。そこで，同年11月28日，われわれは大学構内における遺物散布地の分布調査を実施した。この結果，すでに破壊されたもの，および不確実なものをふくめて19カ所の存在を確認することができた。これらの詳細は，次章に述べるとおりである。

構内西南端の一角は，分布調査のさいに縄文時代中期の土器片の散布しているのがみとめられ，G地点とした個所である。ところが，この部分に職員住宅の建設が予定され，それに対処しての調査が必要となった。そこで歴史学教室では，大学当局よりの依頼をうけて，その発掘を担当することとなった。昭和54年の夏，まず予備調査（1次調査）を実施し，当該区域に5本のトレンチを設定し，発掘を試みた。こえて，同年暮，住宅を建設する部分（10×40m）ならびにEトレンチ付近の調査（2次調査）をおこなった。Eトレンチ付近には，住居址の存在が確認されたので，調査体制を十分なものとして，翌年3月この部分を集中的に調査したのである（3次調査)。そして，数戸の竪穴住居址と多量の遺物を発掘することができた。

Ⅱ　常盤台における遺跡の分布

常盤台付近の地形をみると，南側には帷子川の大きな谷が流れ，北側には神奈川区の反町方面から入りこんだ滝川の浅い谷が延びている。台地上は標高約50mをはかるが，その周囲は多くの小さな谷によって刻まれ，台地と谷からなる変化にとんだ地形をつくり出している（第1図）。ここでの貝塚の形成に関与した谷は，帷子川谷よりは滝川谷であったと考えられる。

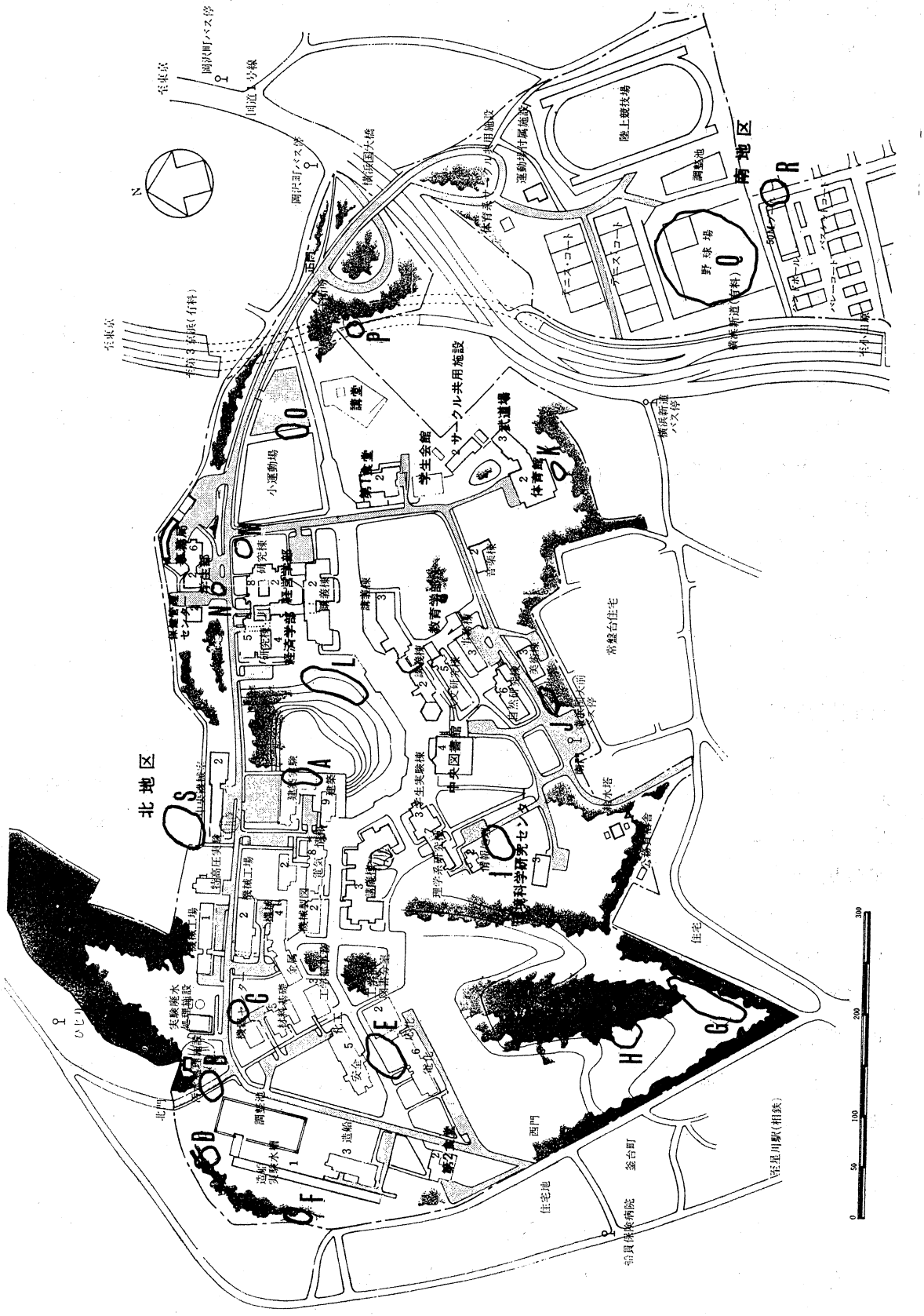


第1図　常盤台遺跡の位置

1.　常盤台の遺物発見地

分布調査の結果，大学構内のつぎの地点で考古学上の遺物を発見することができた（第2図）。

A地点　ここは北側から入りこむ谷にのぞんだ台地の斜面部にあたる。現在は工学部建築学科の建物の東縁を占める。昭和51年10月，発掘がおこなわれた。第1地区とよんでおく。縄文時代後期の堀之内式土器がもっとも多く出土しているが，それ以前のものも若干みられる。



第2図　常盤台における遺物発見地

また，この近くにかつて貝塚のあったことは，ほぼまちがいない。中期末の住居址や，後期の貯蔵穴が出土している。

B地点　構内の北西隅，汚水処理施設の南西付近であるが，遺物は造成時に他から運ばれてきた可能性がつよい。後期の縄文土器がみられた。

C地点　機器センターの北東側，旧地形は台地上であったとみなされる。しかし，現在は削平をうけており，発見された遺物（中期末の加曽利EⅡ式土器，後期の堀之内式土器）は，現位置にあったものとは思われない。

D地点　工学部造船実験水槽の北側にあたる。切り崩された崖面の黒土中に礫が包含されていた。土器片などは検出されなかった。

E地点　工学部図書分室の西側，縄文土器片や礫塊がわずかに点在していたのみである。ここは本来，谷であった個所であり，これを埋立るために運ばれてきた土に混っていた遺物と考えられる。

F地点　造船実験水槽の西側の台地上，現在は林となっている。縄文時代早期の撚糸文土器が採集された。構外に遺跡の主体があるものと予想される。

G地点　キャンパスの西南隅を占める。中期の縄文土器片がやや多く発見された。職員宿舎の建設に先立って，3次にわたる発掘がおこなわれ，竪穴住居址7例や土壙などの遺構，中期の勝坂式土器・加曽利E式土器，後期の称名寺式土器，各種の石器類など多量の遺物が出土した。縄文中期の集落址である。第2地区と呼称しておく。

H地点　G地点の北側，樹林帯の中にある。中期の縄文土器がみられた。遺跡としての保存は比較的良好と思われる。

I地点　環境科学研究センターの北東付近。中期の加曽利E式土器が採集されたが，中央部はすでに削平され，ロームが露出している。これにつづく電算センター建設敷地内の試掘を，昭和51年12月14日から17日までの期間に随時実施したが，ゴルフ場造成のさいに攪乱をうけており，正常な層序はみられなかった。中期の土器片若干が出土したにすぎない。

J地点　教育学部美術棟の西側の崖面付近で，加曽利E式土器が採集された。部分的に遺物包含層が残存しているとみなされる。

K地点　体育館の裏側，南にむけて張り出した台地上である。わずかの空地から，縄文早期の土器片が発見された。南側の林のなかに遺跡の中心があるものと思われる。

L地点　経済学部校舎の西側，A地点の対岸にある。加曽利E式，堀之内式，加曽利B式などの土器片が，やや目立って採集されたが，現位置にあったものとは考えがたい。

M地点　経営学部研究棟の北東隅，土師器らしいもの1片が発見されたのみである。

N地点　事務局棟の南西隅，縄文土器1片が採集されたにすぎない。

O地点　小運動場の東縁，早期の撚糸文土器の破片数個が見出された。遺物包含層のあったことは確実だが，すでに大半は失われたとみなさざるをえない。

P地点　正門守衛所の裏側，構外の雑草地から同じく早期の撚糸文土器が採集された。

Q地点　野球場内，縄文後期の土器の小破片が一帯に散布していた。しかし，現地は地形変更をうけているため，現位置にあったものとはみとめられない。

R地点　プールの東側，ここでも縄文土器が発見されたが，Q地点と同様の状態にあるもの

と考えざるをえない。

S地点　中央機械室の北側を占める。主体部は構外に属する。北にむけて突出した台地の先端部に近い個所である。後期の縄文土器が発見されていたが，ここに新菱興産株式会社によりテニスコートが造成されることとなり，昭和52年12月事前の調査もおこなわれた。この場所も予想外の攪乱をうけており，遺構の発見は期待できなかった。遺物としては，堀之内Ⅰ式・Ⅱ式，加曽利BⅠ式の100片をこえる後期の縄文土器が出土した。また，早期の茅山式，前期の黒浜式の各土器が1，2片みられた。この結果については，すでに「常盤台北地点遺跡の調査」と題して，その概報を関係当局に提出しておいた。

以上のように，常盤台の大学構内には，A地点からS地点までの19カ所をかぞえる遺物発見地が存在するわけである。しかし，このうちのいくつかは，二次的な遺物散布地であり，本来的な遺跡とみなすことはできない。また，さらにいくつかは，すでに大半が失われたものであり，片鱗をとどめるにすぎなかった。とはいえ，10カ所前後の遺跡が存在していたことは疑いなく，常盤台の地が遠い祖先たち，とりわけ縄文時代人にとって格好の居住の地であったことを物語っている。

2. 周辺の遺跡

常盤台の周辺の地域にも，いくたの遺跡の存在が知られている。まず，縄文時代の貝塚としては，つぎの5カ所があげられる。

1. 神奈川区神大寺町　神大寺貝塚（後期）
2. 神奈川区斎藤分町　史ケ丘貝塚（後期）
3. 神奈川区三ツ沢東町　三ツ沢貝塚（後期）
4. 神奈川区峰沢町　峰沢貝塚（後期？）
5. 保土ケ谷区仏向町　仏向貝塚（後期）

これらは，半径2.5㎞範囲内に位置するもので，いずれも後期の所産であり，他の時期の貝塚はみられない。しかも常盤台の貝塚と同様，堀之内式土器を主体的に出土する点で共通している。縄文時代後期のはじめには，小海進があったとされているが，この地域の堀之内期の貝塚は，それとの関連において成立したものと考えられるかも知れない。

貝塚以外の遺跡については，十分な分布調査がおこなわれていないが，いま手元にある資料により近隣の遺跡を列挙すると，つぎのとおりである。

1. 神奈川区南三ツ町豊顕寺裏（縄文）
2. 神奈川区岡沢町，峰岡町との境（早期）
3. 保土ケ谷区常盤公園東方（中期）
4. 保土ケ谷区釜台町常盤公園西方（早期）
5. 保土ケ谷区釜台町小学校付近（中期）

これらは主として，常盤台の南側の丘陵上に位置するものであるが，北側にも，あるいは西側にも，なおあまたの遺跡が眠っているものと思われる。

Ⅲ　いわゆる保土ケ谷貝塚について

常盤台にかつて存在した縄文時代の貝塚は，大正11年八幡一郎氏らによって調査され，「保土ケ谷貝塚」として学界に報ぜられた。しかし，これ以外に，帷子貝塚，中原貝塚，保土ケ谷ゴルフ場内貝塚などの異称がある。

いったい，この貝塚はどんな状態のものであったのか。八幡一郎氏の記述によれば，貝塚の存在する個所は，「この辺一帯は丘陵が連互している。その丘陵の一つの頂上近くから傾斜面にかけて貝塚が存在するのである。この丘陵は略々南北に走り東は深く入り込んだ谷地である。貝塚は即ちこの谷に臨んで東傾斜面（極めて緩やかな）にあるのである」と指摘されている。人類学雑誌38巻４号の巻頭図版に掲載されている遺跡の写真から推すと，これは現在工学部の講義棟から建築学科の研究棟のある付近に相当すると思われる。昭和51年，第１地区（A地点）から多量の貝の散布がみつかったのは，これをある程度裏付けるものかも知れない。

八幡氏の発掘した貝塚は，およそ15×25mほどの規模をもつものであった。貝層は約60cmの黒土でおおわれており，厚さは正確には不明であるが，50cm前後を測るもののようである。ところが，この貝塚の「発掘も終了せんとした時」，西方約60mの地点で「意外にも（新しい）貝層を発見したが発掘研究は他日を期して中止した。此の貝層は勿論今度発掘したのとは独立したものである」。また，「此の外にも一つの貝塚が発掘した貝塚から約１丁程西方松林付近の西傾斜面にも存在する」と述べている。したがって，少なくとも３カ所に貝塚が存在し，貝塚群を構成していたことが知れるのである。それにしても，他の二つの貝塚が，その後なんらの調査の手も加えられることなく，破壊されていったのは残念でならない。

出土遺物のうち，土器は「大部分薄手派土器」であり，「厚手派土器の疑問あるものもないではなかった」と記している。つまり，後期縄文土器が大部分であり，中期の土器らしいものも散見されたということであろう。注口土器の蓋が数枚出土している。

石器には，黒耀石製の石鏃，磨製石斧，多数の打製石斧，脚付の石皿，軽石製の軽子，緑泥片岩の精製された石棒などがあり，また貝輪，滑石製の丸玉，骨角器なども発見されているが，特記すべきものはない。

獣骨はひじょうに多かったという。シカ，イノシシのほかに，イヌの完全な骨格が出土している。埋葬されたものにちがいない。魚骨もみられた。いうまでもなく，狩猟・漁撈のおこなわれていたことを証明するものである。

貝塚を構成する貝の種類については，まったくふれられていない。われわれが採集した範囲では，ハマグリ，アサリ，ハイガイ，マガキ，キシャゴ，イボニシなどがあった。いずれも鹹水産のものであり，その点では純鹹貝塚といえるだろう。このうち，ハマグリ，アサリ，ハイガイがとくに多いようであった。

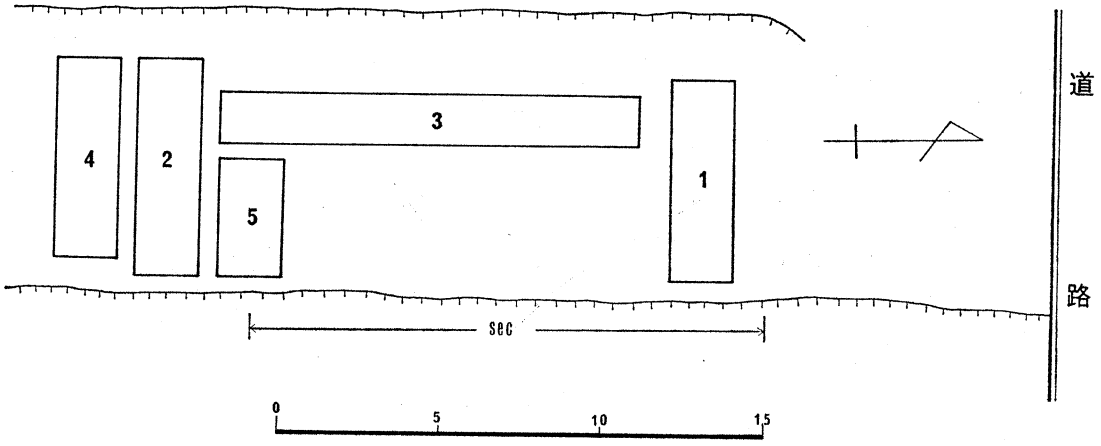
Ⅳ 第1地区の調査

1. 調査の概要

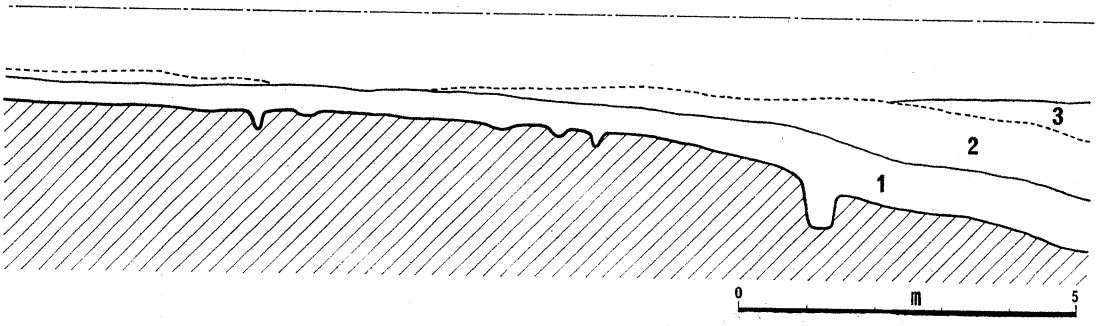
昭和51年10月，たまたま工学部研究棟の建設工事中に，その一隅から多量の貝殻の散布と，切り崩された崖面に土器の包含されているのが発見された（図版4）。貝殻のなかにはハイガイがふくまれており，貝塚に由来するものであることが明白であった。また，土器は縄文時代中期末の加曽利EⅣ式に属するものであった。

この事態に遭遇したわれわれは，1)付近に貝塚が遺存しているのか，2)遺物の包含はどのようなひろがりをもっているのか。つまり，遺跡として確認できるのか。この2点をあきらかにすることを主な目的として，調査を実施することとなったのである。

昭和51年10月12日から25日までの期間，連日ではなかったが，午後のひとときを利用して作業に従事した。これには有志学生が積極的に協力してくれた。調査面積は約60㎡をかぞえ，以下に記すような遺構と遺物を発見した。



第3図 第1地区の発掘トレンチ



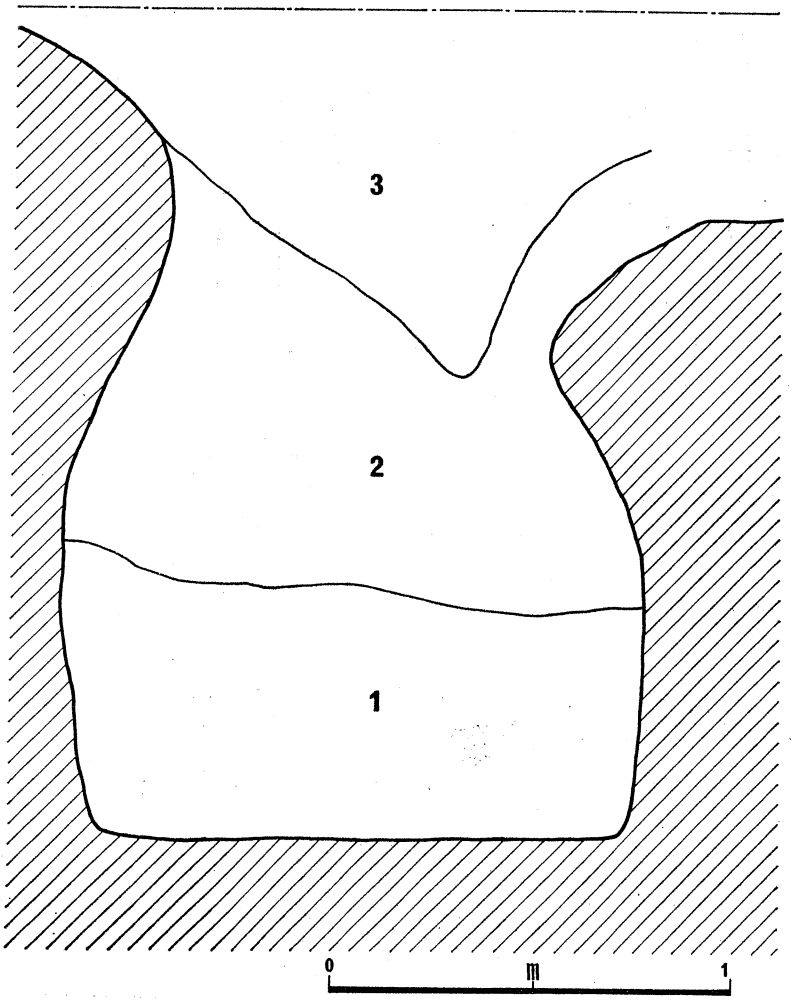
第4図 第1地区崖面の断面

2. 発見された遺構

まず，工事のさいにつくられた崖面をきれいに削って露出し，土層の堆積状態を観察することとした。最上部の黒土はかなり削除されていたが，その下には褐色土があり，さらにローム層につづく。ローム面は北へいくにしたがって下降しており，その上に堆積する褐色土・黒土は厚さを増している（第4図）。北端では削平された黒土の上に，さらに二次堆積の貝混りの土がのっている。

この部分の西側に，崖と直角方向に第1トレンチ（2×6 *m*）を設定し，貝層の有無をさぐってみたが，その徴候さえみとめられなかった（第3図）。多量の貝は，他から運ばれてきた二次的なものであることが判明したわけである。遺物は，黒土の下部から褐色土の上部にかけて包含されていた。縄文時代中期末（加曽利EⅣ式）および後期前半（堀之内Ⅰ・Ⅱ式）の土器が主体を占めている。

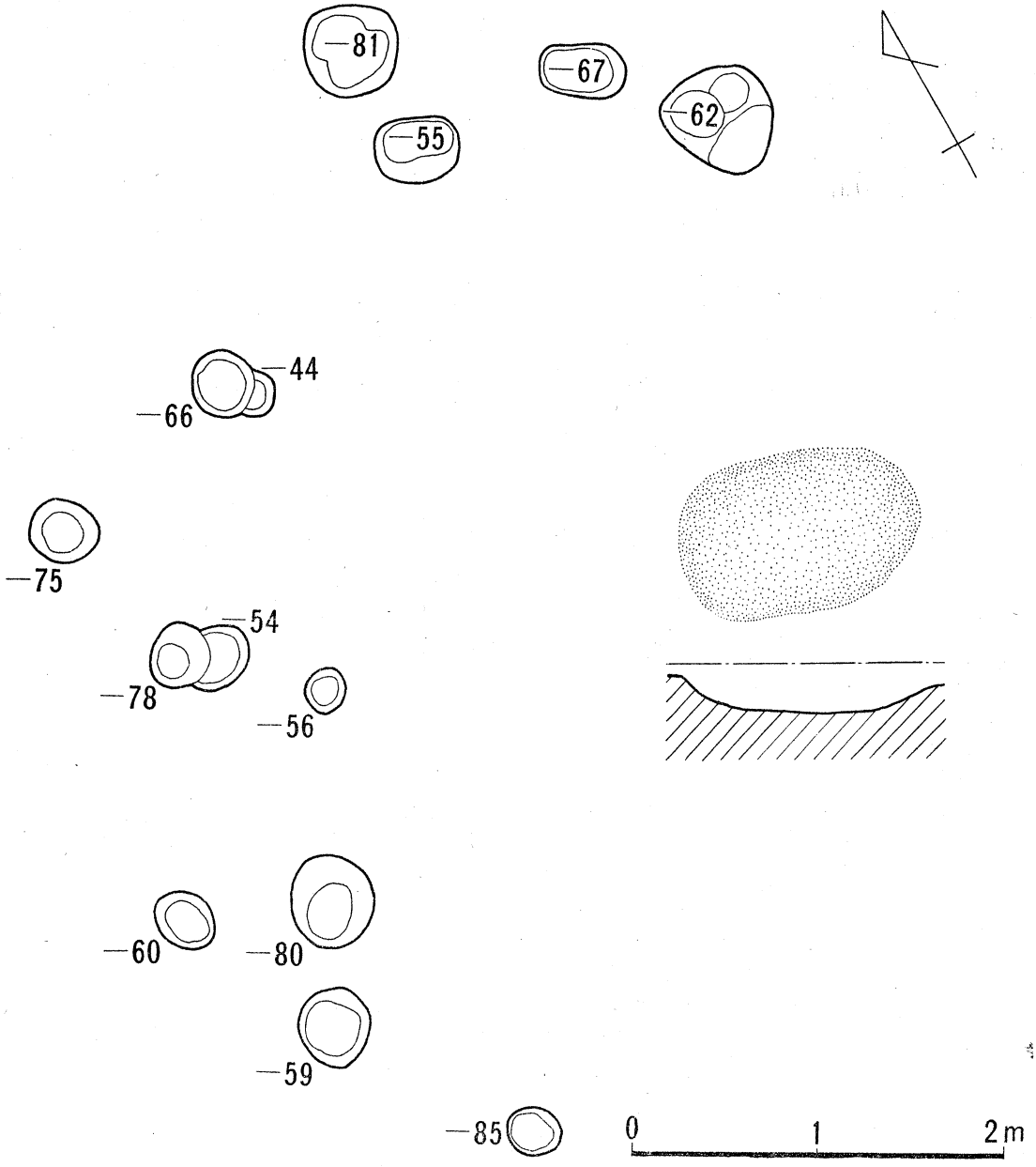
第4図の断面にみられる黒味をおびた褐色土のやや大きな落ち込みは，精査した結果，袋状の断面を示す貯蔵穴であることがわかった。これを埋める土のなかからは，堀之内Ⅰ式土器の大きな破片がいくつか出土した。この貯蔵穴は，深さ170 *cm*，底径130 *cm*をはかる（第5図，図版4—下）。



第5図　第1地区発見の貯蔵穴断面

崖面の南寄りの個所には，埋設土器の包含がみられただけではなく，その近くに柱穴状のピットも存在していた。そこで，西側に第２，第４，第５の各トレンチを設け，住居址の有無をたしかめることにした。その結果，第２トレンチ内からは，炉址とみられる焼土がローム面から発見され，また各トレンチ内には，それを囲むようにほぼ規則的にならぶ10本前後の柱穴が検出された（第６図)。住居址であることはまちがいないが，床面や壁は攪乱のため見出すことができなかった。したがって，平面形その他は不明といわざるをえない。土器片は新旧のものが混在しているため，住居址の時期は決めがたいが，埋設土器との関係は無視できないと考えられる。

なお，第３トレンチの全域および第５トレンチの一部は，いちじるしい攪乱をうけており，遺構の発見はのぞむべくもなかった。



第６図　第１地区発見の住居址（数字はローム面より底までの深さを示す）

3. 出土した遺物

土器は，ミカン用ダンボール箱にいれて約5杯ほどが出土した。いずれも破片であり，その総数約6,500個をかぞえる。なかには器形を復原しうるものが2，3ある。時期別にみると，縄文時代中・後期に属するが，勝坂式，加曽利EⅡ式，加曽利EⅣ式，称名寺式などの型式に含められるものは，ごく少量でしかない（図版6）。量的に主体を占めるものは，堀之内Ⅰ式，同Ⅱ式の土器である（図版5，7，8）。

石器としては，打製石斧，石鏃，磨製石斧，石皿片，磨石などが発見されているが，その数は少なく，いずれも1，2例をみるにすぎない（図版8—下）。他に土器片を利用した土錘が2，3個出土している。

以上，第1地区の応急的調査によってえられた所見は，つぎのように概括できる。

1） 地表に散布していた貝は，すでにゴルフ場の造成にからんで破壊・攪乱された貝層が，工事のさいに付近から移動し，第1地区に二次堆積したものと考えられる。

2） 比較的せまい範囲に，かろうじて遺物包含層が残存しており，また貯蔵穴，住居址各1を検出することができた。これらのうち，前者は，縄文後期の堀之内式土器の時期に，また後者は多分中期末の加曽利EⅣ式土器の時期にのこされたものであろう。

V 第2地区の調査

1. 1次調査の概要

常盤台キャンパスの西南隅には，縄文時代中期の土器片が散布しており，分布調査の際にG地点と命名した個所である。今回，この一帯を第2地区とよぶこととする。ここに，職員住宅が建設されることとなり，それに対処する事前の調査の必要が生じた。そこでまず，第2地区遺跡の時期，規模，性格などをあきらかにするための予備調査をおこなうべく，昭和54年7月20日より28日まで，実働7日間を要してその作業を実施した。

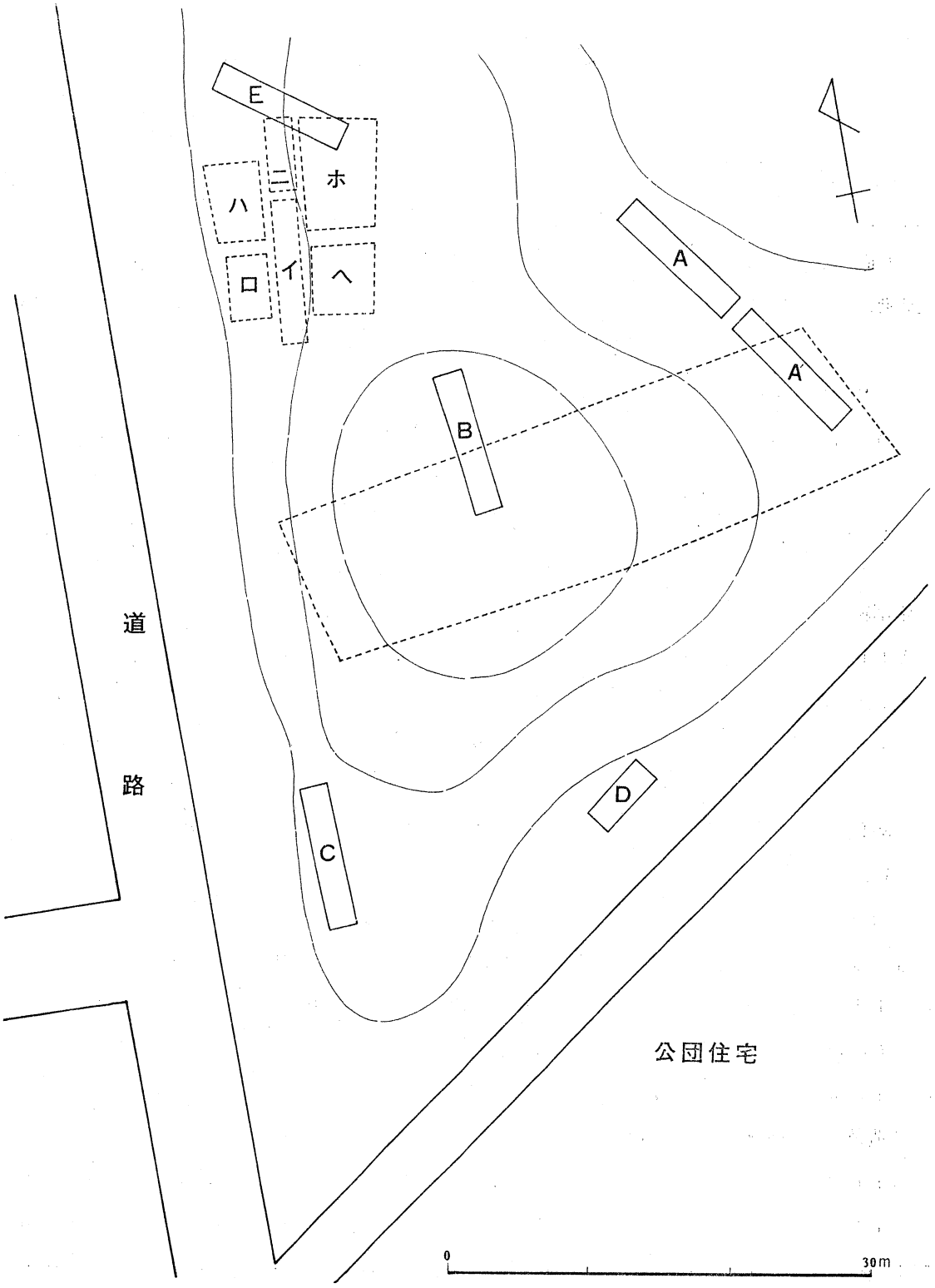
この場所は，一部になおゴルフ場の面影をとどめており，周囲には木立が並び，中央部にはグリーンの部分がほぼ原形をのこしていた。しかし，現在は雑草が生い茂り，荒れるにまかせていた。調査に先立って，これらの雑草を伐採，除去し，各所に適宜トレンチの設定をおこなった。トレンチは，調査必要範囲内にA～Eの5本を配置した（第7図)。以下，各トレンチの発掘結果について記述する。

Aトレンチ（2×10m） 第2地区の北東部に設定した。地表面は北に向けて傾斜している。トレンチの大半はゴルフ場工事のため，ほぼローム面まで削土されており，薄い砂層をはさんで，その上に再堆積の黒土が重なっていた。僅かにトレンチの南端では，この再堆積の黒土の下に，スコリアを含む黒褐色土，褐色土とつづく自然層がみられ，ロームへ移行しているのがみとめられた。表土からローム面までは，80cmをはかる。中期末の土器片数点が出土したにすぎない。

A′トレンチ（2×10m） Aトレンチの南に1mの間隔をおいて延長したものである。ここでは攪乱はみとめられない。地表面はほぼ平らであり，表土（黒土）の下に黒色土がつづくが，上半が純黒色土であり，下半が黒褐色土である。さらに褐色土からロームへ移行する。ローム面には若干の凹凸がみられたが，遺構とみるべきものはなかった（第8図)。もっぱら黒褐色土と褐色土の上部から遺物が出土した。加曽利E式土器の破片，打製石斧などである。ここは遺跡の周辺部にあたるものと思われる。

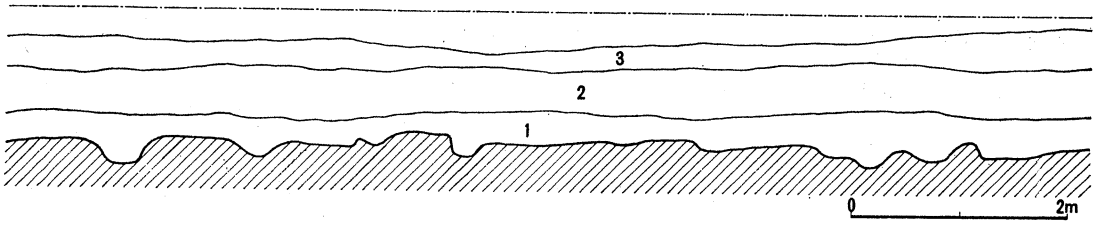
Bトレンチ（2×10m） 第2地区のほぼ中央に南北方向に設定した。笹竹やカヤの根が密生しており，表土の除去にはかなり手間どった。発掘の結果判明したことであるが，再堆積の黒土が約1.5mの厚さでみられ，中央部の一段高い部分はゴルフ場のグリーンであったわけである。部分的にローム面まで掘り下げた。地表から2.3mを測った。下部には，黒色土，黒褐色土，褐色土，ロームとつづく自然層が堆積していた。中期末の土器が検出されたが，遺構はみられなかった。

Cトレンチ（2×10m） 西南隅の低い平坦な部分に設定した。トレンチの北半はいちじるしい攪乱をうけており，地表から50～80cmは，再堆積の黒土や赤土でみたされていた。黒褐色土・褐色土は部分的にかろうじてのこっていた。南半では，表土（黒土)，黒色土，黒褐色土，

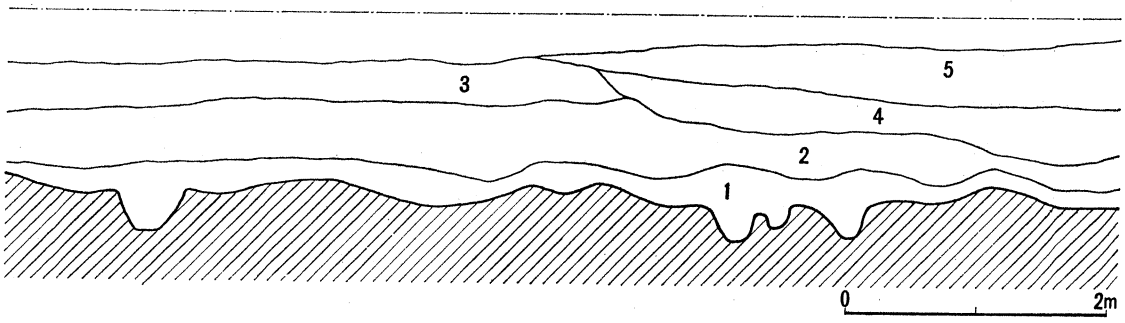


第7図 第2地区の発掘区域

褐色土，ロームとつづく正常な層序が保たれていた（第9図）。攪乱部分の褐色土の上面より，拳大前後の大きさの焼けた礫がかたまって発見されたので，トレンチのその個所を西側に拡張し追求することとした。全部で10数個の礫が約50cmの範囲にみとめられた。集石とよぶべきものであろう。さらに拡張区の断面にかかって，1個の土器が露出した（図版12—上）。一種の



第8図　第2地区A′トレンチの東壁断面



第9図　第2地区Cトレンチの西壁断面

埋甕であろう。加曽利EⅣ式に属するものである。これに関連して住居址の存在が予想されたが攪乱がひどいためそれ以上の発掘は断念せざるをえなかった。

Dトレンチ（2×5m）　第2地区の東南部，公団住宅との間を隔てる塀にそって設定した。ここでは，40〜50cmの厚さのロームブロックや砂を混えた再堆積の黒土が表面をおおっている。その下に，黒色土（20〜30cm），黒褐色土（約20cm），褐色土（10数cm），ロームとつづくノーマルな層序がみられる。加曽利EⅡ式，Ⅳ式などの小破片が少量出土したにすぎない。

Eトレンチ（2×10m）　Bトレンチの北方に設定した。地表は北にむけてごくゆるやかに傾斜している。珍しく攪乱をうけていない。黒色土（約50cm），黒褐色土（約50cm），褐色土（約20cm），ロームとなる。黒褐色土中より多量の土器片が発見された。勝坂式，加曽利E式が主体であり，僅かに称名寺式がみられた。打製石斧，石鏃，黒耀石片なども出土した。遺構こそ検出されなかったが，多量の遺物の出土は，附近にその存在を考えさせるものである。

以上，各トレンチからは，それぞれ多少の遺物が出土した。第2地区がひろい意味での遺跡，埋蔵文化財包蔵地にふくまれることは疑いない。その時期はもっぱら縄文時代中期の後葉に属するが，中葉および後期初頭にもここで人びとの生活のあったことはあきらかである。しかし，確実に遺構とみるべきものは，僅かにCトレンチから発見されたにすぎなかった。また，Eトレンチではその可能性を示す徴候がみられた。つまり，この部分に遺跡の中心部があるものと予想され，A，A′，Dの各トレンチ附近はいわば周辺部にあたるものと考えられる。

2.　2次調査の概要

第2地区内の中央附近に住宅1棟，およびその北側に駐車場を建設する計画が具体化したのにともない，それぞれの個所の発掘調査が必要となった。昭和54年11月27日より12月19日まで

の期間，実働12日間をついやしてその作業を実施した。住宅建設予定地の発掘範囲をⅠ区とし，駐車場の部分をⅡ区とよぶこととする（第7図の点線の区画内）。

Ⅰ区　発掘区の面積は10×40mを測る。1次調査の際に設定したBトレンチにかかっており，ここでは，1.5mほどの盛土のあることがわかっていたから，ブルドーザーを使用して厚い表土を除去することとした。ついで，褐色土下部ないしローム面まで掘り下げ，遺構の確認につとめた。発掘区内からは，19カ所をかぞえる大小の凹みが発見されたが，この大部分はたんなるロームの凹みに褐色土が堆積しており，人為的な遺構とはみとめがたいものであった。しかし，西端部で発見されたピットは，不整円形（直径約1m）のプランを示し，ローム面からの深さ30cmを測る形状のものであった（図版12―下）。一応，土壙としておく。また，ローム面を浅く掘り凹めた部分より，中期末の土器片数個がかたまって出土したが，その直下より炭化した状態の種子が20×10cmの範囲に密集して発見された。一瞬，色めきたったが，この種子はつぶすと中がまだ白く，水気さえふくんでいた。ススキの実その他が識別できたという。あきらかに後世の混入であり，虫などによって運ばれたものと思われる。

結局，Ⅰ区からは，土壙その他が発見されたのみであり，住居址はまったく見出せなかった。全部で50片ほどの土器が出土したが，型式の判別しうるものは，いずれも加曽利E式土器であった。

Ⅱ区　ここは1次調査の際，Eトレンチを発掘し，多量の遺物をうるとともに，附近に住居址の存在を予測しえたところである。今回，まずはじめに，南北方向のトレンチ（2×10m）を掘ったところ，中央部より埋甕炉が発見され，住居址の存在が確実となった。また，2.5m離れた位置にさらに別の埋甕炉が見出された。住居址は重複しているとみなされる。このため，周囲に発掘区を拡張することとなり，トレンチをイ区としそれぞれ隔壁をのこしながら，逆時計まわりにロ，ハ，ニ，ホ，への各区を設定したのである。しかし，この重複した住居址の発掘には十分な調査体制と期間が必要であることから，各区の発掘は表土の除去に限り，それ以上の作業は他日を期することとしたのである。

3.　3次調査について

a　調査の経過

本調査は，横浜国立大学職員宿舎敷地内の整備事業に伴う事前調査であり，さきの二次にわたる予備調査の経過をふまえておこなわれた。発掘区の設定は予備調査でのグリッド法を採用し，各区をイ～ヘ区の6区に分け，それを単位発掘区として調査を進めた。調査期間は，昭和55年3月17日から，同年3月26日までである。

3月17日　雨　各区ごとに排土作業を開始する。予備調査で観察された土層セクションの実測もあわせておこなった。

3月18日　晴時々曇　排土作業。ローム面の確認及び包含層出土遺物の観察をおこなう。

3月19日　曇　各区で遺構の検出が進められる。集石1・土壙1・住居址プラン5及び埋甕炉3が検出された。

3月21日　曇　ピット群及び住居址の発掘を開始する。集石周辺の観察と実測をおこなう。

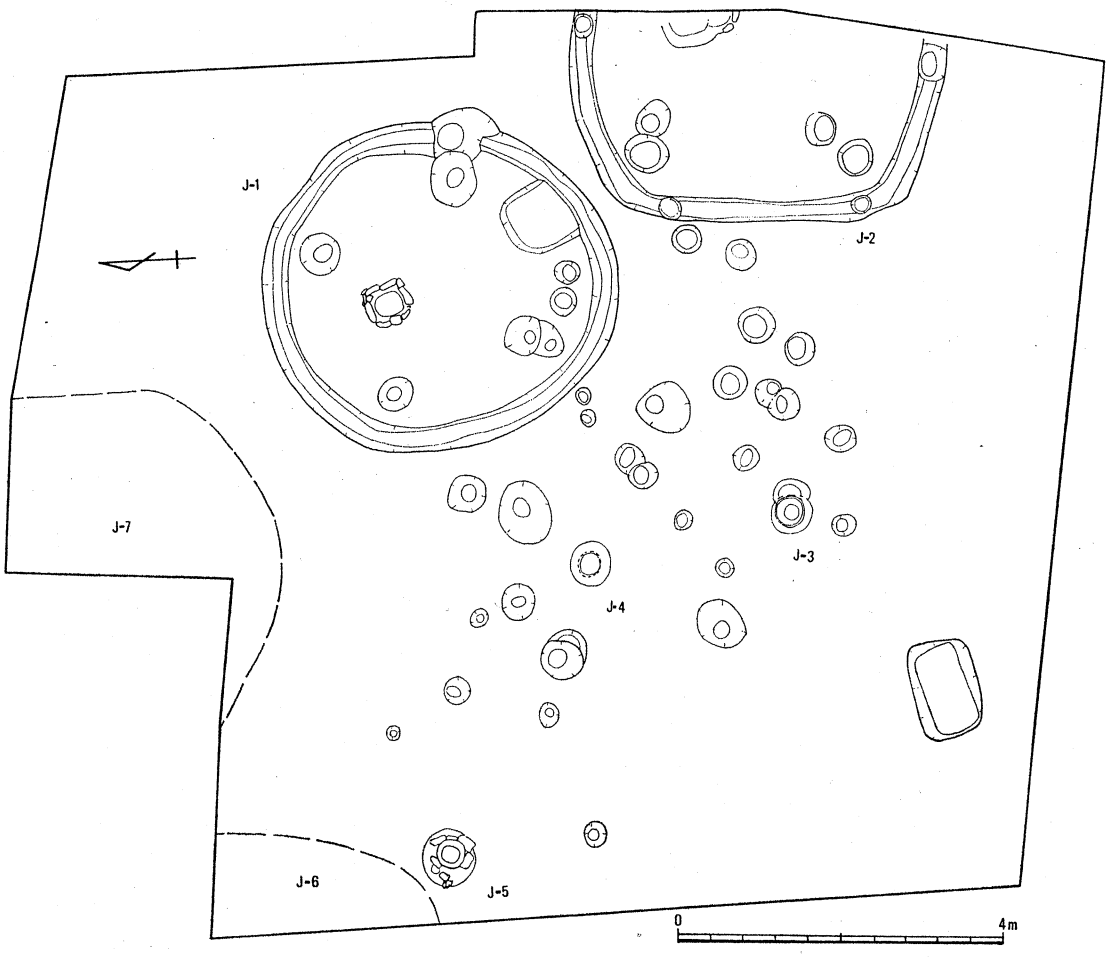
3月24日　曇時々晴　住居址2軒の発掘及び出土遺物の実測，撮影を実施。土壙の土層観察・実測をおこなう。

3月25日　曇　前日分の継続。遺構の実測，遺物の取り上げをおこない全景を撮影する。

3月26日　曇のち晴　埋甕炉，石組炉の実測，取り上げをおこなう。各遺構の写真撮影を終える。午後，保存のために各遺構をシートで覆い，埋め戻し作業をおこない調査を終了した。

b　住居址とその他の遺構（第10図　図版15）

今回の調査では，縄文時代と考えられる遺構は，土壙が1基，住居址が7軒，集石が1基確認されている。土壙については，さきの予備調査でも1基確認され，検出地区にさほどの距離がないことなどからそれらと同一のものと考えられる。遺物は検出されなかったが，形態など縄文早期の陥穴と称されるものに類似している。住居址は7軒のうち5軒を調査した。いずれも縄文中期中〜後半の時期に属するものである。集石については，住居址と重複しており，遺物の検出はなかったが，住居址の埋没中ないし埋没後の構築が確認されている。



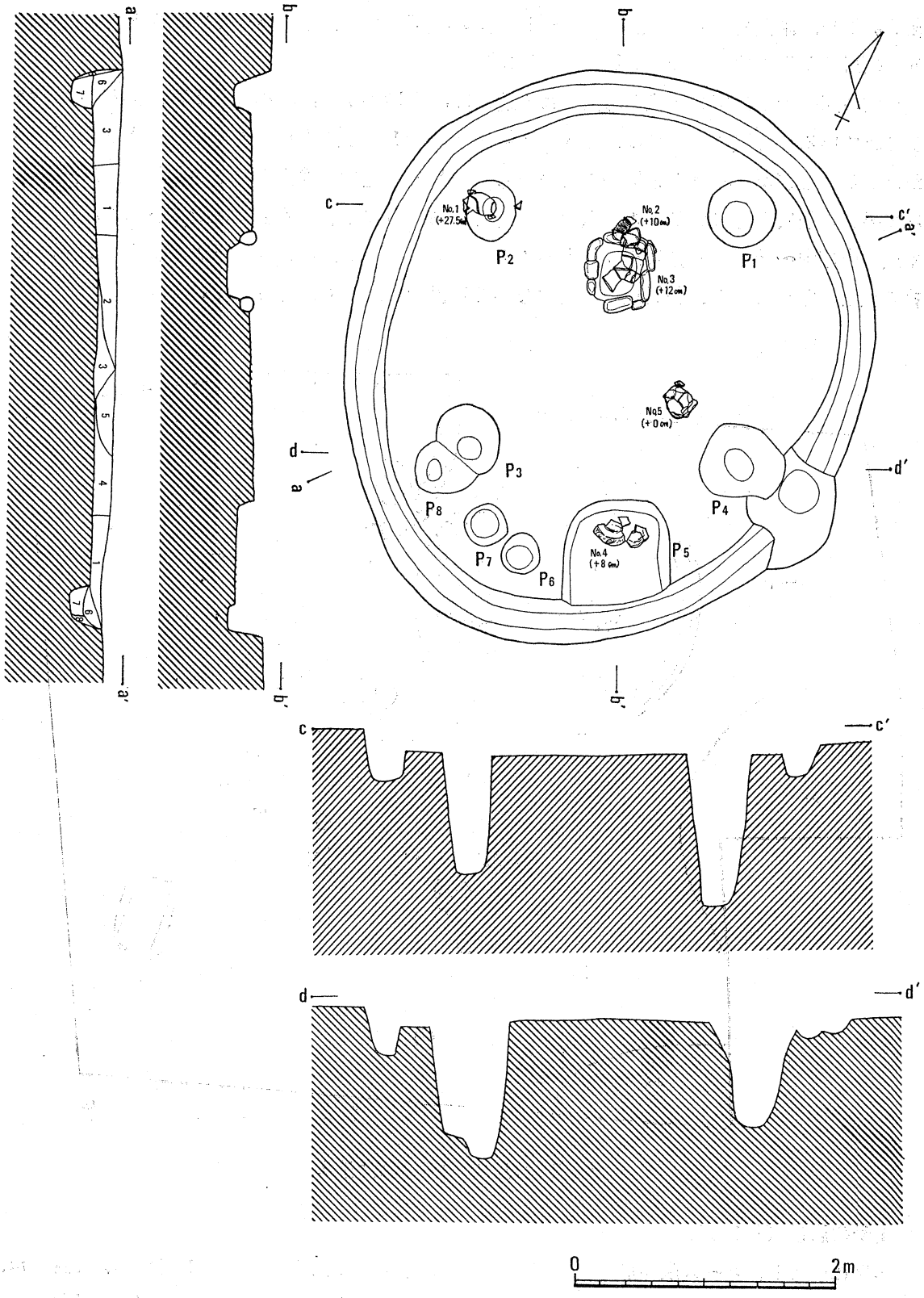
第10図　住居址群とその他の遺構

1号住居址（第11図）

ホ区に位置し，ローム漸移層上面で確認された。平面形はほぼ円形を呈している。東西4 m，南北4.45mを測る。壁面は全周囲とも明瞭に立ち上がり，最高で23cmを測る。床面は炉の周囲

が比較的良く踏み固められ，堅緻であった。それ以外は壁寄りにいくにしたがい軟弱になる。全体に平坦であった。

付属施設としてピット８本，石組炉が確認された。ピットは，柱穴が５本，貯蔵穴１本及び不明の小ピット２本である。柱穴はいずれもほぼ円形を呈し，径40～60cm程で，P_1(—114cm)



第11図　１　号　住　居　址

・P^2（—90cm）・P_3（—102cm）・P_4（—80cm）・P_8（—79cm）である。P_5は貯蔵穴と考えられ，平面形は隅丸方形を呈し，底面は平坦である。一辺82cm，深さ13cm程を測る。P_6・P_7はほぼ円形で，径10cm，深さ約20mである。炉は中央よりやや北側に位置している。浅い掘り込みをもつ石組炉である。掘り込みは隅丸長方形を呈し，48cm×42cm×18cmを測り，底面は皿状を呈している。石組に用いられた石材は大形の石皿の破片である。火熱を受けている。炉内には焼土はほとんど認められず，黒色の軟かい土を混じている。

住居址の壁周辺に溝を有しており，断面U字状を呈する。上幅25～30cm，深さは床面より15～20cmを測る。壁に関わる施設と考える。覆土は8層に区別される。1層は攪乱を受けている。2～3層は暗褐色を呈し，スコリア・ローム粒子を含む粘性の強い層である。各層は，焼土粒ロームブロック等の含有物や締りの若干の違いで分けられる。7層は明褐色土である。ロームブロックを含む締りの強い層。8層はローム等の埋め戻しの軟質の層である。

遺物は，加曽利EⅡ式期の土器が検出されている。第11図中の遺物の数字cmは床面よりの高さをあらわす。

2号住居址（第12図）

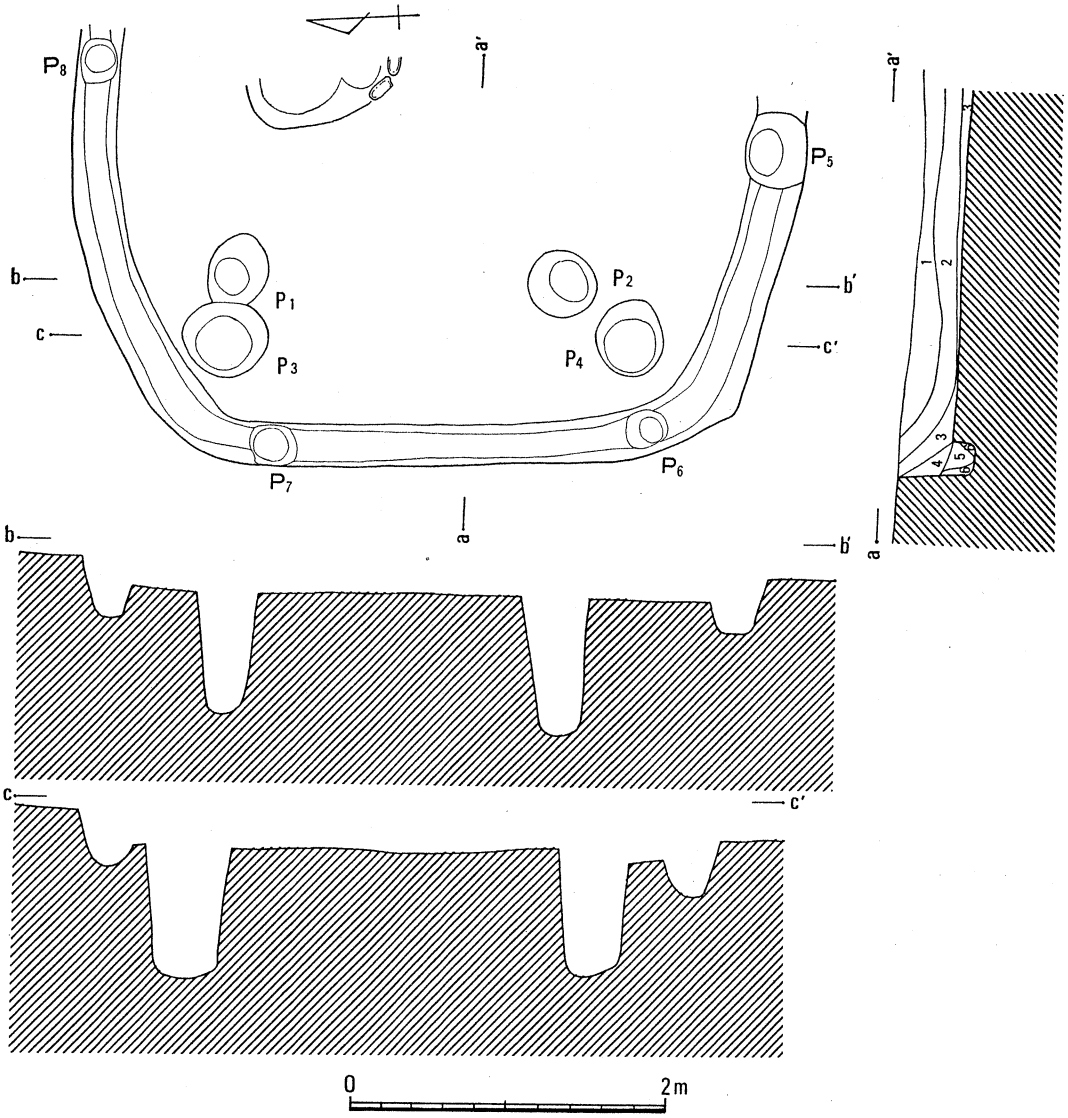
ホ～ヘ区に位置し，ローム漸移層上面より検出された。調査範囲にかかる半分程を調査した。住居の拡張が行われたと考えられる。平面形は隅丸方形を呈している。一辺約4.70cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面より35cmを測る。床面は炉の周辺は比較的堅いが，周辺にかけては軟弱である。中央がやや低く，起伏は少ない。

付属施設は柱穴が4本，炉が重複して確認されており，壁溝が全周している。柱穴は2本ずつ2組の確認で，外側のピットは拡張によるものである。P_1・P_2内はロームの埋め戻しによる土層で充塡されていた。各ピットはほぼ円形を呈し，径40～56cm程で，P_1（—76cm）・P_2（—85cm）・P_3（—81cm）・P_4（—74cm）を測る。炉は北側に寄って位置している。埋甕炉であり南側に石組の一部を有している。重複しているが内側のものが新しく，焼土の堆積はあまり厚くなく使用期間の短いものか。壁溝は断面U字状を呈し，上幅25～35cm・深さ13～20cmを測る。壁溝内底面よりピットを確認した。南・北溝底ではほぼ中央に1本，西溝底にはコーナー寄りに各1本の計2本を有しており，P_5は径40cm，他は径25cm程を測る。深さは40cm前後である。古い時期の壁溝の確認はできなかった。

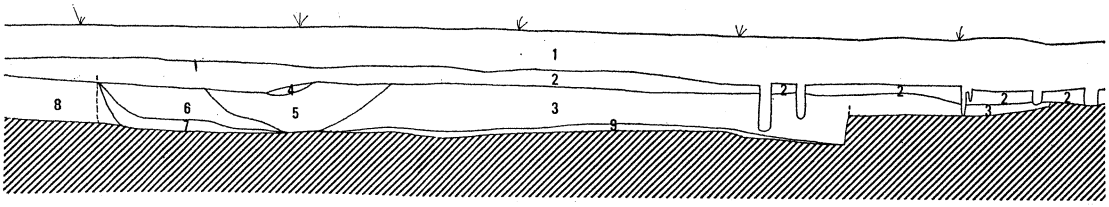
覆土は7層に区別される。1～6層は暗褐色を呈し，ローム粒子・スコリアを含み，含有物の量や粘性・締りの強さに若干の違いが認められるものである。下層になるに従って明度を増している。7層はロームブロックによる埋め戻しの軟質層である。遺物は床面より加曽利EⅡ式期の土器が出土している。

3号住居址（第14図）

イ区に位置し，包含層中に生活面を有していたと考えられ，本住居址は炉のみ確認された。柱穴の確認を行ったが南方で不明で，北方では4号住居址等の複数のピットとの関連を確認するにとどまった。炉は埋甕炉である。胴部下半を欠損するキャリパー形の深鉢形土器を中央に有する。平面形は円形を呈し，径50cm，深さ30cm程を測る。断面はU字状を呈する。炉址内の



第12図　2　号　住　居　址



第13図　イ・ニ区東壁の断面

1層	黒褐色土	砂粒を多量に含む。ロームブロック・粘土小ブロックを含む。ザラザラで締りなし，粘性弱。
2層	黒褐色土	砂粒を少量含む。ローム粒子・赤色粒子を多量に含む。粘性強くやや締り弱い。
3層	暗褐色土	ローム・赤色粒子含む。密度高く，粘性大。締り強く，土器，礫を含む。
4層	暗褐色土	ローム・赤色粒子含む。3層とほぼ同じだが，攪乱の影響でやや暗い。
5層	暗茶褐色土	ローム・赤色粒子を多量に含む。土器等遺物を包含する。粘性強く，締り強い。
6層	暗茶褐色土	ローム・赤色粒子・炭化物を含む。5層より少し暗い。粘性強く，締り強い。
7層	暗茶褐色土	ローム・赤色粒子を含む。6層よりやや暗い。粘性強く，締り強い。
8層	暗褐色土	褐色ブロック・スコリアが含まれる。ローム粒子少量。粘性やや弱く，締りやや強い。
9層	明褐色土	ロームブロックが多量に含まれている。褐色ブロック・ローム粒子・スコリアを含む。粘性強く，締り強い。

覆土は2層に区別され，1層は黒色土で，焼土粒子を多く含み，粘性弱く締っている。2層は明褐色土でロームブロックを多く含む粘性の強い，締りのある層である。

土器の内面は火熱を受けたため脆弱である。本土器は口径35cm，現高30cm程を測る。加曽利EⅡ式期のものである。

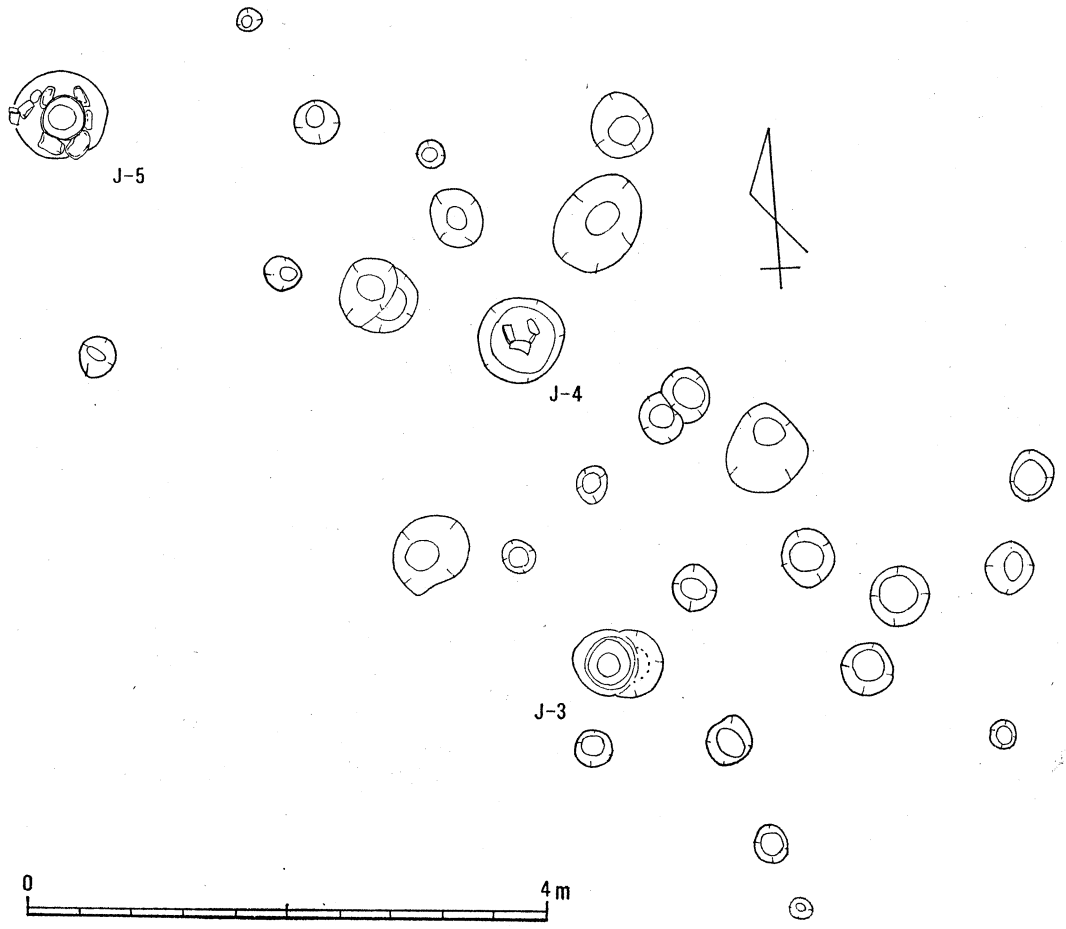
4号住居址（第14図）

イ・ハ区に位置し，プランの確認ができずに炉のみの検出が行われた。炉は埋甕炉である。¾ほどの深鉢形土器の胴上半が埋設されている。炉の平面形は円形を呈し，径65cm，深さ18cm程を測り，断面は舟底形を呈する。炉址内の覆土は1層で，黒褐色の焼土混じりのサラサラした層である。

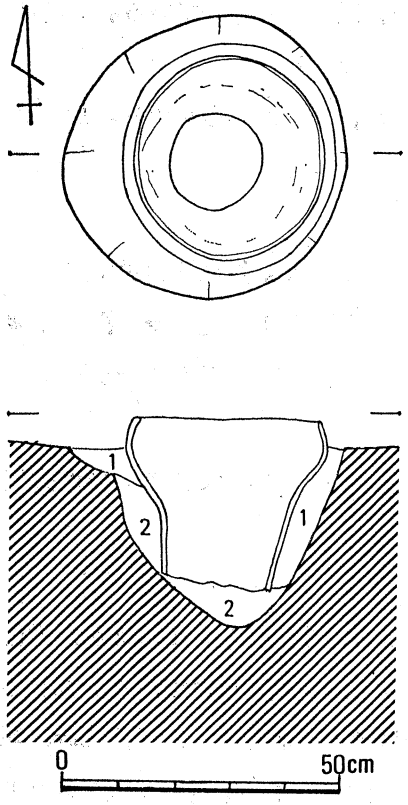
土器は破損し，原形をとどめていない。火熱を受けているが，割合い堅緻である。勝坂式期のものである。

5号住居址（第14図）

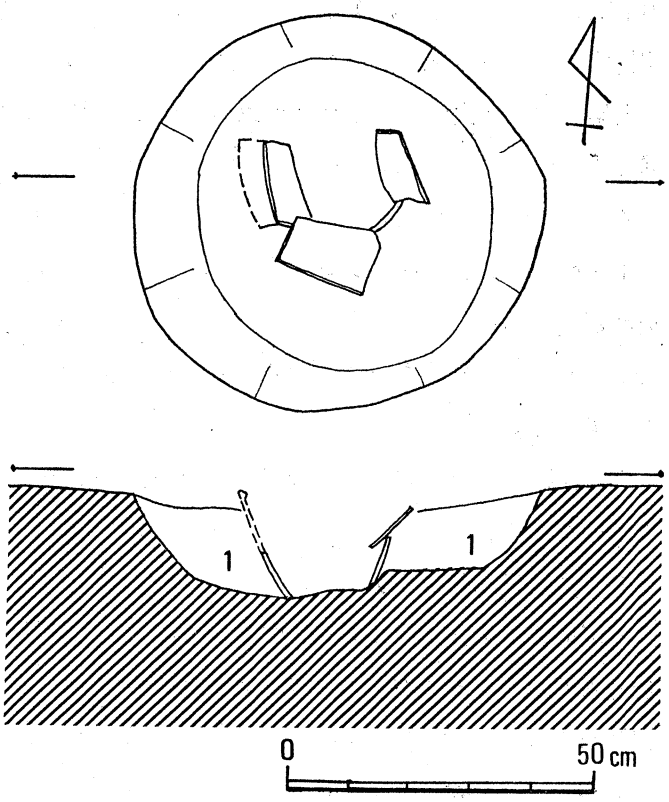
ハ区に位置し，プランの確認はできなかった。炉及びピット群の検出にとどまったが，本住居址も西側が調査区外となり全貌の把握ができなかった。炉は土器埋設石組炉である。丸長の河原石を用いて中央の深鉢形土器を固定している。炉の平面形は楕円形を呈し，長径75cm，短径67cm，深さ25cm程を測る。断面は舟底形を呈している。覆土は1層で，暗褐色を呈しスコリ



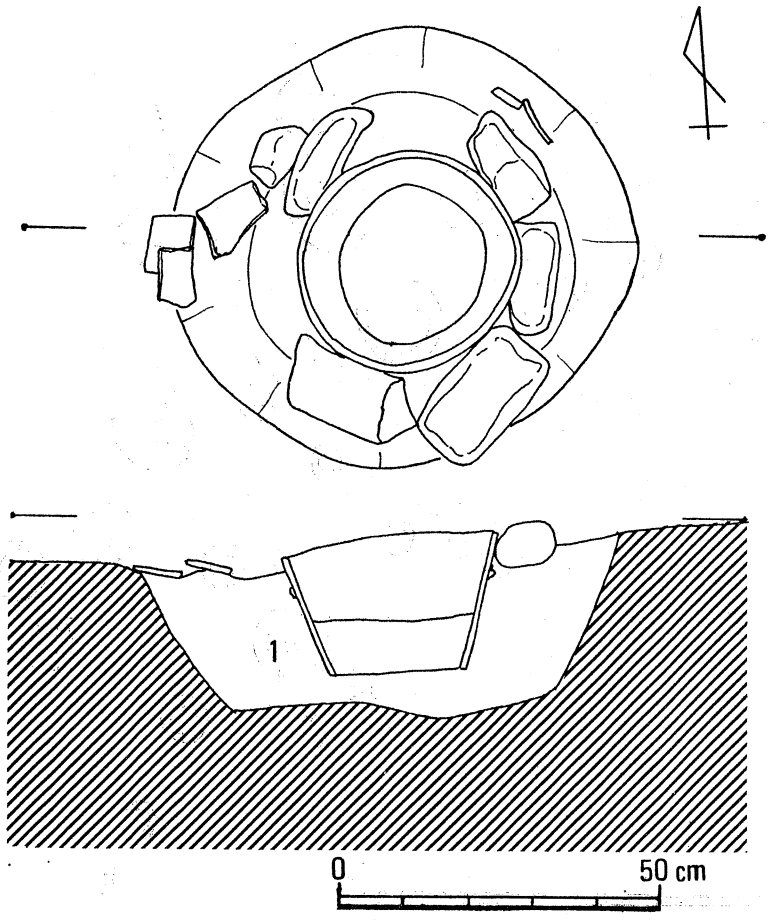
第14図　3～5号住居址



第15図　3号住居址の炉址



第16図　4号住居址の炉址



第17図　5号住居址の炉址

ア・ローム粒子を含む，粘性の強い締りのある層である。

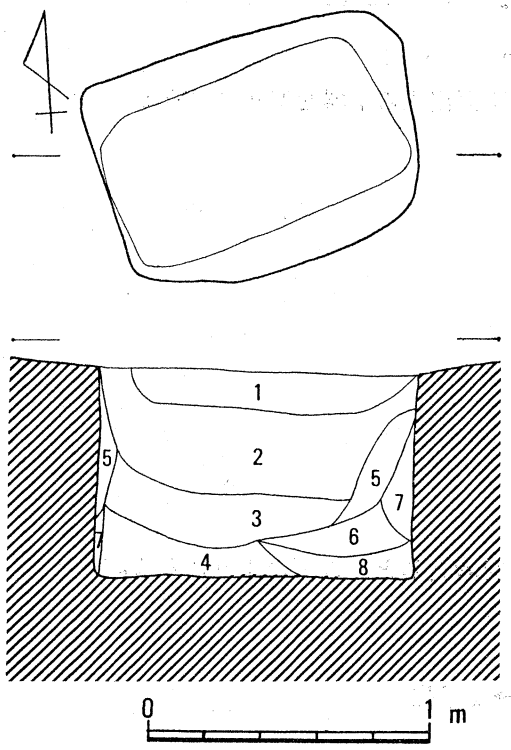
埋設土器は胴部下半を欠いた深鉢形土器を用いており，4方に把手を有する。内側に焼土の混じる黒色土が少量残されていた。土器内面は火熱による剝落はほとんど認められない。勝坂式期のものである。

土壙（第18図）

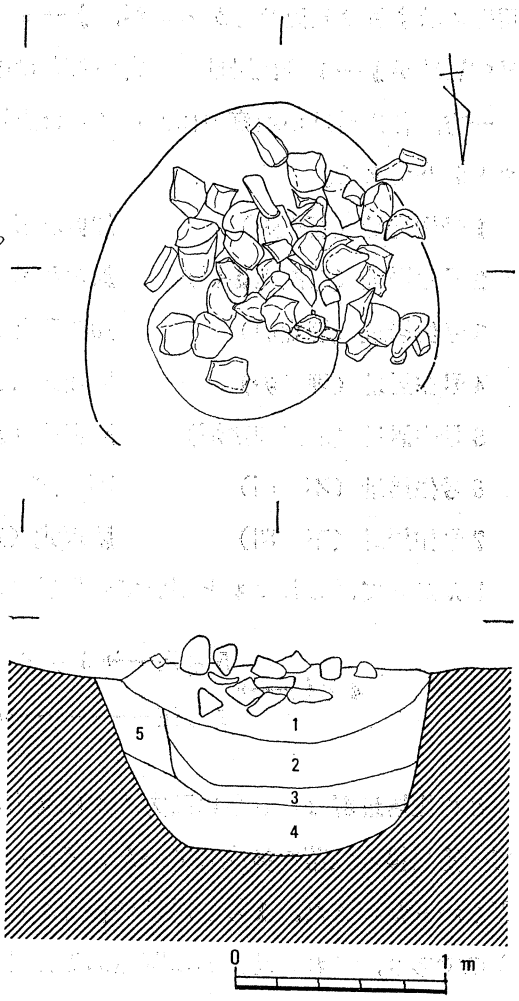
ロ区にある1基のみを確認した。ローム漸移層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し，長径114cm，短径82cm，深さ73cmを測る。壙底の平面形も隅丸長方形を呈し，長径102cm，短径58cmを測る。長軸方向はN－79°－Eである。断面形は舟底形を呈し，短軸方向はオーバーハングしている。壙底には何ら付属施設は認められなかった。

覆土は8層に区別される。1層は黒褐色で，スコリア・褐色ブロック・粘土小粒を含み粘性が強い。2層は黒褐色で，スコリアを多く含む。1層より明るく，粘性強く締りやや弱い。3層は黒褐色で，ローム粒子・スコリアを多く含む。粘性・締りのやや弱い層。4・5層は暗褐色を呈し，ロームブロック・ローム粒子・スコリアを多く含む。粘性の強い層。6・7層は明褐色を呈し，ロームブロック・ローム粒子・スコリアを多く含み，粘性が強い層。7層は締りがやや弱い。8層は暗褐色を呈し，4層より明るい。遺物は検出されていない。

集石（第19図）



第18図　ロ区発見の土拡



第19図　1号住居址覆土出土の集石

ホ区に位置する1基のみである。1号住居址の東壁側で重複している。確認面は包含層最下層の暗褐色土中下位であり，掘り込みはローム層中にまで達している。

掘り込みの平面形はほぼ円形を呈し，径90㎝，深さ40㎝程を測る。断面は舟底形を呈している。覆土は5層に区別される，1層は黒褐色を呈し，スコリア・ローム粒子を多量に含む。粘性・締りの強い層。3層は暗褐色でスコリア・ローム粒子を含む，粘性・締りの強い層。3層は暗褐色でロームブロックを含む，粘性・締りともに強い層。4層は明褐色を呈し，ロームブロックを多量に含み，粘性・締りの強い層。5層は暗褐色で，ロームブロック・褐色ブロック・ローム粒子を含む，粘性・締りがやや強い層である。

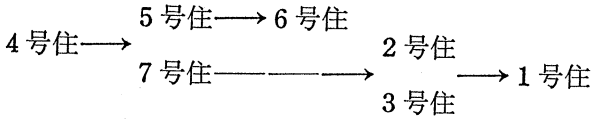
礫は約60個を数え，ほとんどが同一層中にある。礫は中央に厚く集中し，破砕したものがほとんどで，大きさは一様でない。火熱は受けていない。土壙の中心にほぼ円形に近い拡がりを呈する。これらの礫の内より石器が検出されている。本集石の時期を決めるべき遺物の出土は認められていないが，1号住居址の一部を破壊して構築されていることが確認されている。

Ⅱ区の発掘面積110㎡の範囲内からは，以上のような各遺構が発見されたが，他に未調査の竪穴住居址2軒が確認されている。したがって，この狭い場所に計7軒の住居址が存在したわけであるが，これらは当然時期を異にしていとなまれたものである。発掘によって重複関係を明確に示す例は見出せなかったが，J－6号住居址はJ－5号住居址より新しく，またJ－4号住居址がJ－1号住居址より古いことは確実である。

一方，各住居址の埋甕炉に使用された土器，および床面出土の土器を型式別にみると，つぎのとおりである。

1号住居址（石組炉）	加曽利EⅡ式（新）
2号住居址（石組埋甕炉）	加曽利EⅡ式（古）
3号住居址（埋甕炉）	加曽利EⅡ式（古）
4号住居址（埋甕炉）	勝坂式（古）
5号住居址（石組埋甕炉）	勝坂式（新）
6号住居址（不　明）	不　詳
7号住居址（不　明）	勝坂式（新）

したがって，これにもとづいて各住居址の新旧関係を考えると，以下のようになる。



この住居址群は，さらに西方または北方に連続して存在しているものと予想され，全体として一定規模の集落を構成していたと考えられる。今回は，その一部に発掘の手を及ぼしたにすぎなかった。また，1号住居址の覆土から発見された集石は，それが埋没したのちに営まれたものであり，これと時期的に関連ある住居址は第2地区には発見されていない。第1次調査の際，Cトレンチ内から集石が出土したが，これは加曽利EⅣ式土器にともなうものであった。

なお，陥穴と考えられる土壙は，住居址群よりはさらに古い縄文早期のものとみなされる。

c　出土遺物

Ⅱ区内からは多量の遺物が出土した。その量は，整理用平箱に入れて約50個ほどを数える。圧倒的多数の土器の他には，やや多くの石器類と若干の土製品がある。ひととおりの整理作業を終えたので，その概略を紹介する。

土　器

完形ないしそれに近い形の土器，約10個のほかはすべて破片であり，その総数は5,000個をこえる。いま，これらを便宜的につぎの三つのグループに大別する。

Ⅰ群　縄文時代中期中葉（勝坂式・阿玉台式）

Ⅱ群　縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式および併行型式）

Ⅲ群　縄文時代中期末（加曽利ＥⅣ式），同後期初頭（称名寺式）

Ⅰ群（図版21～23）　まず埋甕炉として利用されたものに，４号住，５号住の土器がある。前者は大形の破片にすぎないが，三角形沈刻文その他の文様からなり，やや複雑な構図をあらわしている（図版21—3)。勝坂式土器のうちでも，比較的古い部類に属するものである。後者は隆線と平行沈線からなる４単位の文様帯を構成している。胴下半と口縁の一部を欠いているが，口縁から底部にかけて屈曲をもたない単純な器形とみてよい（１)。

Ⅱ区内出土の土器の約２割弱がⅠ群で占められるが，これらはイ区，ロ区，ハ区および１号住の覆土にとくに多かった。図版21の２は，１号住の覆土，４はイ区の出土である。７号住の覆土および床面から採集された土器は，ほとんどが新しい要素をもつ勝坂式であった（図版23の下半)。またハ区には，古い要素とみなされる勝坂式が発見されている（図版22)。の阿玉台式と認定できるものは，全部で数片をかぞえるにすぎない。

Ⅱ群（図版24～32）　３号住の炉体土器は，口辺部に６単位の渦文が配され，胴部には直線と波状の沈線がみられる（図版24—1)。加曽利ＥⅡ式である。２号住の炉址にも埋設土器が使用されていたが，そのまま埋戻したため実体はあきらかでない。しかし，加曽利ＥⅡ式であることは確実である。床面付近からは，図版24の２・３・４に掲げた土器が出土した。３は口辺部に波状の隆線をもち，空白部をのこして胴部文様（平行と波状の沈線）に移行する。２・４は縄文のみのものである。１号住の床面および覆土より５個体の土器が発見された（図版25—2，図版29—1・2・4，・図版31—2)。このうち図版29の１（第11図中の№5）が床面，他は床面上８～27.5cmの覆土から出土したものである。いずれも加曽利ＥⅡ式および併行型式（曽利式の系統に含められるもの）に属するが，覆土出土のものはそのうちでも新しい要素をそなえている。

Ⅱ群土器はⅡ区出土の土器片の８割強を占めており，膨大な量にたっする。１号住，２号住の覆土の他，イ～ヘの各区から発見されているが，ホ区，ヘ区に集中的に多い。

土器型式としてみた場合，加曽利ＥⅡ式とその併行型式に分類できる。前者の口辺部文様は，隆線による渦文が圧倒的に多く，僅かに波状その他がみられる。渦文の表現には若干のバラエティーがある（図版25～27)。そして，なかには加曽利ＥⅠ式と認定すべき性質のものも

含まれている。胴部文様は，沈線による懸垂文が一般的であるが，隆線その他もみられる（図版28）。

併行型式とよんだものは，その大部分が甲信地方に分布の主体をもつ曽利式土器である（30～32）。これらは，加曽利式EⅡに共伴したものであり，その量的な割合は約1：4である。集合条線を地文とし，その上に粘土紐の貼付による波状その他の文様を構成している。縄文を地文とするものも，僅かながらみられる。

Ⅲ群（図版33）　このグループに含められる土器は，いたって少ない。図版22に示したものが，そのすべてである。左上の完形土器は，Cトレンチから発見されたものであり，口辺部に一条の隆帯がめぐり，それ以下はたんなる斜縄文である。高さ約30cmを測る。右上の大きな破片はⅠ区よりの出土品であり，同じく口辺部に隆帯があり，それ以下に無節の縄文を細い沈線で区画した単純な磨消縄文がつづく。これらは加曽利EⅣ式と認定できるものである。

曲線的な凹線で表現された磨消縄文をもつ土器は，あきらかに称名寺式に属するものである。Eトレンチから出土した（図版33左下）。また，細い沈線からなる磨消縄文や沈線のみの破片もみられるが，これらは称名寺式に併行または直続する時期の所産であろう。

石　器

もっとも多く発見されたのは，打製石斧である。総数100個をこえる。このうち，完形のものが半数を占める。いわゆる短冊形，ないし撥形を呈するものが多く，ついで分銅形がみられる（図版34～36）。粘板岩，頁岩，安山岩，ホルンフェルスなどを石材としている。最大のものは長さ15cm，最小のものは7cmを測る。欠損品についてみると，その個所はまちまちであるが，刃部に近い部分で折れたものが目立つ。

磨製石斧は2例出土した。いずれも欠損しており頭部のみをのこす。いわゆる棒状斧である（図版37ノ上）。

石鏃は全部で5個が採集された。うち4例は黒耀石製であり，えぐりこみを有する。1例は硅岩製で二等辺三角形状のものである（図版38ノ上）。大きさは一定していない。

石錘，扁平な礫の両端または両側縁に打欠きによる糸かけをもつものである。5個出土している（図版37ノ下）。

凹み石1個がCトレンチから出土した。平坦な凝灰岩の両面に，多数の穴がみられる。厚さ5.5cm，長さ25cmを測るが，一部を欠いている（図版38ノ下）。他に，礫器，磨石，石皿片，たたき石などがある。いずれも中期の土器にともなったものとみてよい（図版37）。

土製品

土器片利用の土錘1個と，同じく土製円盤9個がある（図版38ノ中）。前者は勝坂式土器の破片に切りこみによる糸かけをつけたものである。後者は土器片を擦って形を円くととのえたものである。大きなものは直径3.5cm，小さなものは2cmを測る。文様をとどめているものが4例あるが，加曽利E式に属するものであろう。

Ⅵ　ま　と　め

Ⅱ章で述べたように，常盤台の地には多数の埋蔵文化財の包蔵地が存在する。このうちM地点1カ所を除き，他はすべて縄文時代の遺跡である。いまこれらを時期別に整理してみると，表のようになる。早期5カ所，前期1カ所，中期8カ所，後期8カ所，晩期0である。中期，後期の遺跡がもっとも多く，ついで早期の順となる。いうまでもなく，それぞれの時期に概ねその場所で，人びとの生活が営まれた結果にほかならない。

いったい，その生活はどのようなものであったのだろうか。A地点（第1地区）とG地点（第地区）について，不十分ではあったが発掘調査を試み，その問いに応えうる若干の資料をうることができた。

地点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
早期						○					○				○	○			○
前期																			○
中期	◎		○				◎	○	○	○		○							○
後期	◎	○	○				○					○					○	○	○
晩期																			
備考	第1地区			礫のみ	時期不詳		第2地区						土師器	時期不詳					

常盤台の遺跡　（◎：遺構・遺物の発見されたもの　　○：遺物のみが採集されたもの）

中期の段階に，第2地区附近に集落が存在したことは確実である。その規模，形状などは不明であるが，今回竪穴住居址群の発掘された南西方向（道路をへだてた住宅地）に，さらにそれが延びているであろうことが本来の地形から推して予想できる。おそらく，1時期に数軒程度の住居が半円状ないし弧状にならんでいたとみなされる。この集落は，中期の中葉から後葉まで随時断続的に営まれたものであったろう。この集落の人びとは，貝塚をまったくのこさなかった。後期の場合と比較して，いちじるしく対照的である。もちろん，海の資源に生活を依存しなかったというわけではない。石錘・土錘を漁網用のものとすれば，それを使っての漁撈をも想定すべきであろう。石鏃が示すように，弓矢による狩猟もおこなわれた。しかし，なによりも特徴的なことは100個をこえる多量の打製石斧の出土である。この土掘具は，もっぱらヤマノイモやクズなどの根茎類の採掘に使用された。また，磨石・石皿・凹み石は，ドングリなどの堅果類の調理具でもある。これらをあわせ考えれば，植物性食料の占める比重の大きさをみとめないわけにはいかない。

後期の前葉に，第1地区とその周辺に貝塚群が形成された。これには，環境の変化（小海進）が作用していたと考えられる。海がより身近な存在となったのである。この段階の集落につい

ては，知るべき手がかりを与えられていない。どのくらいの数の竪穴住居があったのだろうか。ここでは，いぜんとして狩猟も植物性食料の採集もつづけられた。貯蔵穴は，ドングリなどを貯えておく施設とみなされている。貝塚が姿を消すのと時を同じくして，常盤台の地に人影は絶えてみられなくなる。

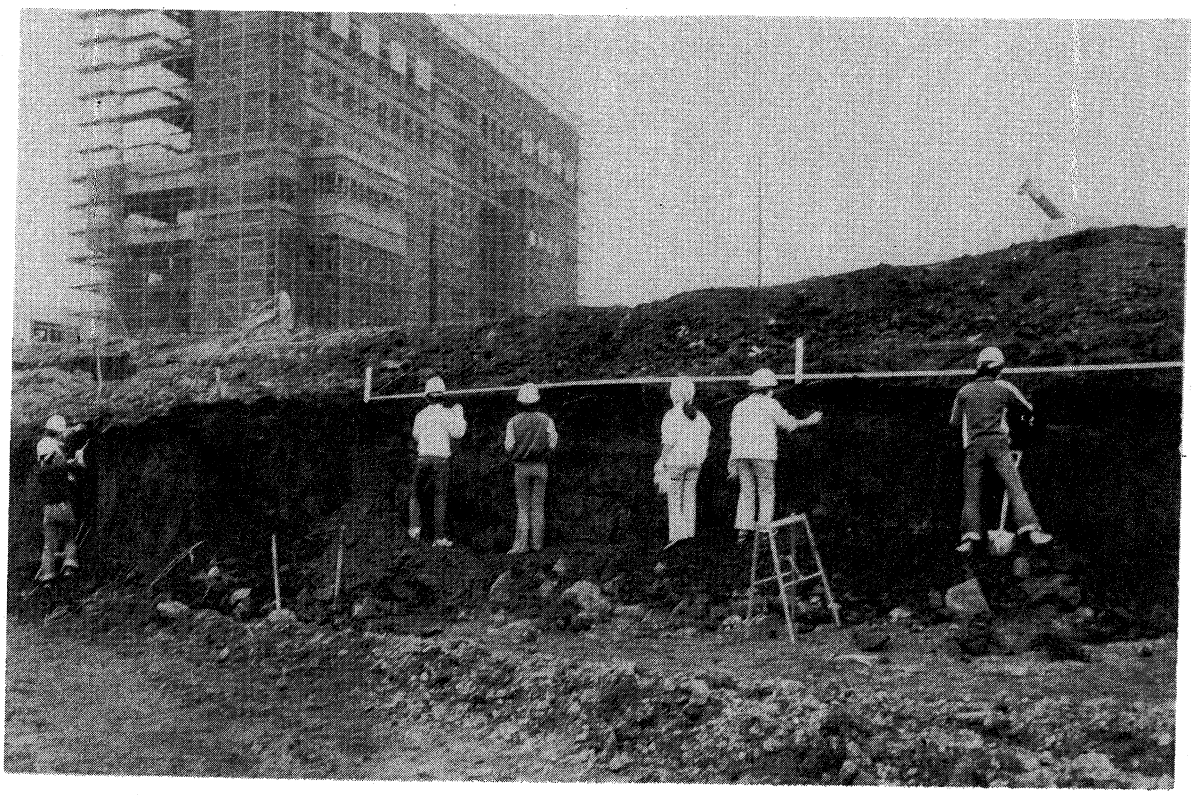
常盤台の遺跡は，いわば満身創痍の状態にある。それだけにわれわれのささやかな調査の結果を中心に，できるだけ十分な報告書をまとめておく必要があったのだが，主として時間的な制約のため，それが果せなかった。出土した遺物は，本学の歴史学教室に保管してある。また，第2地区の住居址群は，そのまま埋戻してある。その保存活用について，適切な措置が講ぜられねばならない。

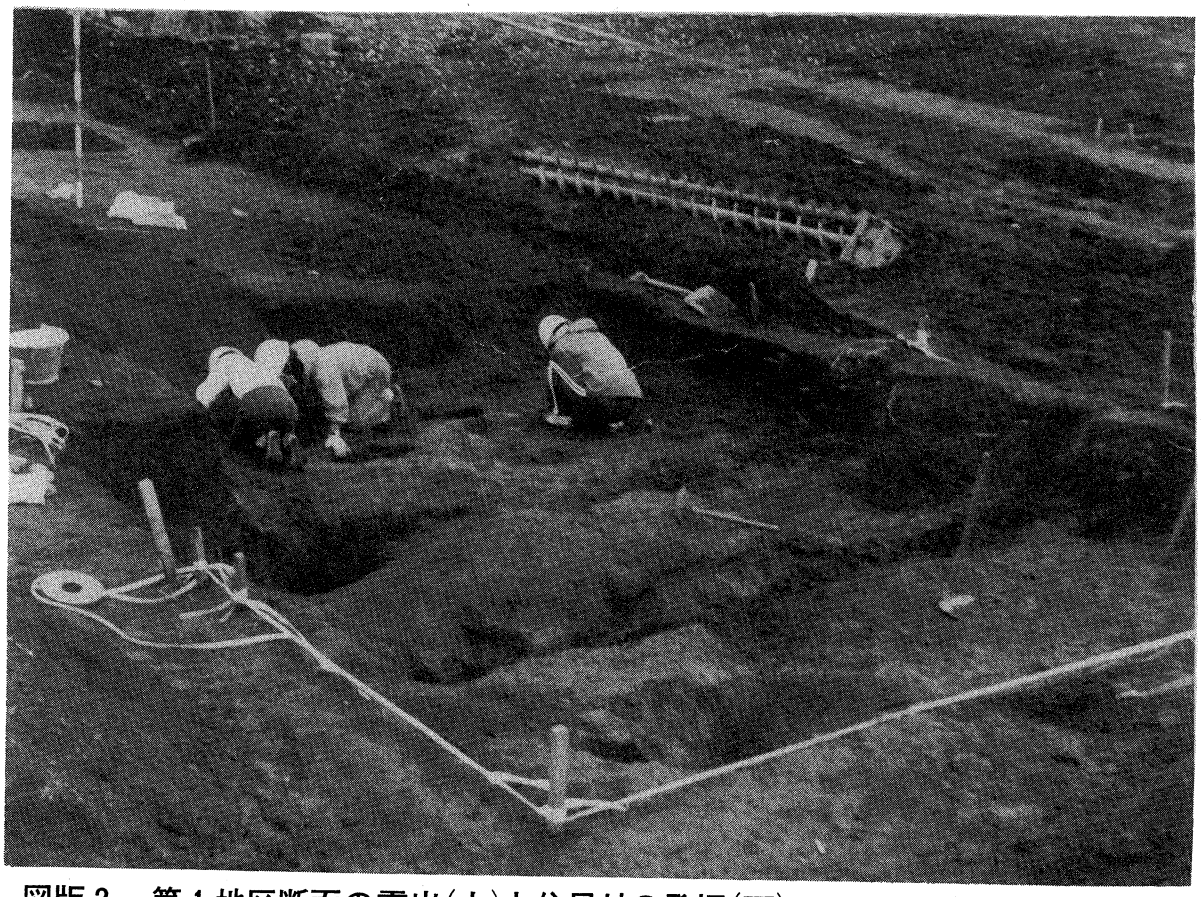
なお，発掘調査ならびに遺物の整理には，本学の歴史専攻の学生，および一般の方がたが参加協力して下さった。あらためて謝意を表する。また，一部原稿の執筆，挿図の作成等にさいしては，武井則道，小坂井孝修，中島初子の各氏の手を煩わした。ともどもお礼申し上げる。

（岡本　勇）

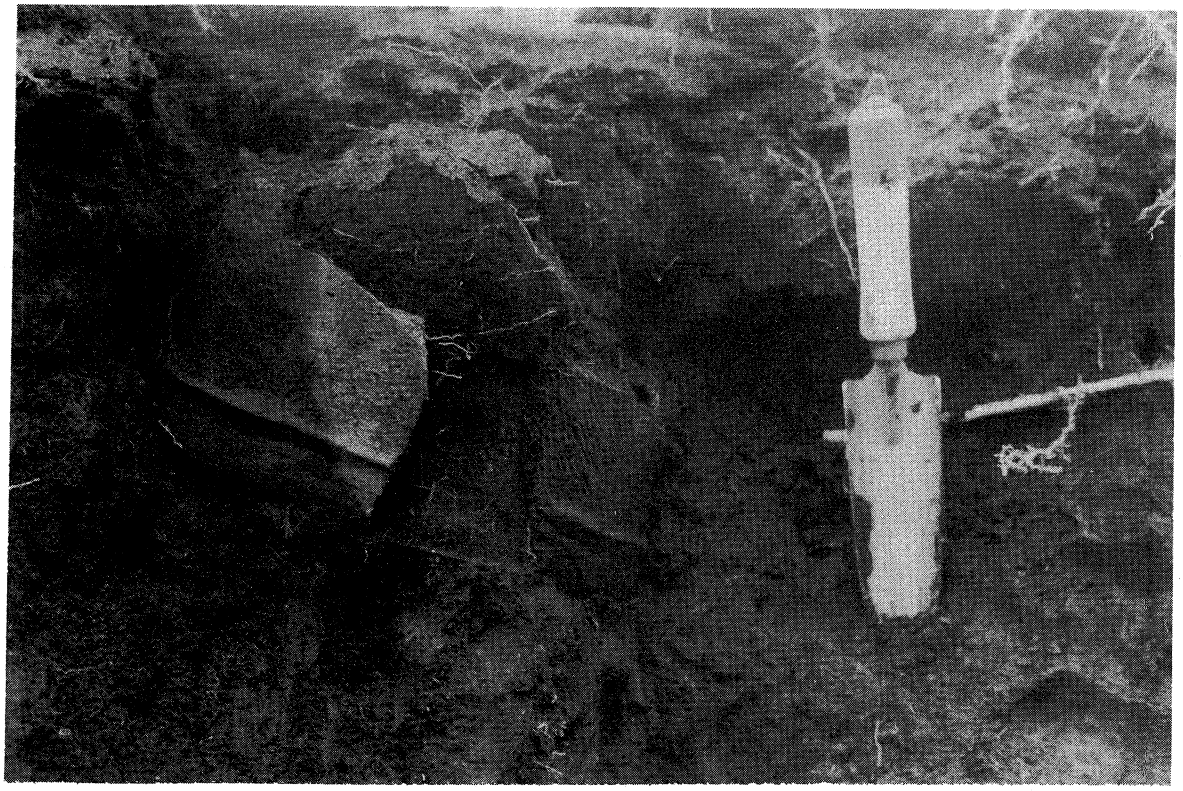
図版１　空からみた常盤台

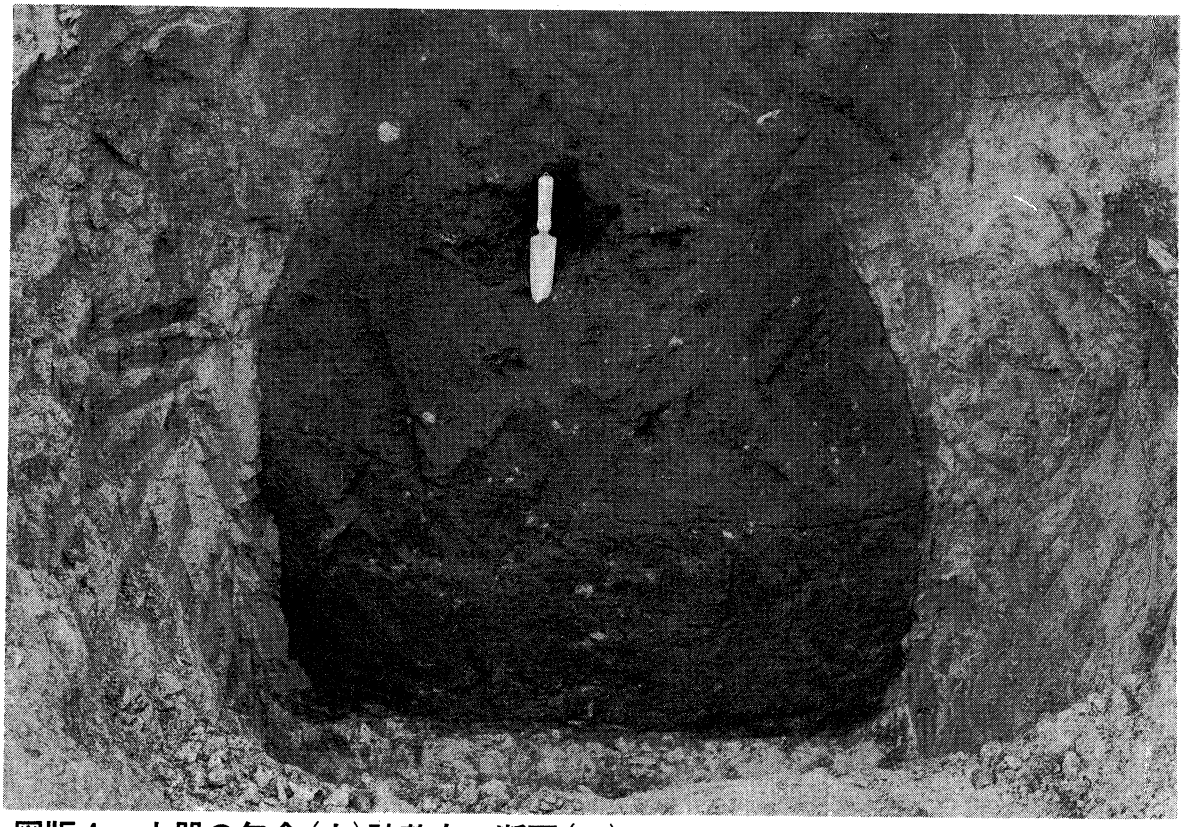
図版２　第１地区遠景(上)と近景(下)



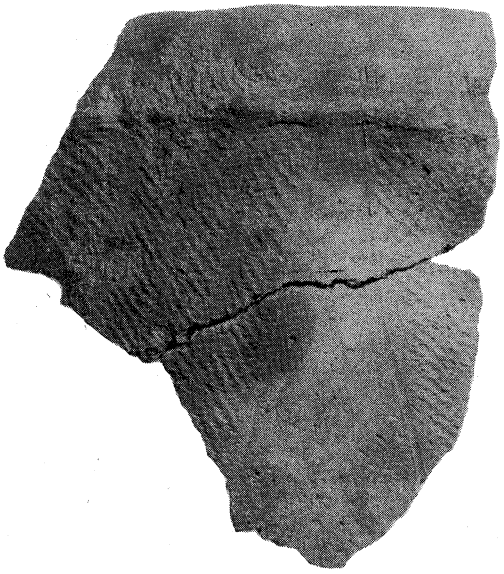


図版３　第１地区断面の露出(上)と住居址の発掘(下)

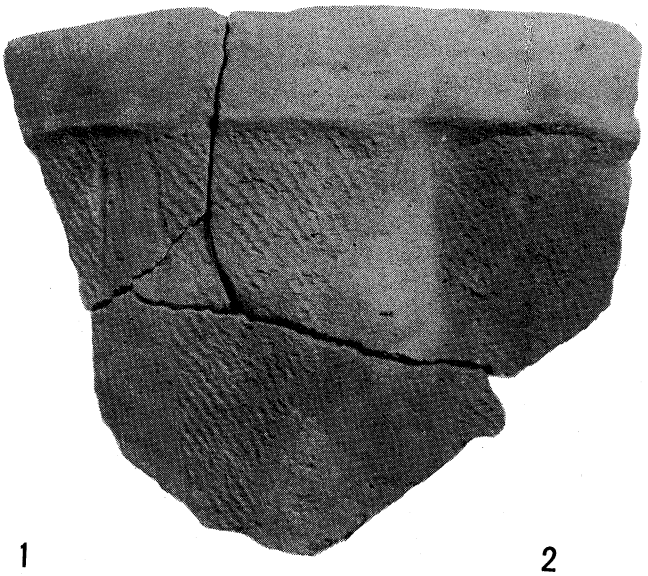




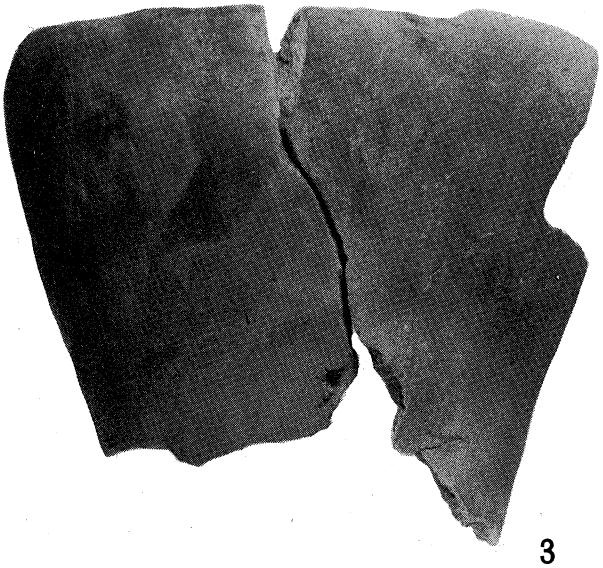
図版 4　土器の包食（上）貯蔵穴の断面（下）



1



2



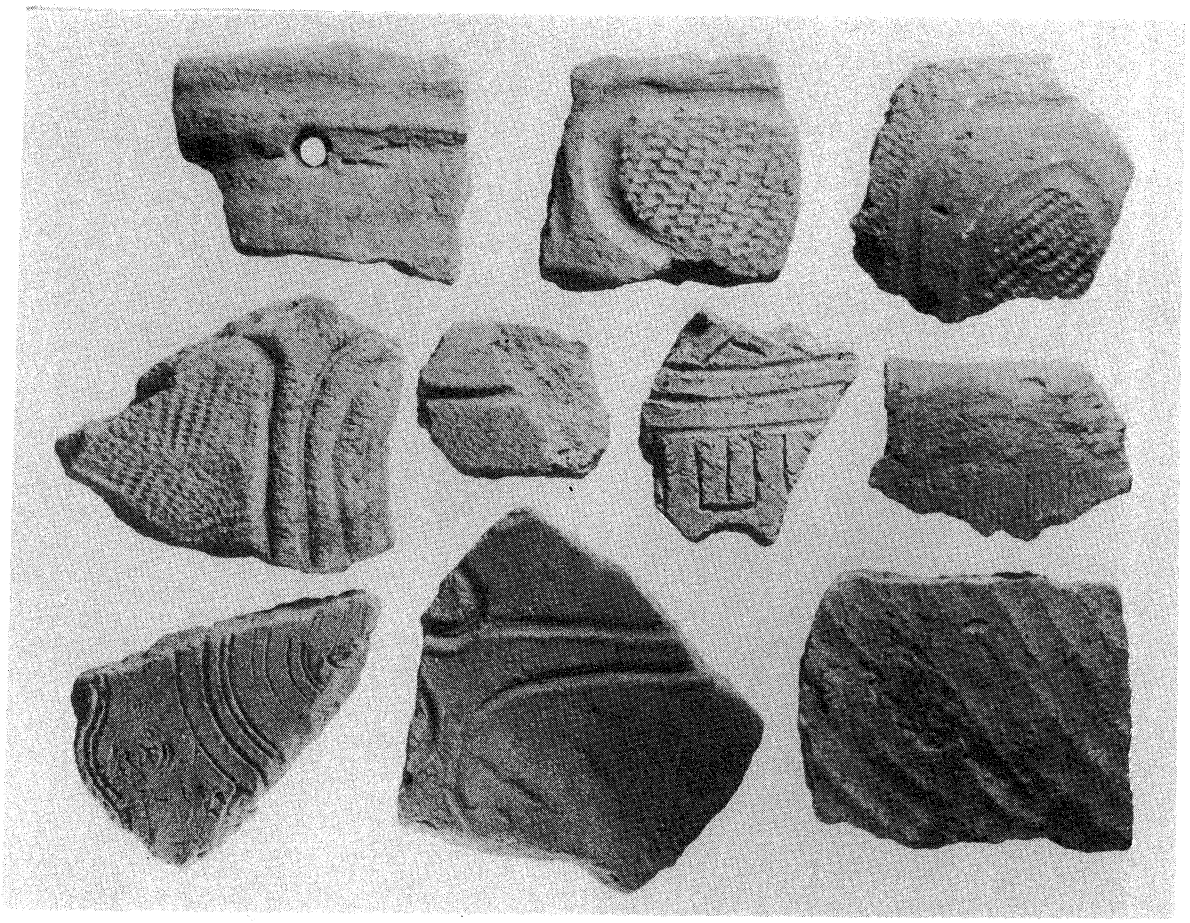
3

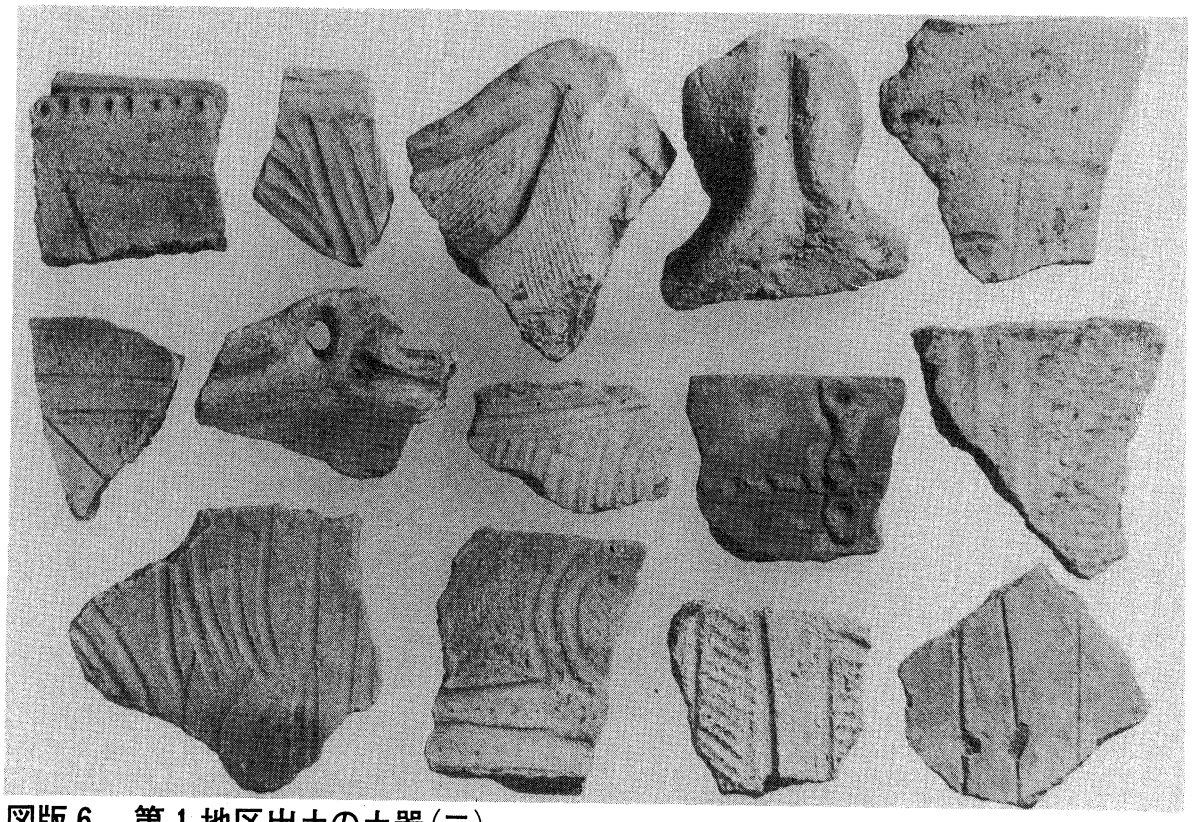
4

5

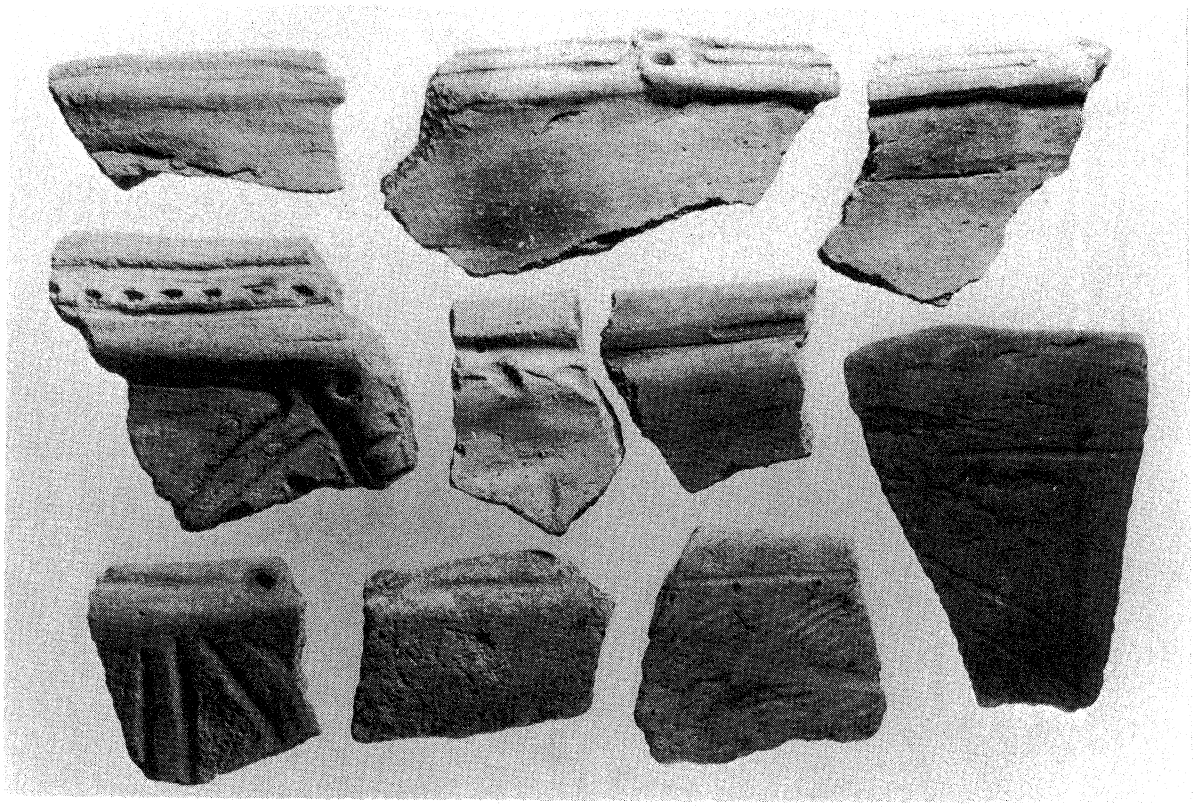
6

図版５　第１地区出土の土器(一)

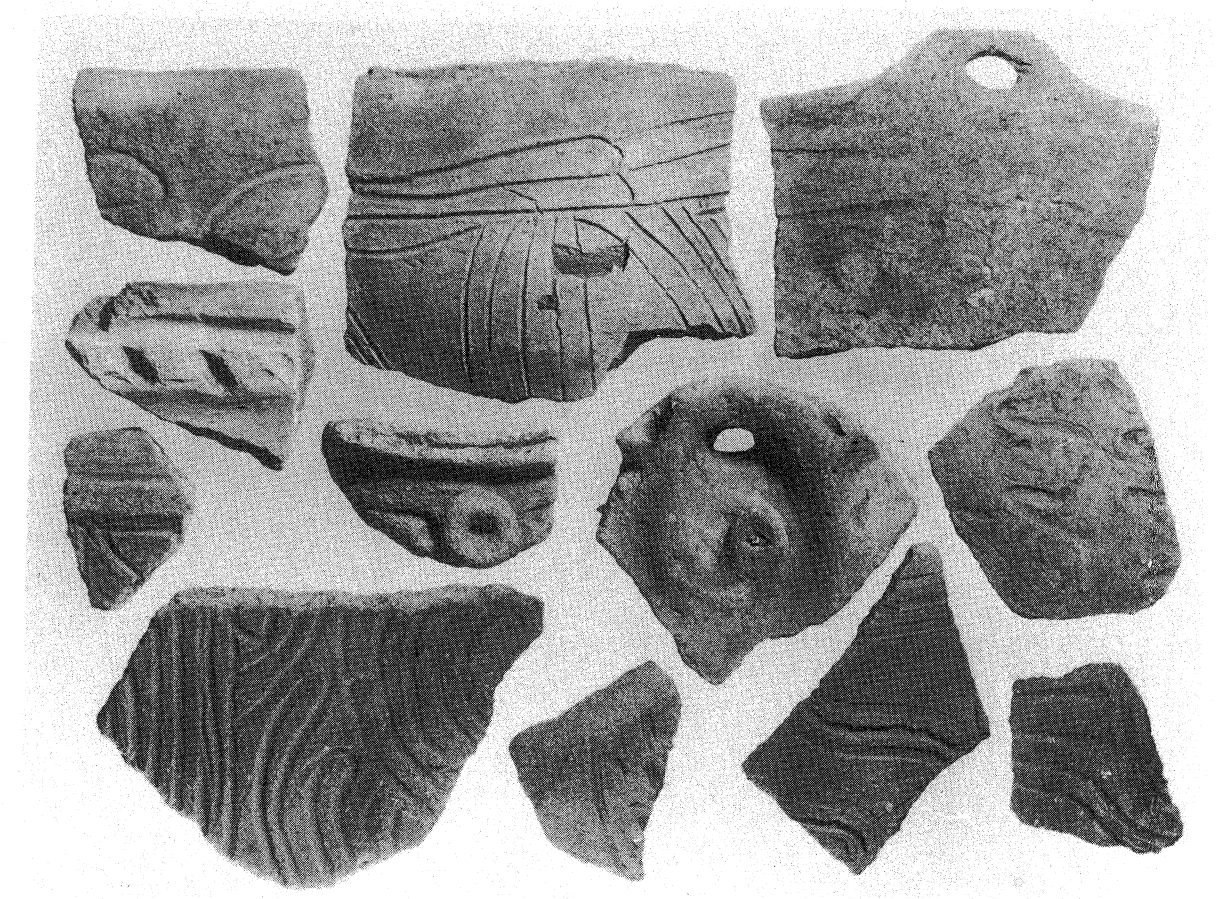


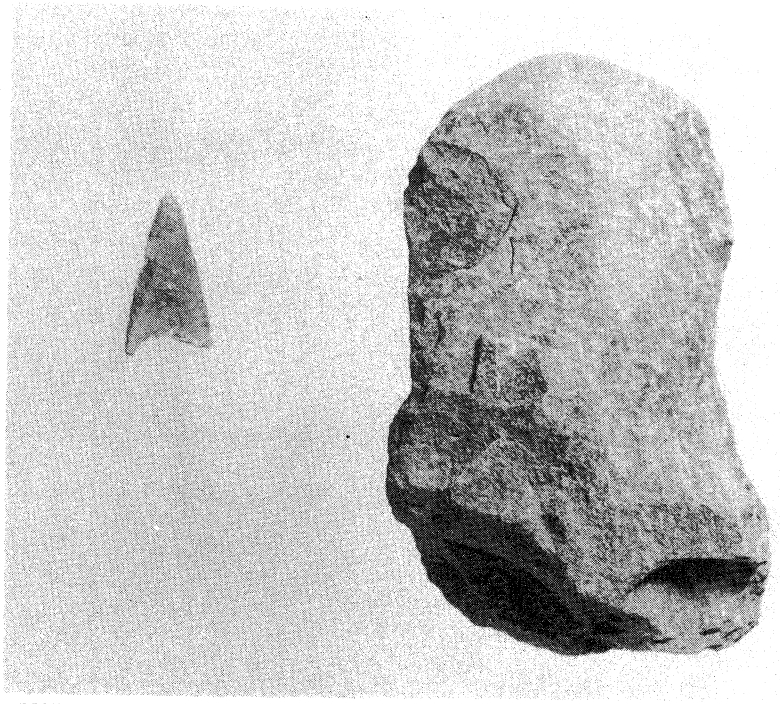


図版 6　第 1 地区出土の土器(二)

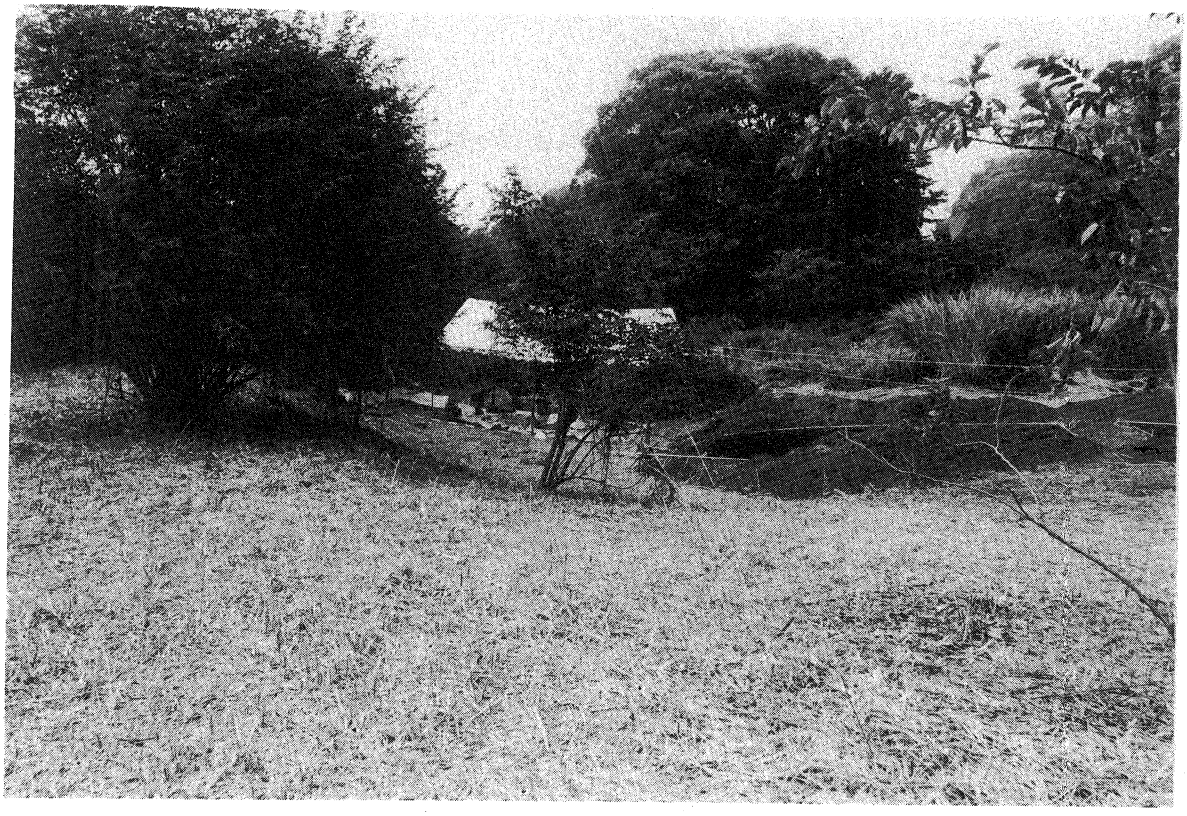


図版７　第１地区出土の土器(三)

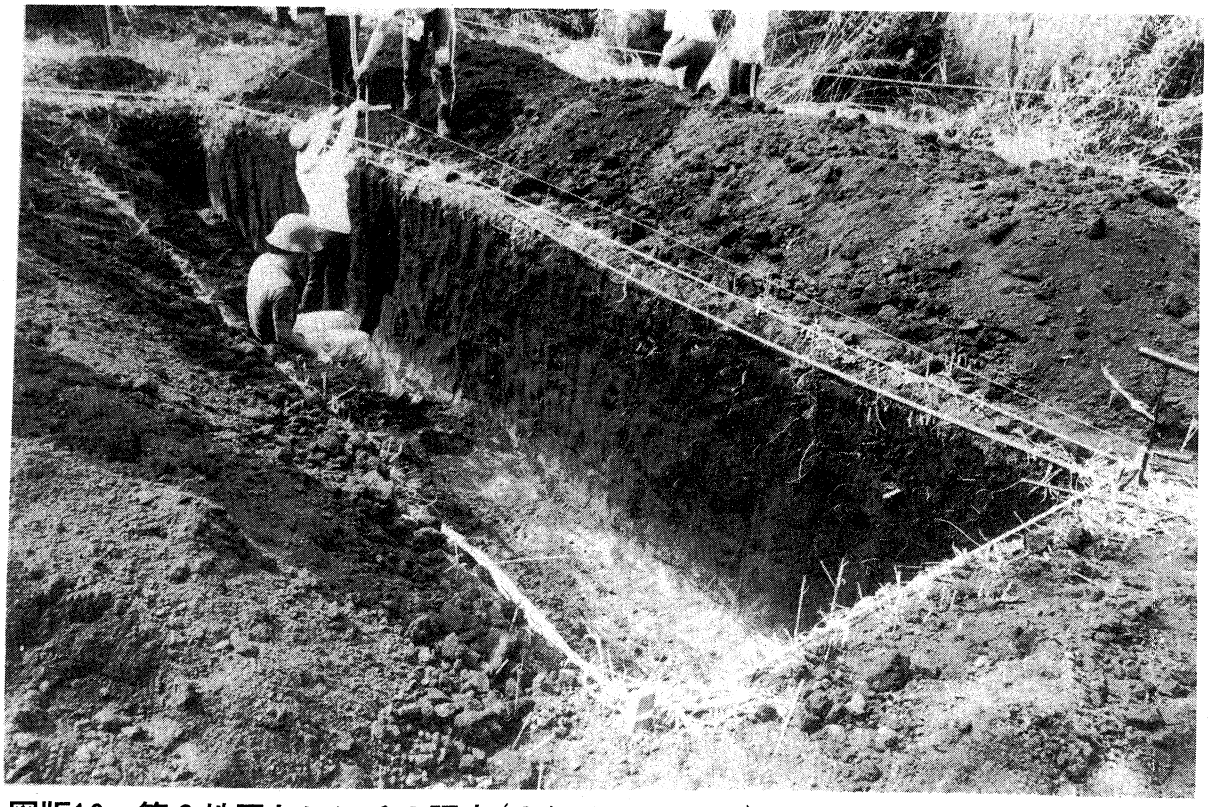




図版 8　第 1 地区出土の土器(四), 石器

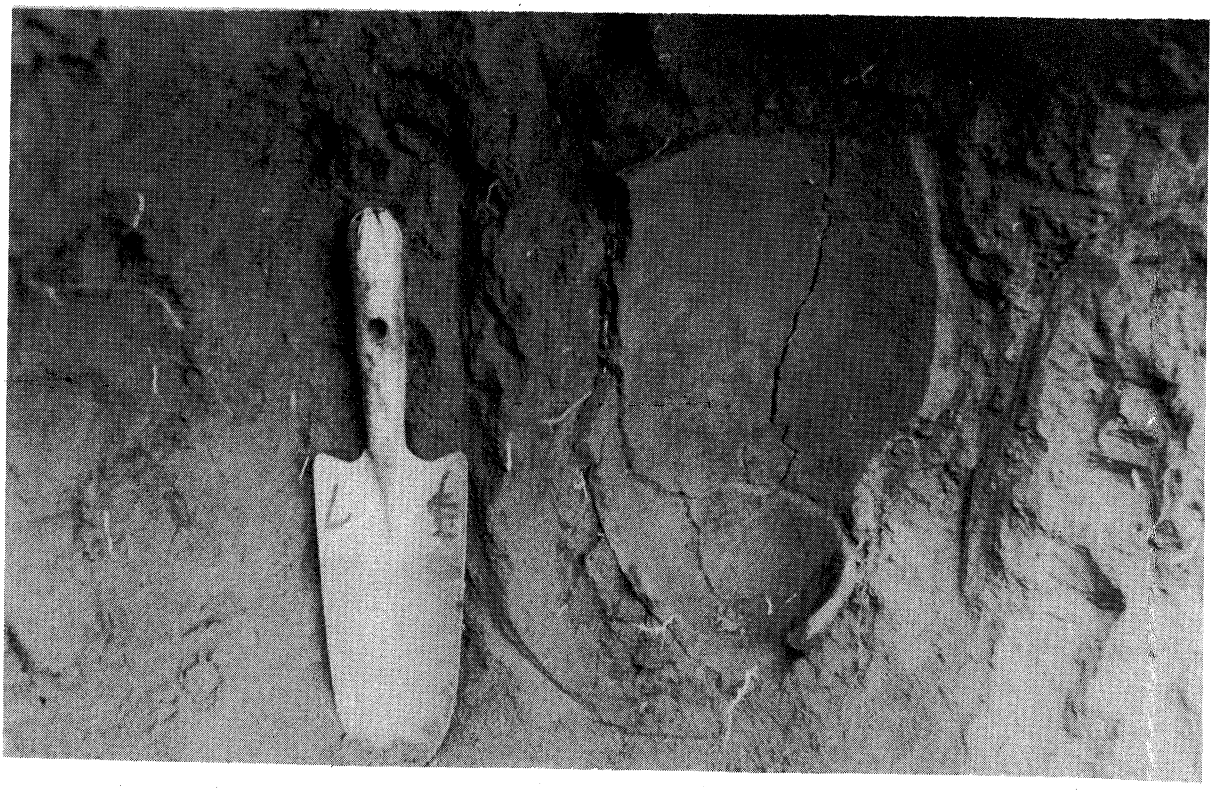


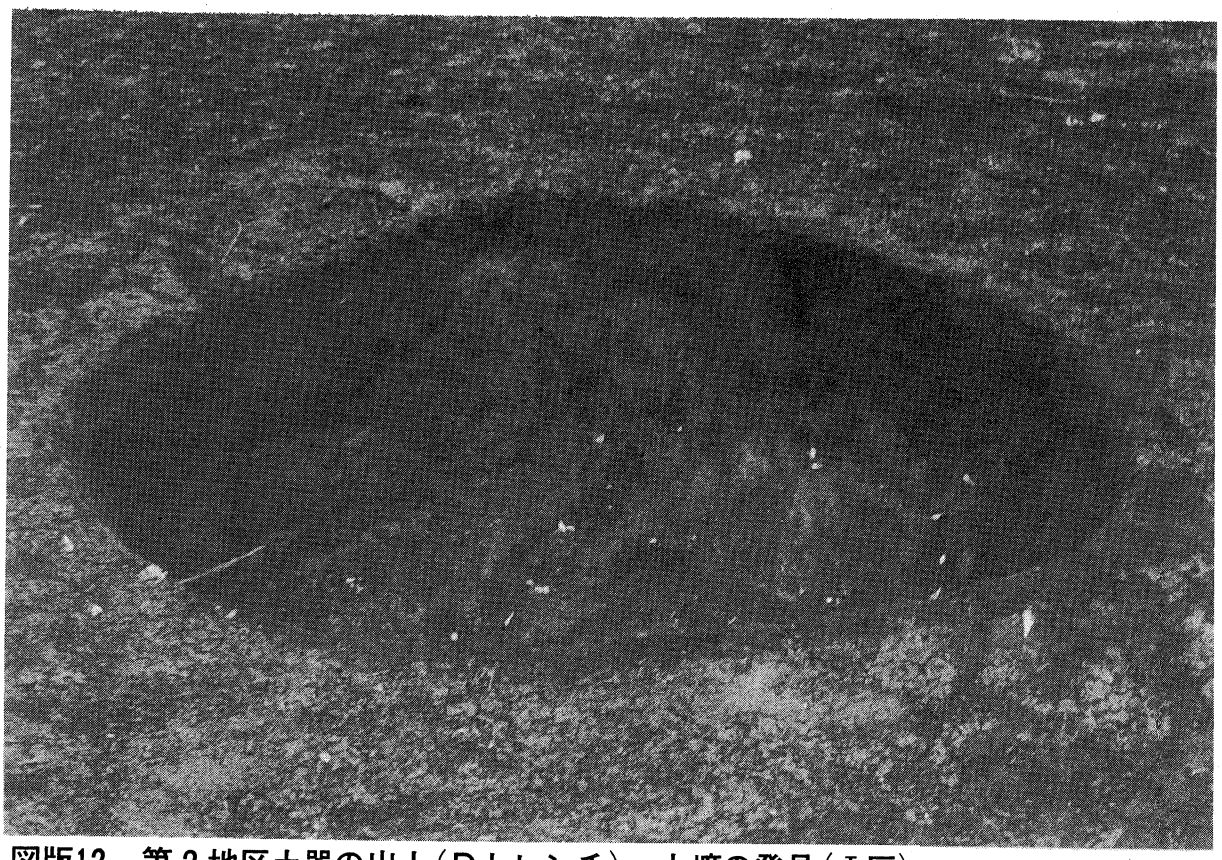
図版９　第２地区近景（上：南より、下：北より、手前はＢトレンチ）



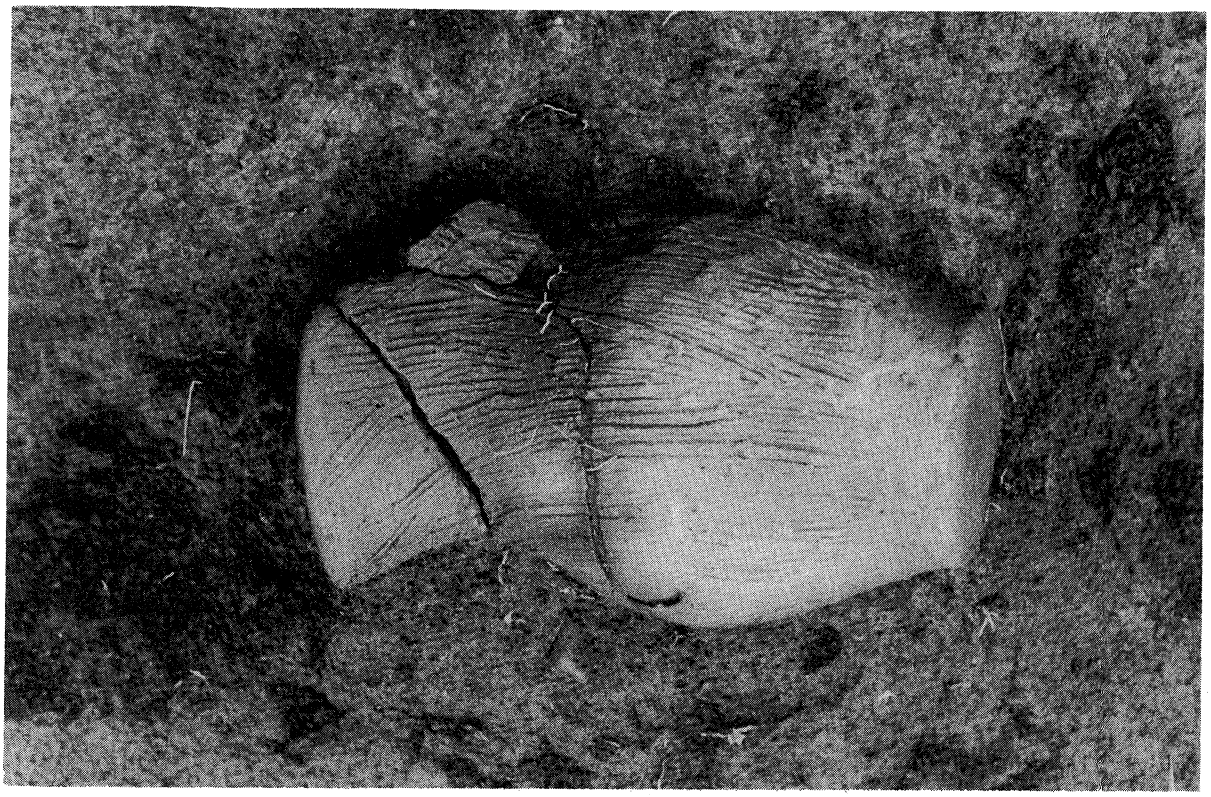
図版10　第２地区トレンチの調査（A′・Eトレンチ）

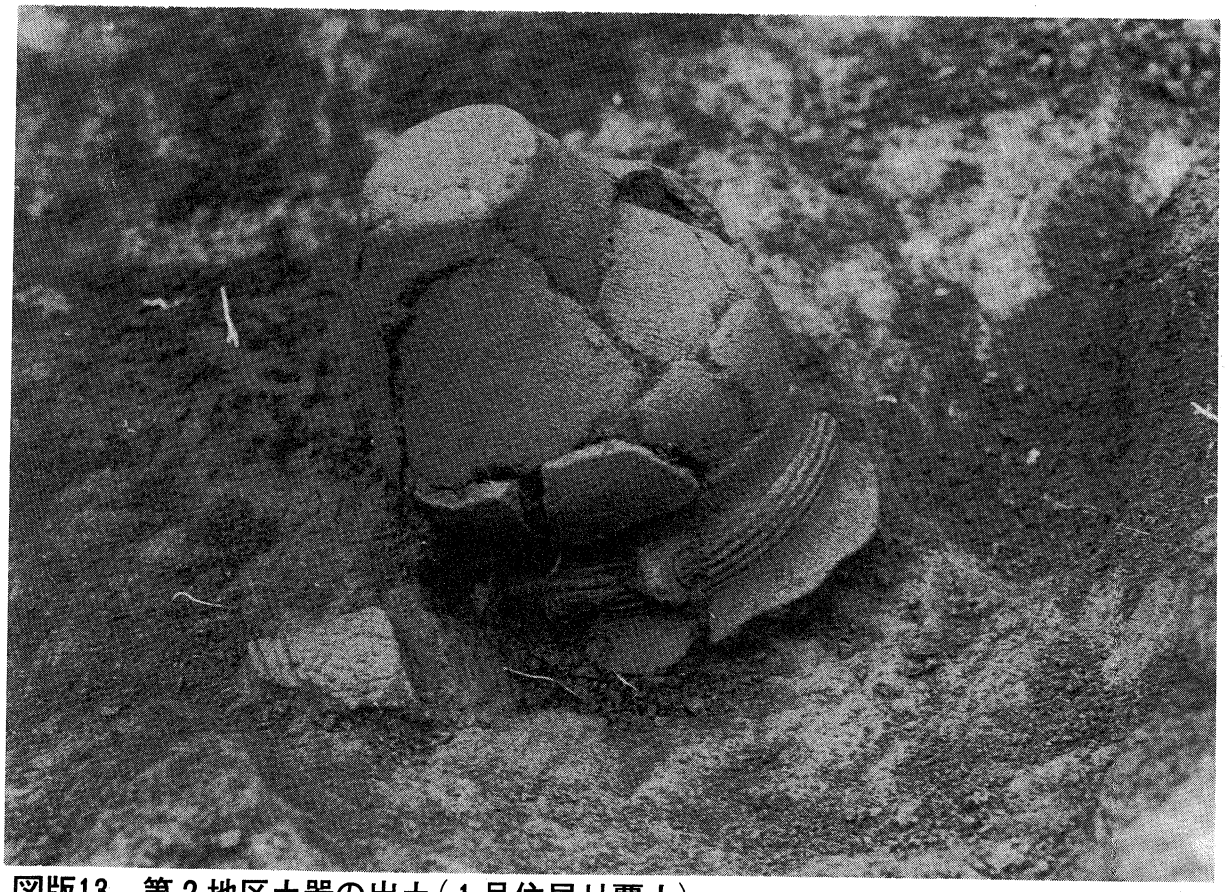
図版11　第２地区Ⅰ区(上)，Ⅱ区(下)の発掘



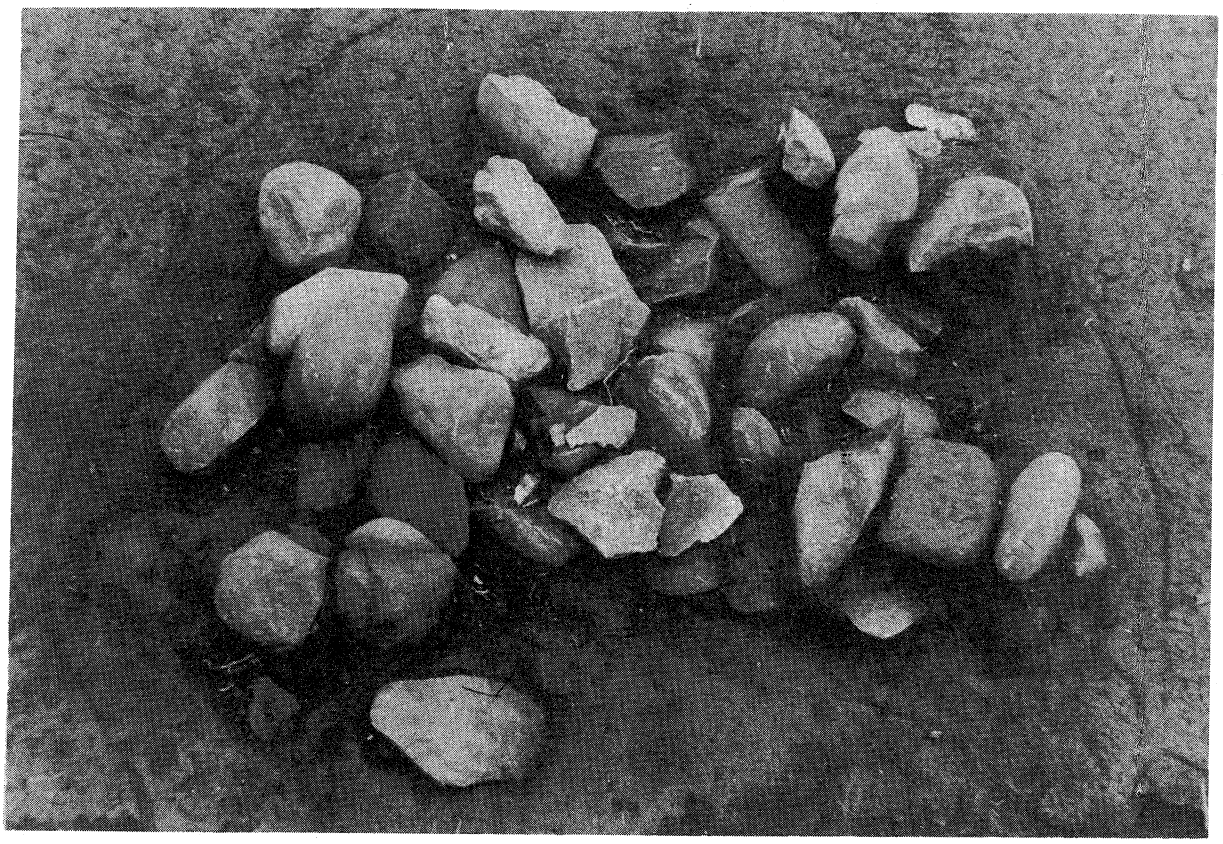


図版12　第２地区土器の出土（Ｄトレンチ），土壙の発見（Ⅰ区）





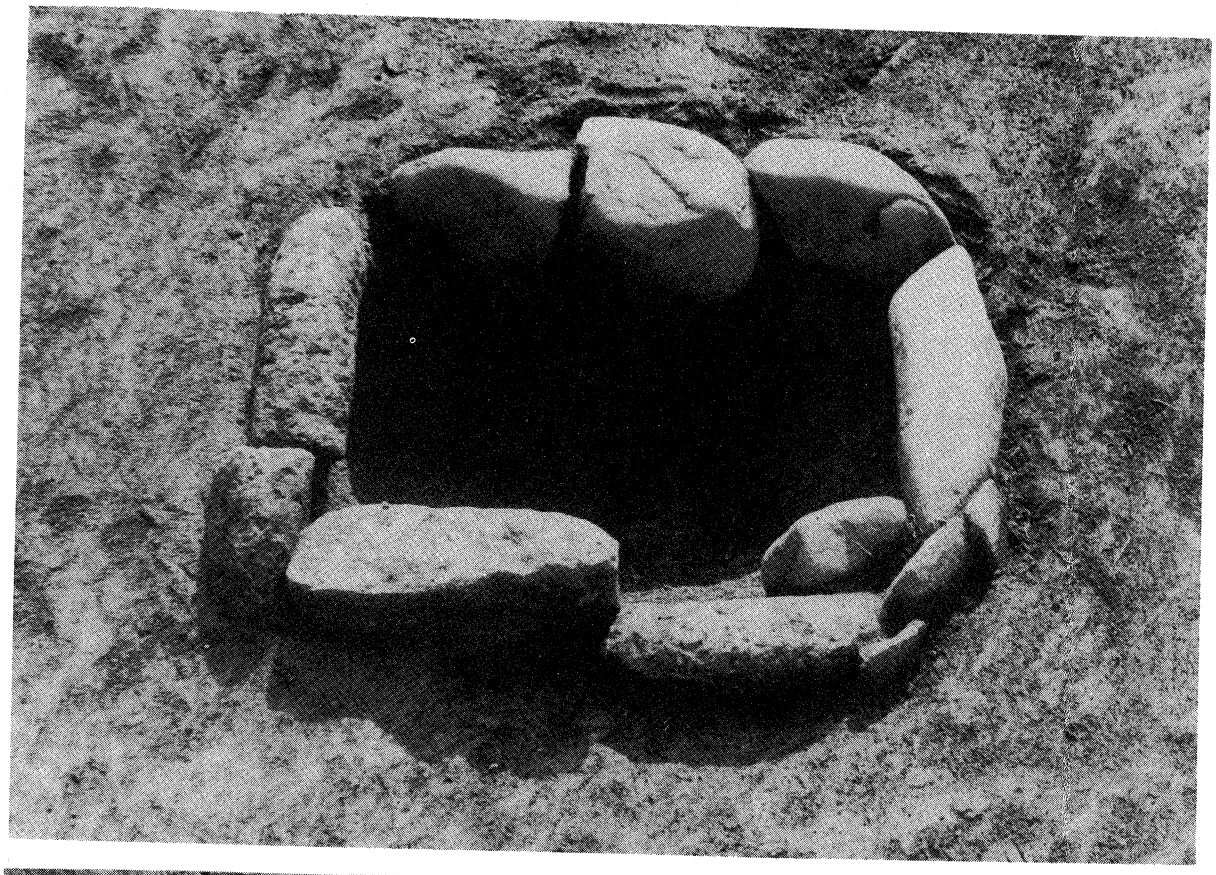
図版13　第２地区土器の出土（１号住居址覆土）

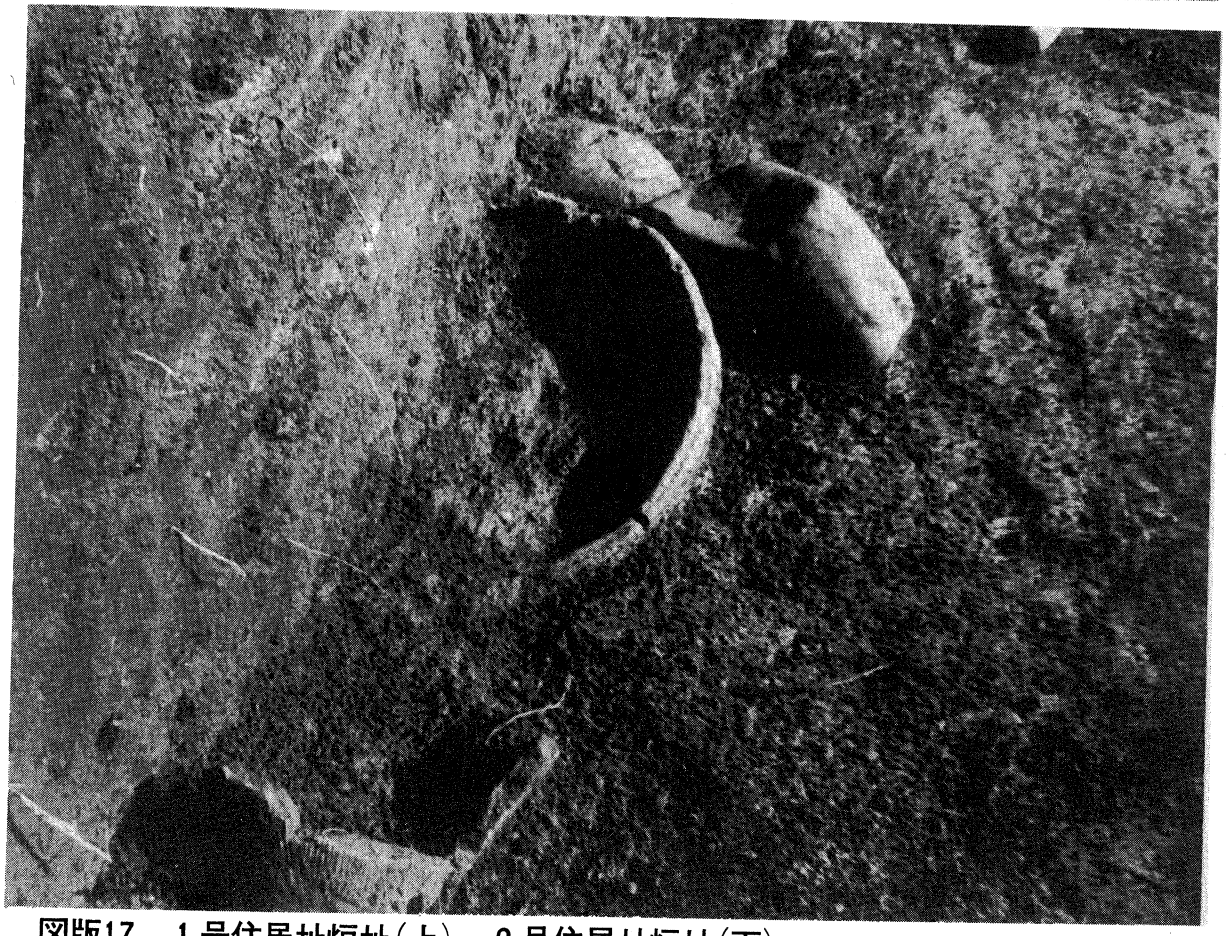


図版14　第２地区集石の平面（上）と断面（下）

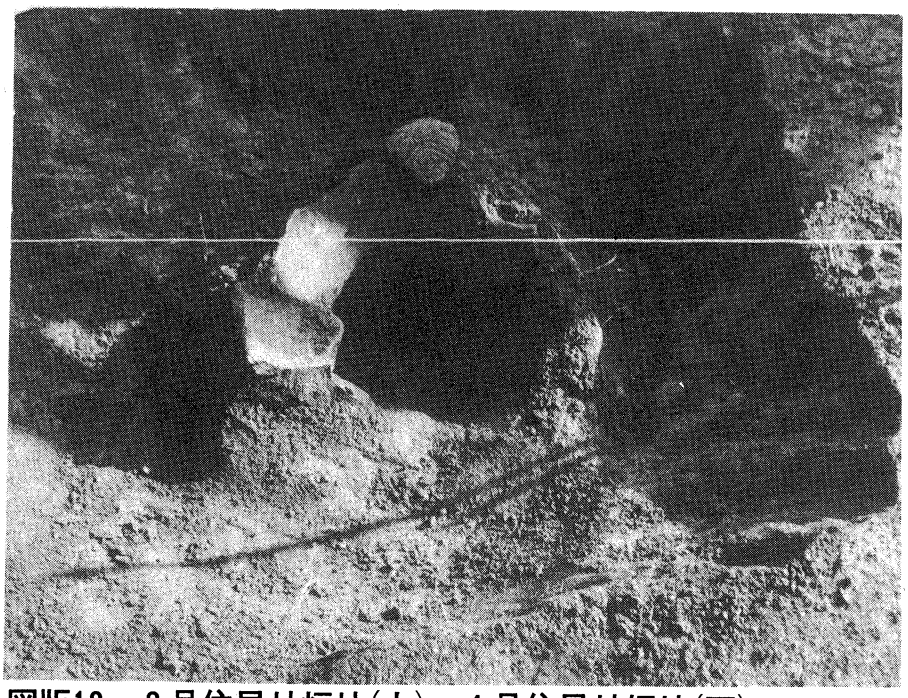
図版15　第２地区発掘された住居址群

図版16　第２地区１号住居址
（下は覆上中の土器の出土状態を示す）

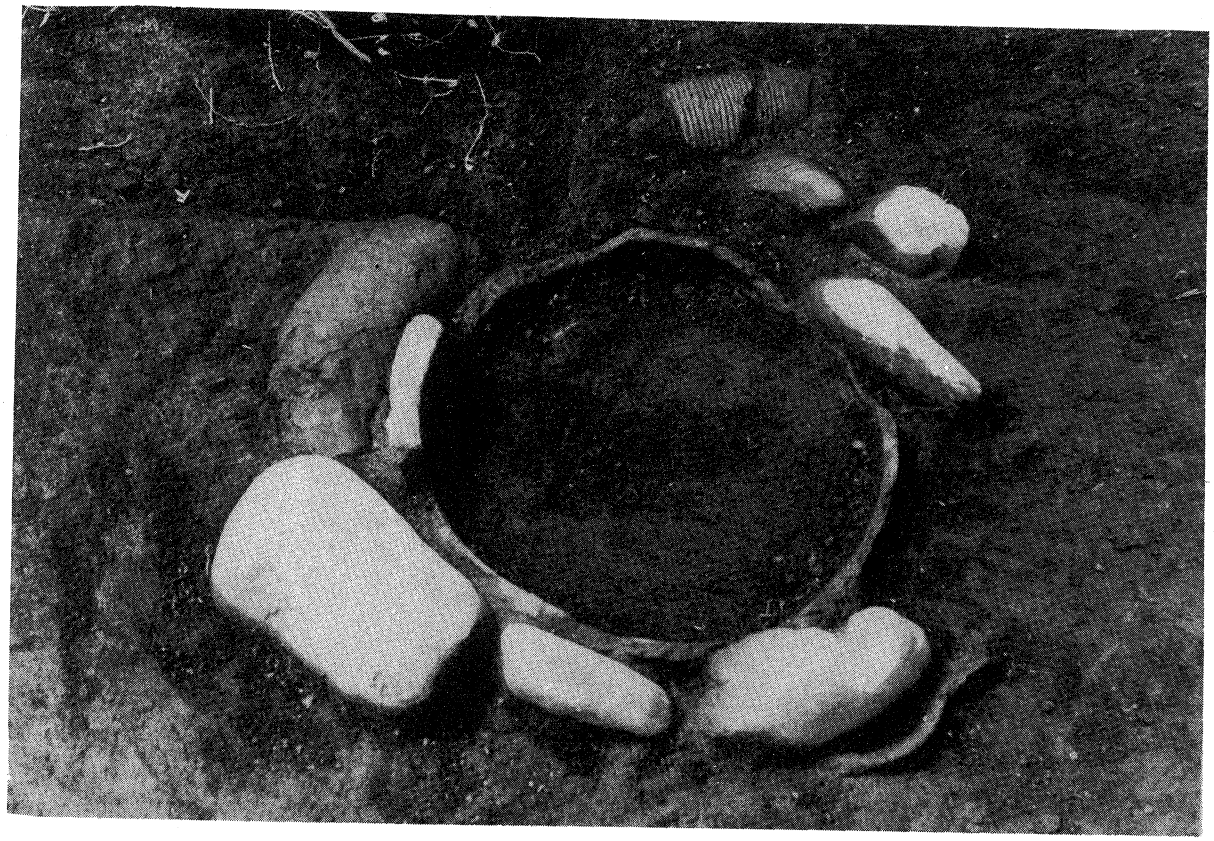




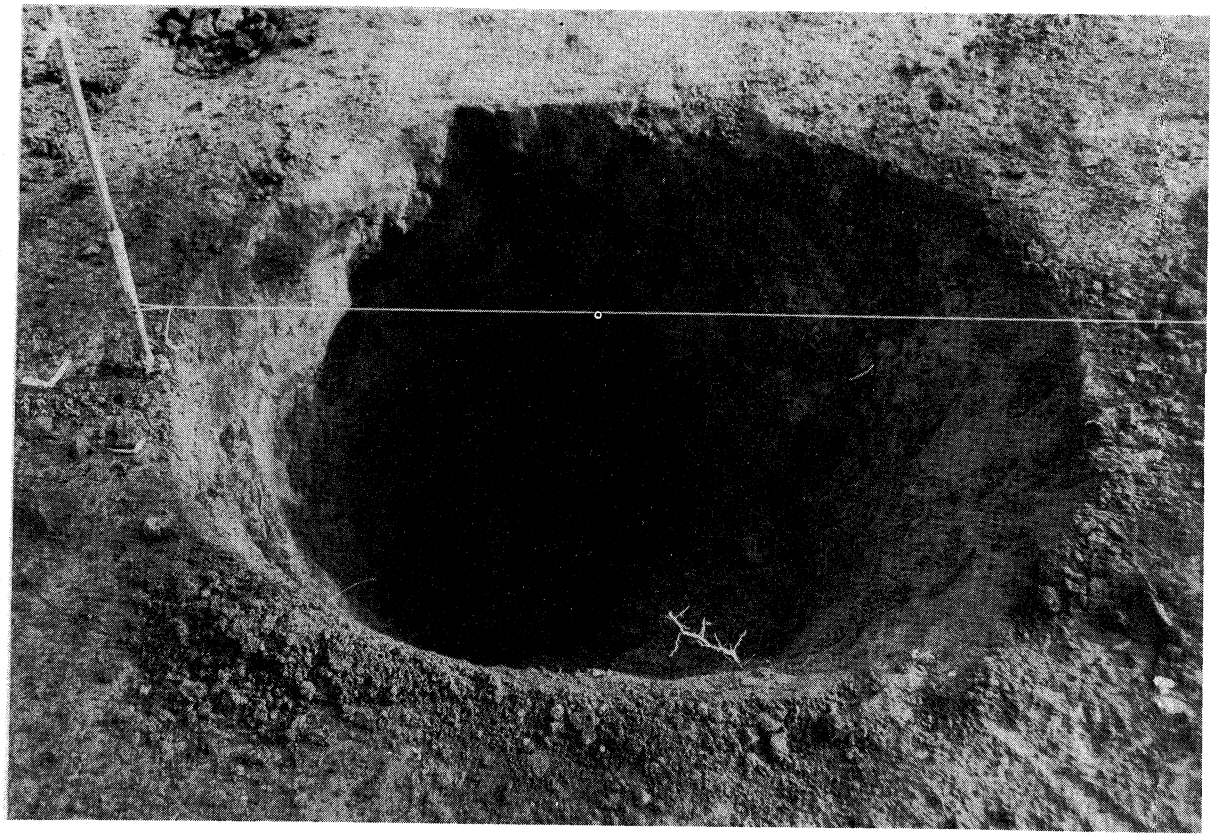
図版17　1号住居址炉址(上)，2号住居址炉址(下)



図版18　3号住居址炉址(上)，4号住居址炉址(下)



図版19　5号住居址炉址(上，下)

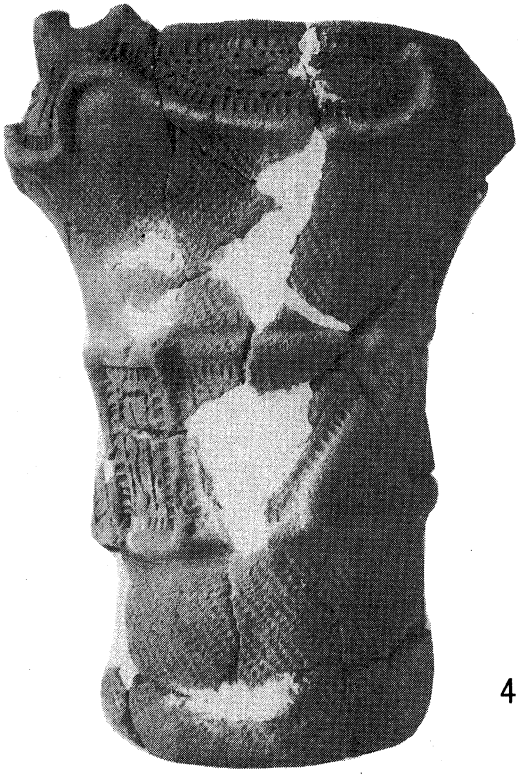


図版20　4号住居址の柱穴(上)，Ⅱ区出土の土壙(下)

1

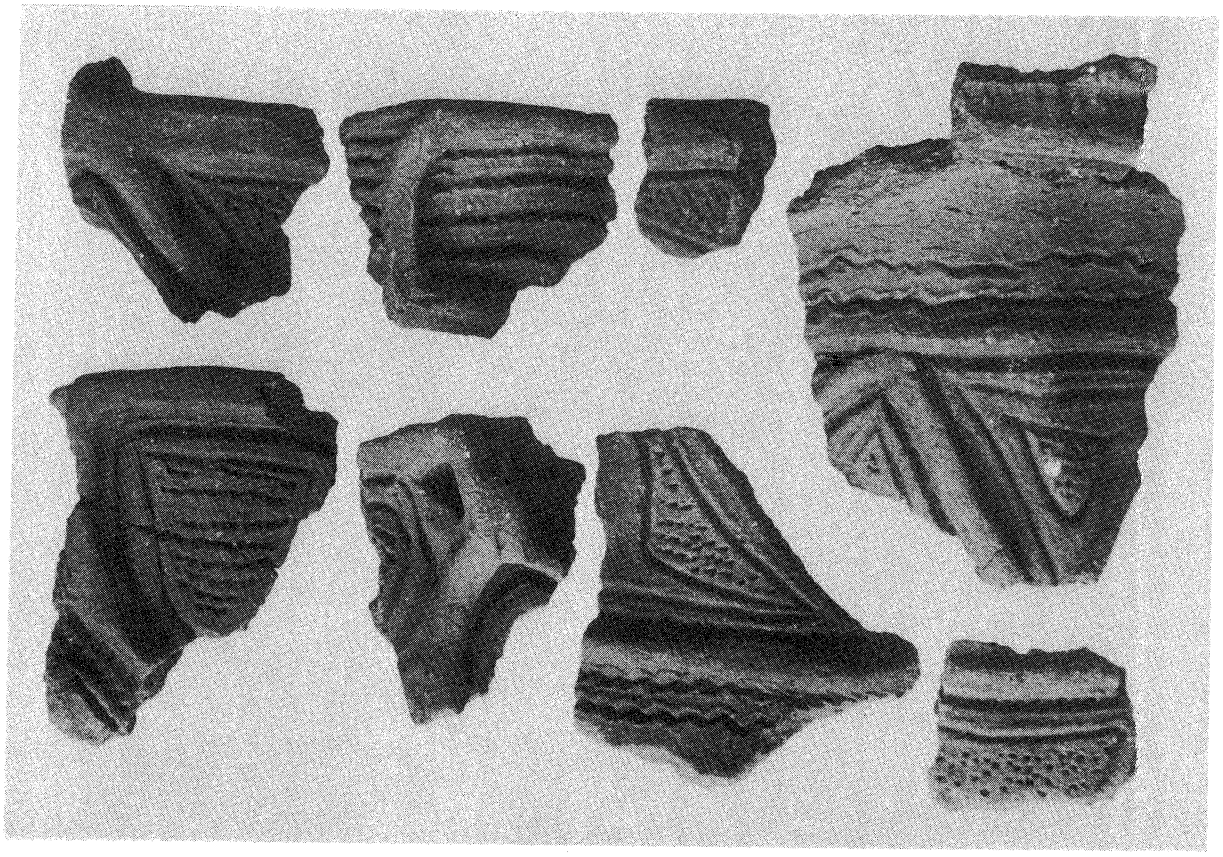
2

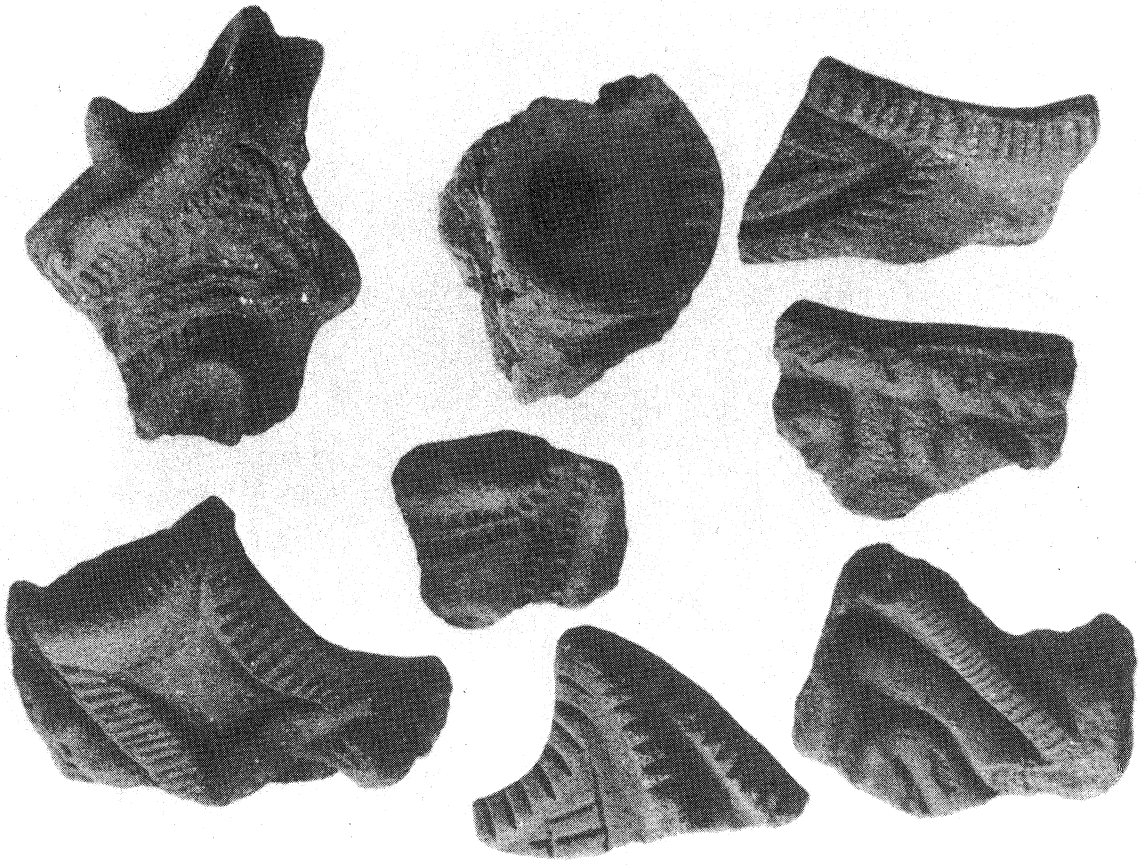
3



4

図版21　第２地区出土の土器(一)，（Ⅰ群）

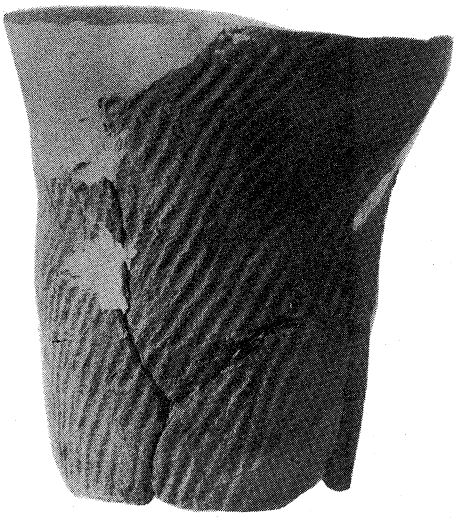




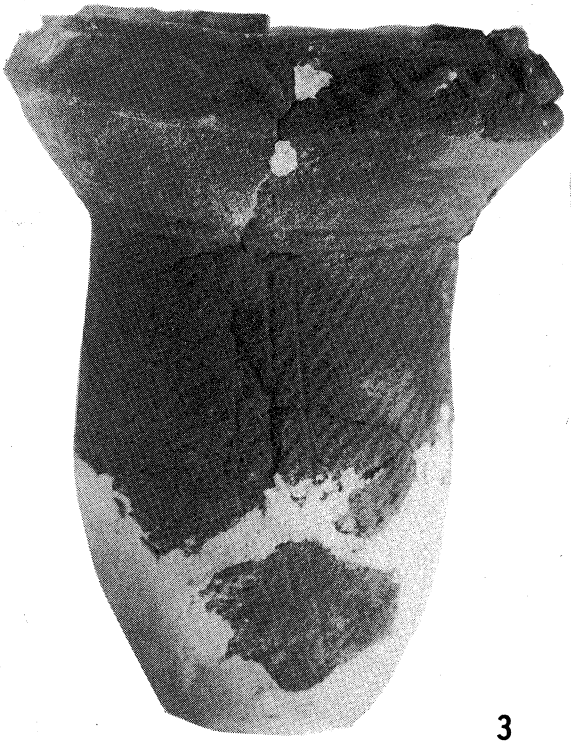
図版22　第２地区出土の土器(二)，（Ⅰ群）

図版23　第２地区出土の土器(三)，（Ⅰ群）

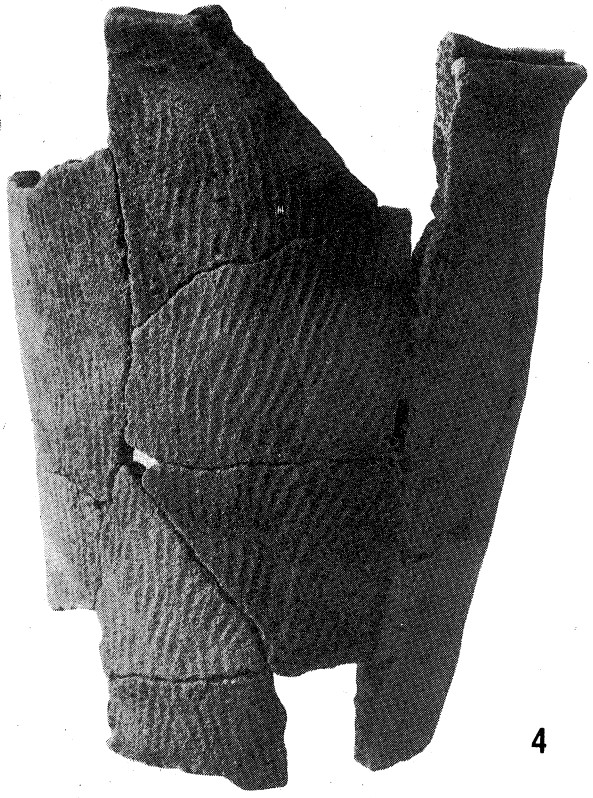
1



2

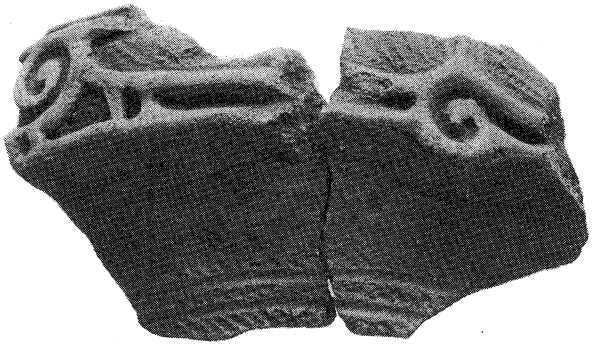


3



4

図版24　第２地区出土の土器(四)，(Ⅱ群)



1

2

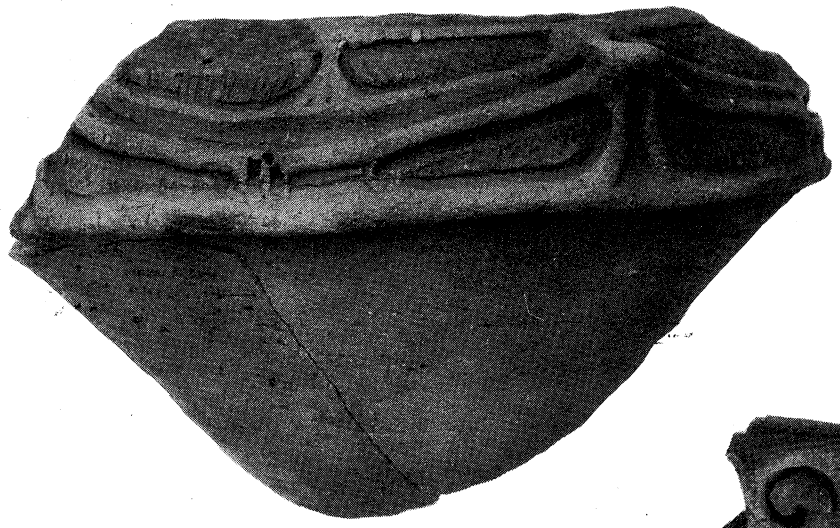
3

4

5

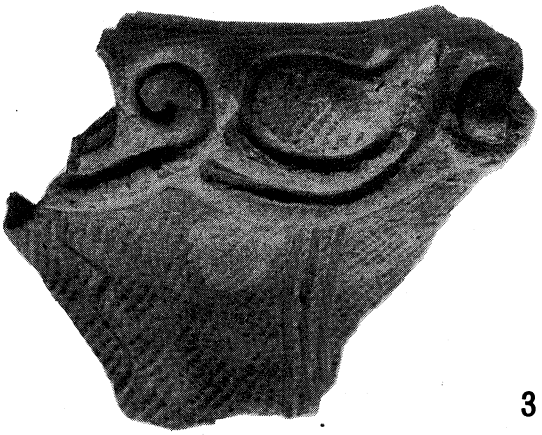
6

図版25　第２地区出土の土器(五)，(Ⅱ群)



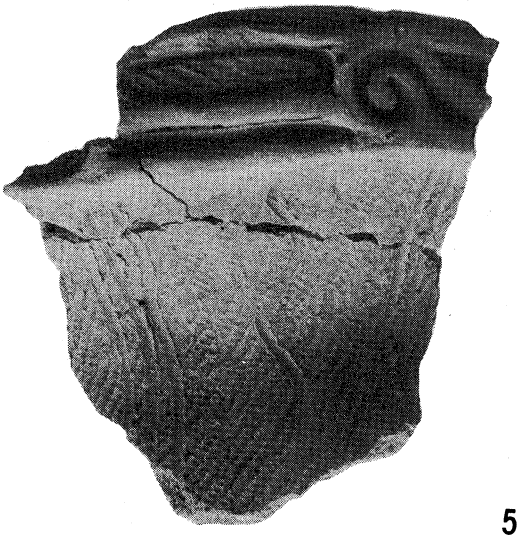
1

2



3

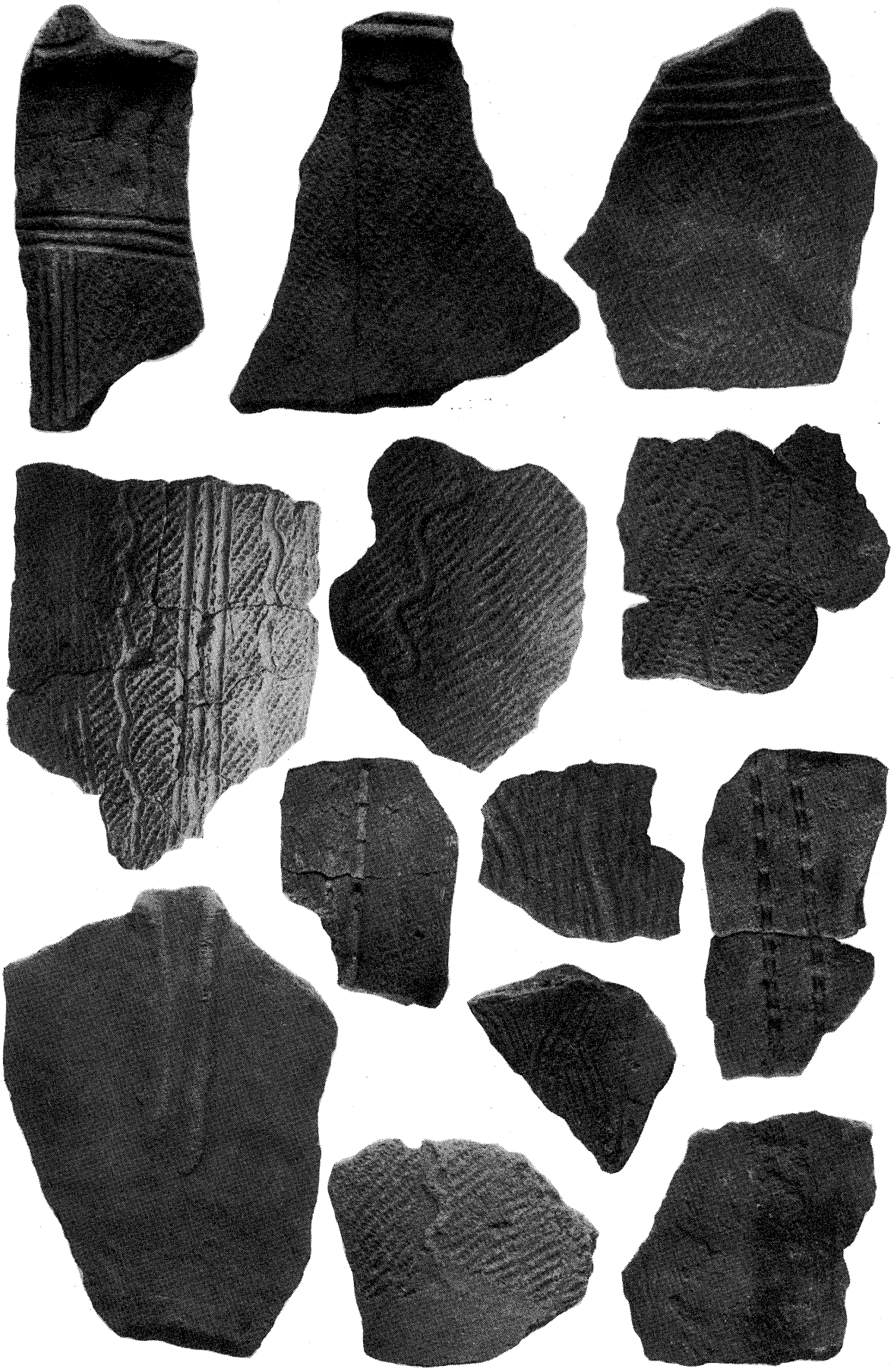
4



5

図版26　第2地区出土の土器(六)，(Ⅱ群)

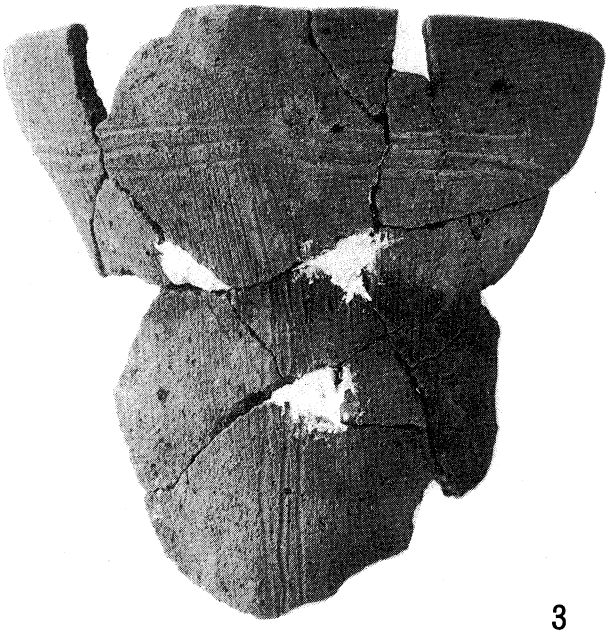
図版27　第２地区出土の土器(七)，(Ⅱ群)



図版28　第２地区出土の土器(八)，(Ⅱ群)

1

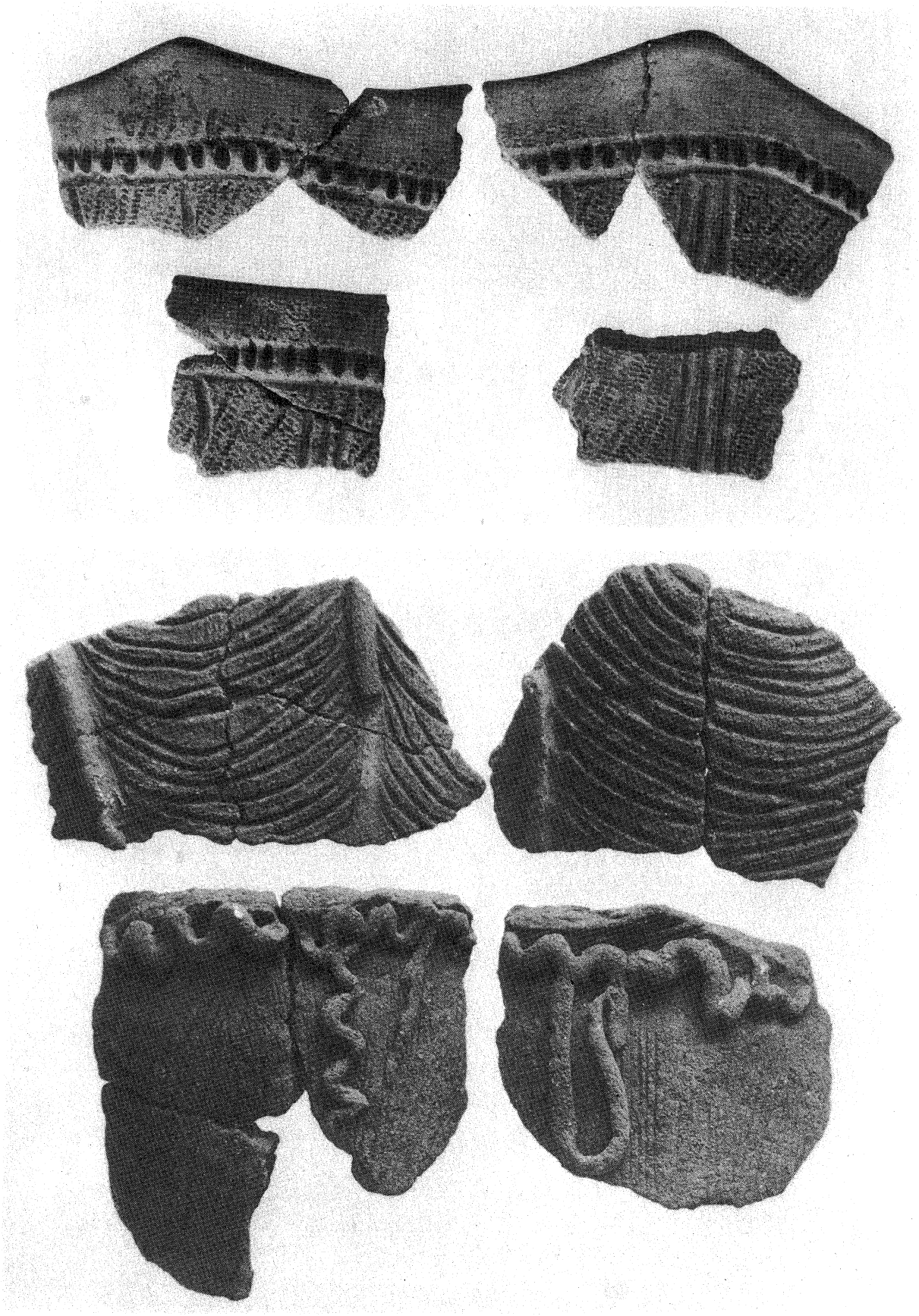
2



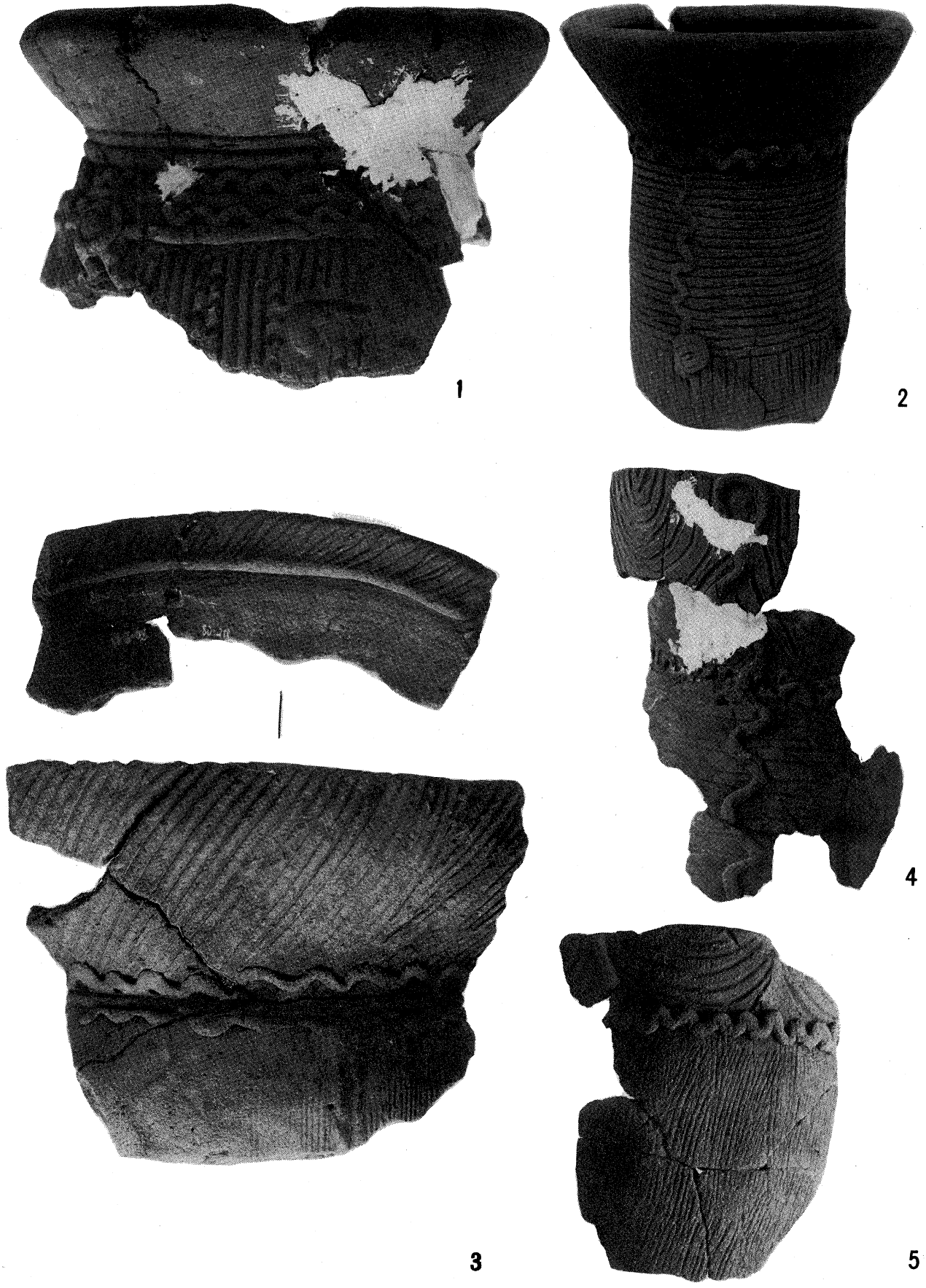
3

4

図版29　第２地区出土(九)，(Ⅱ群)

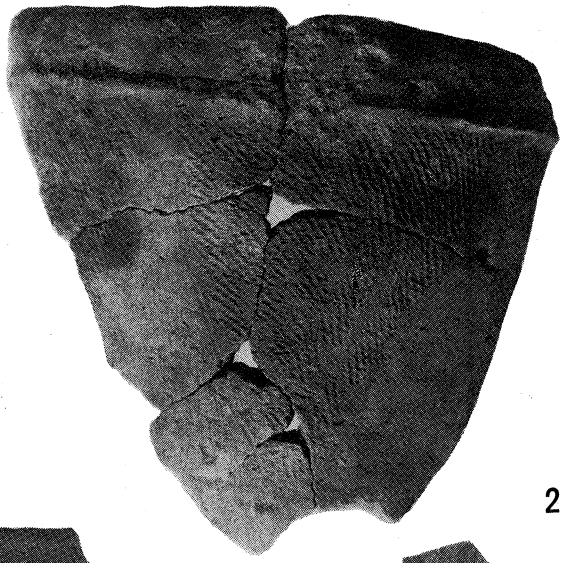


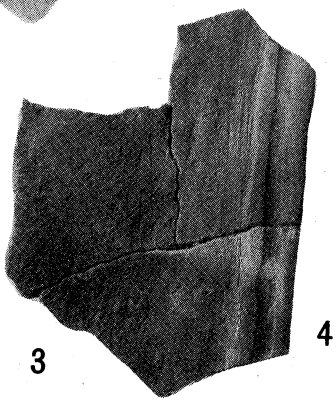
図版30　第２地区出土の土器(十)，(Ⅱ群)

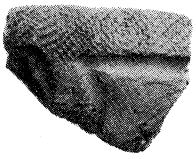


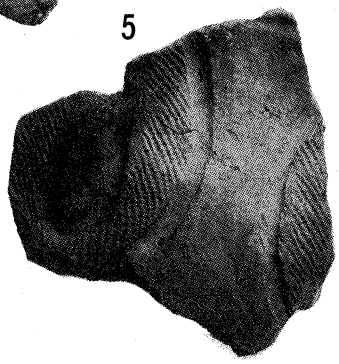
図版31　第２地区出土の土器(十一)，(Ⅱ群)

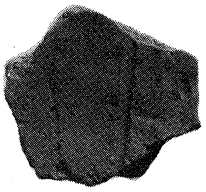
図版32　第２地区出土の土器(十二)，(Ⅱ群)



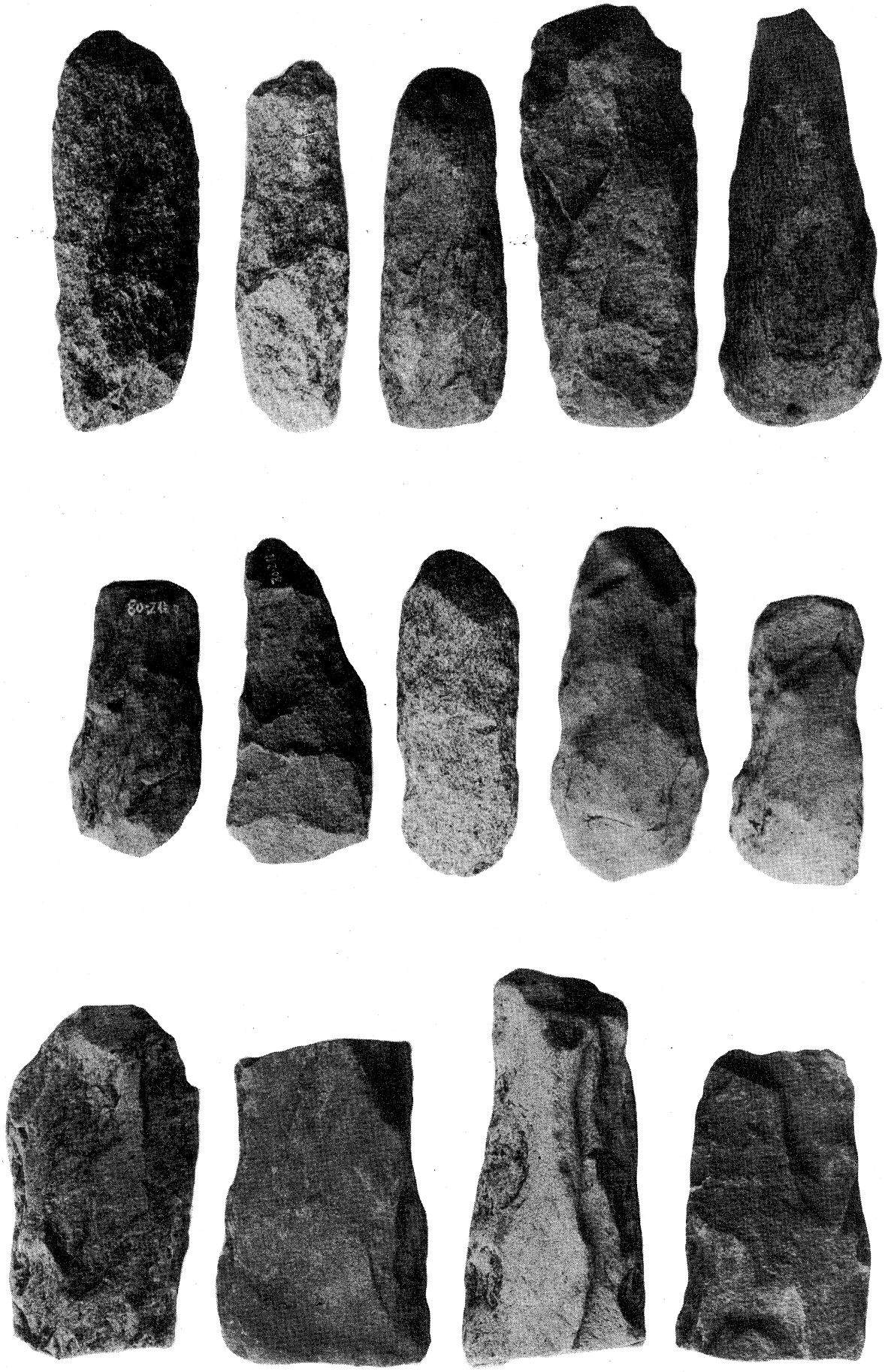




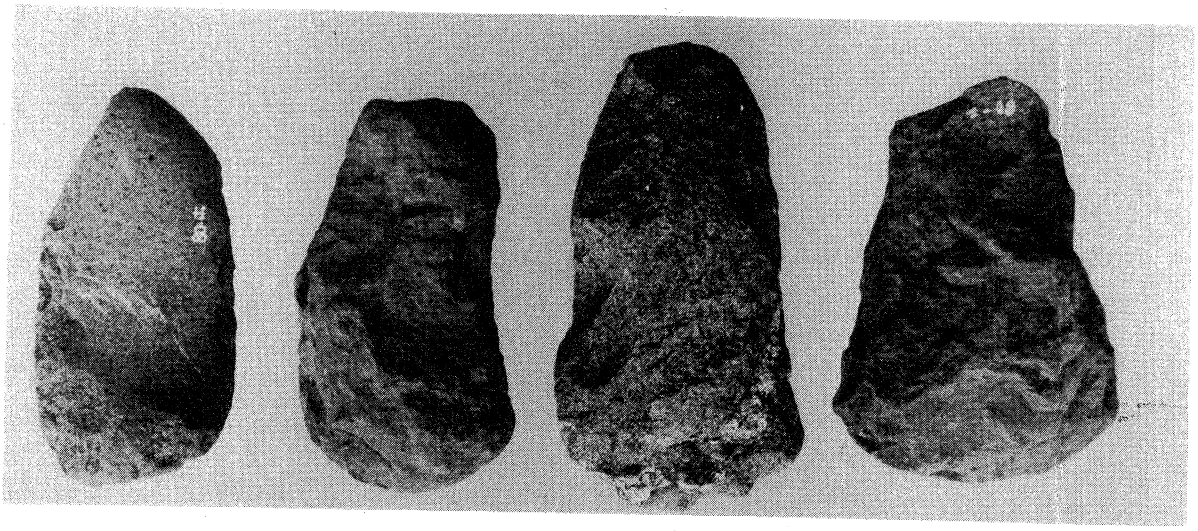


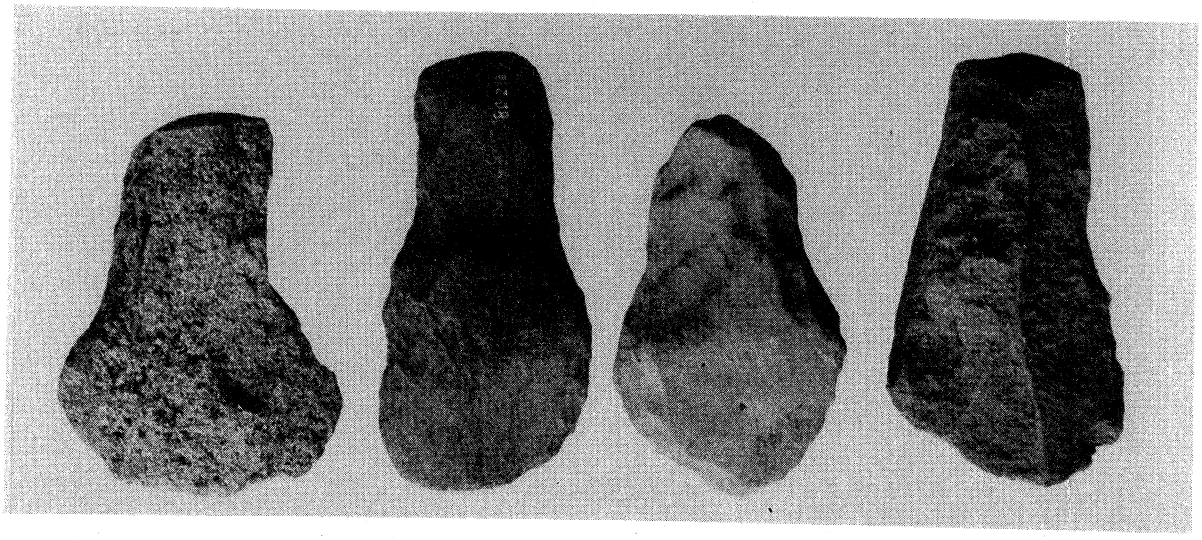


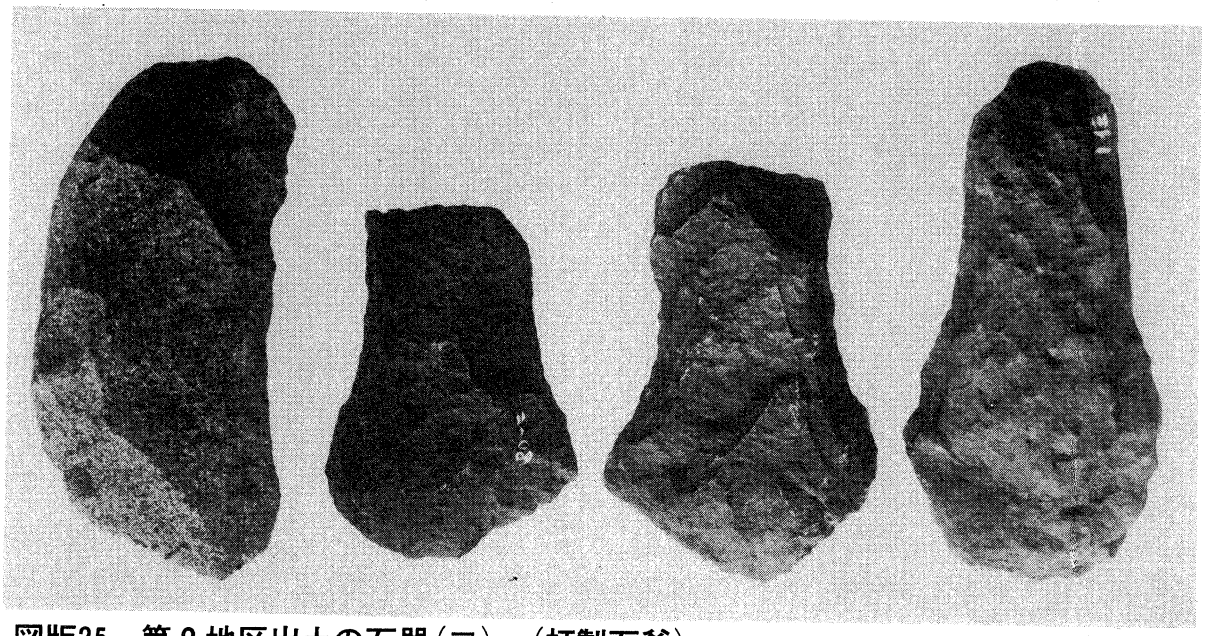
図版33　第２地区出土の土器(十三)，(Ⅲ群)



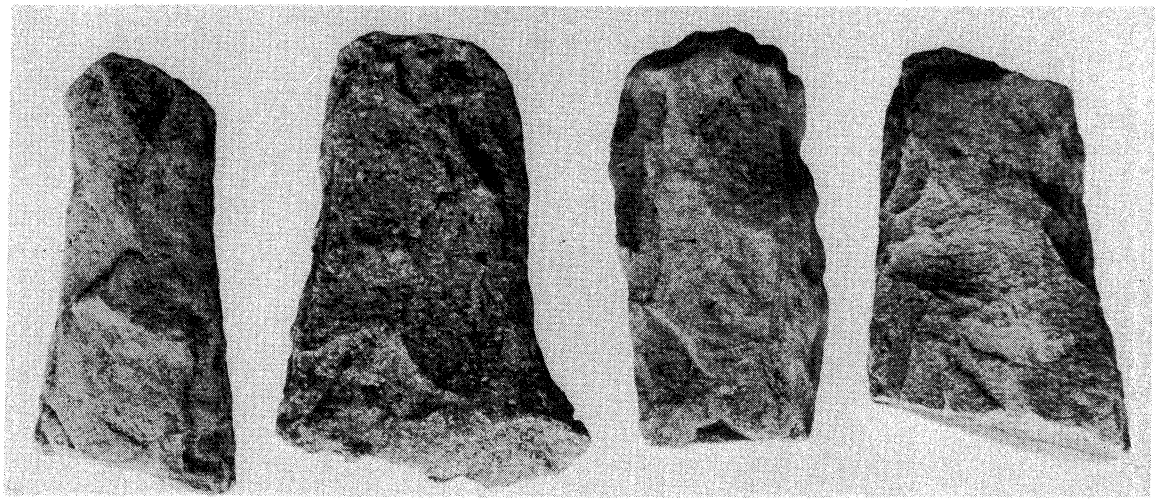
図版34　第２地区出土の石器(一)，(打製石斧)

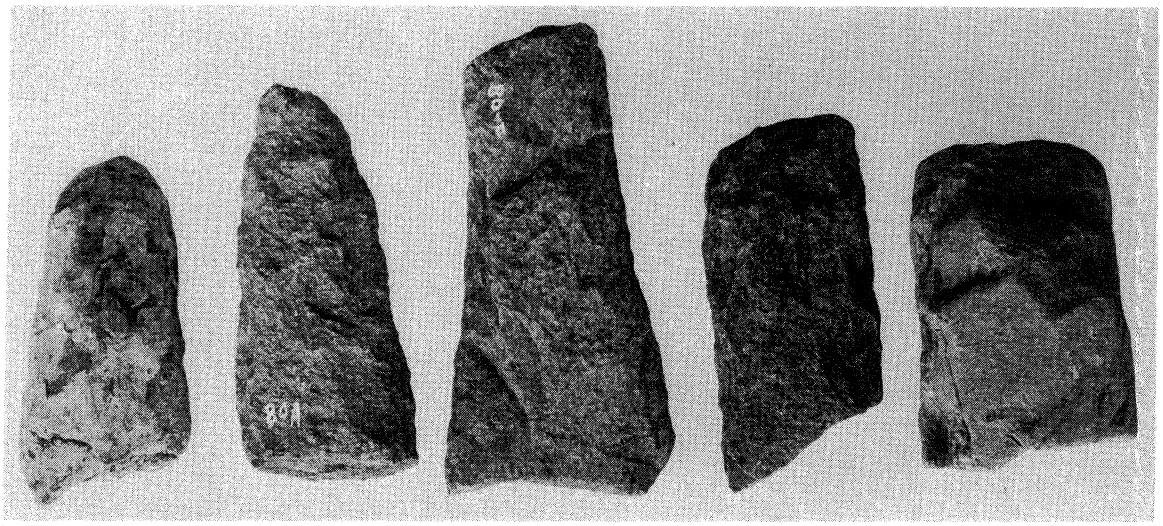


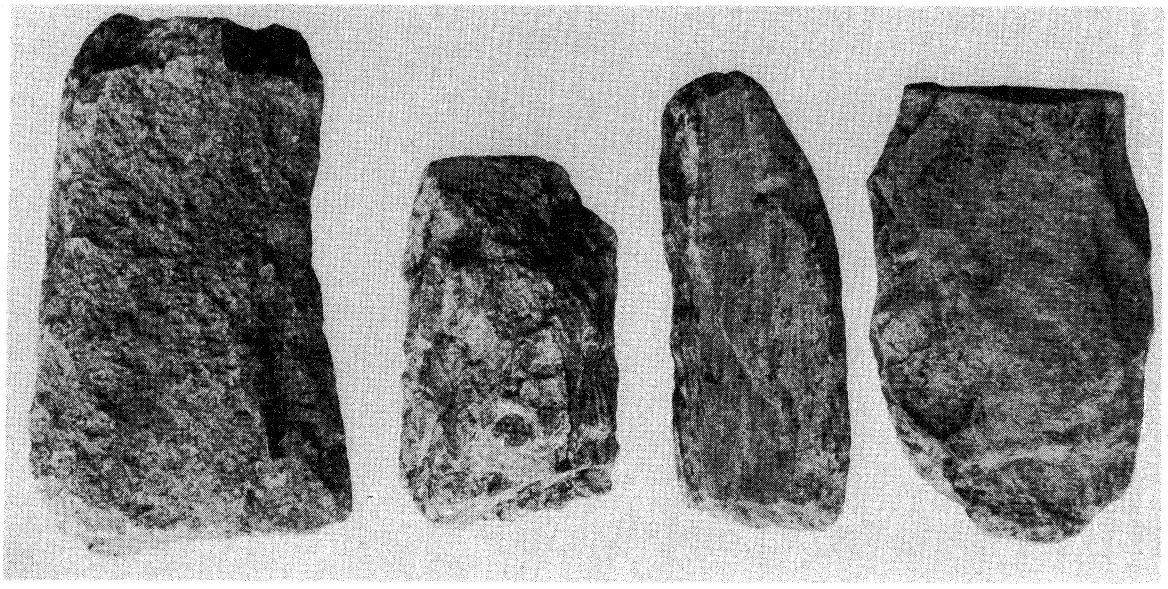




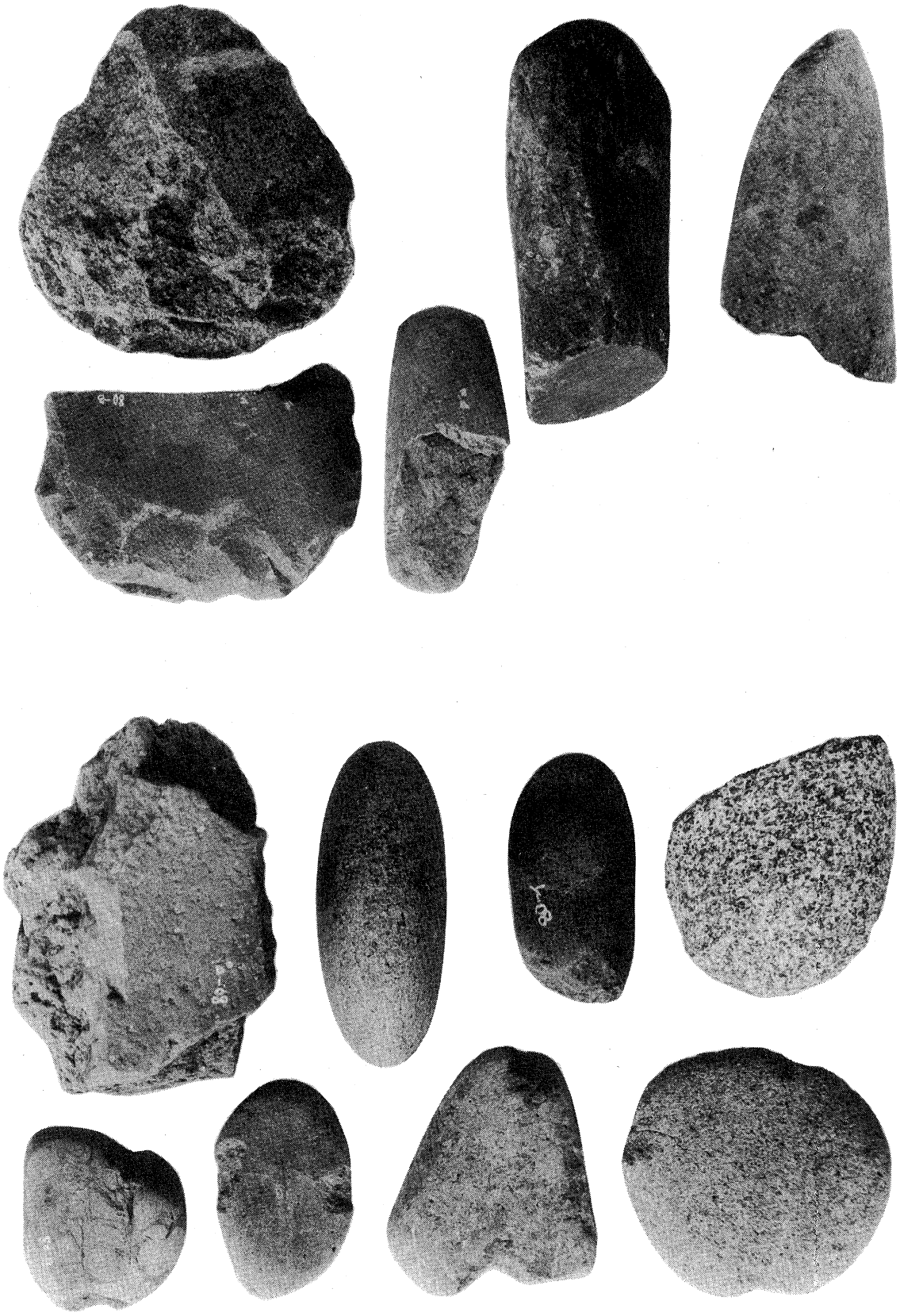
図版35　第２地区出土の石器(二)，(打製石斧)



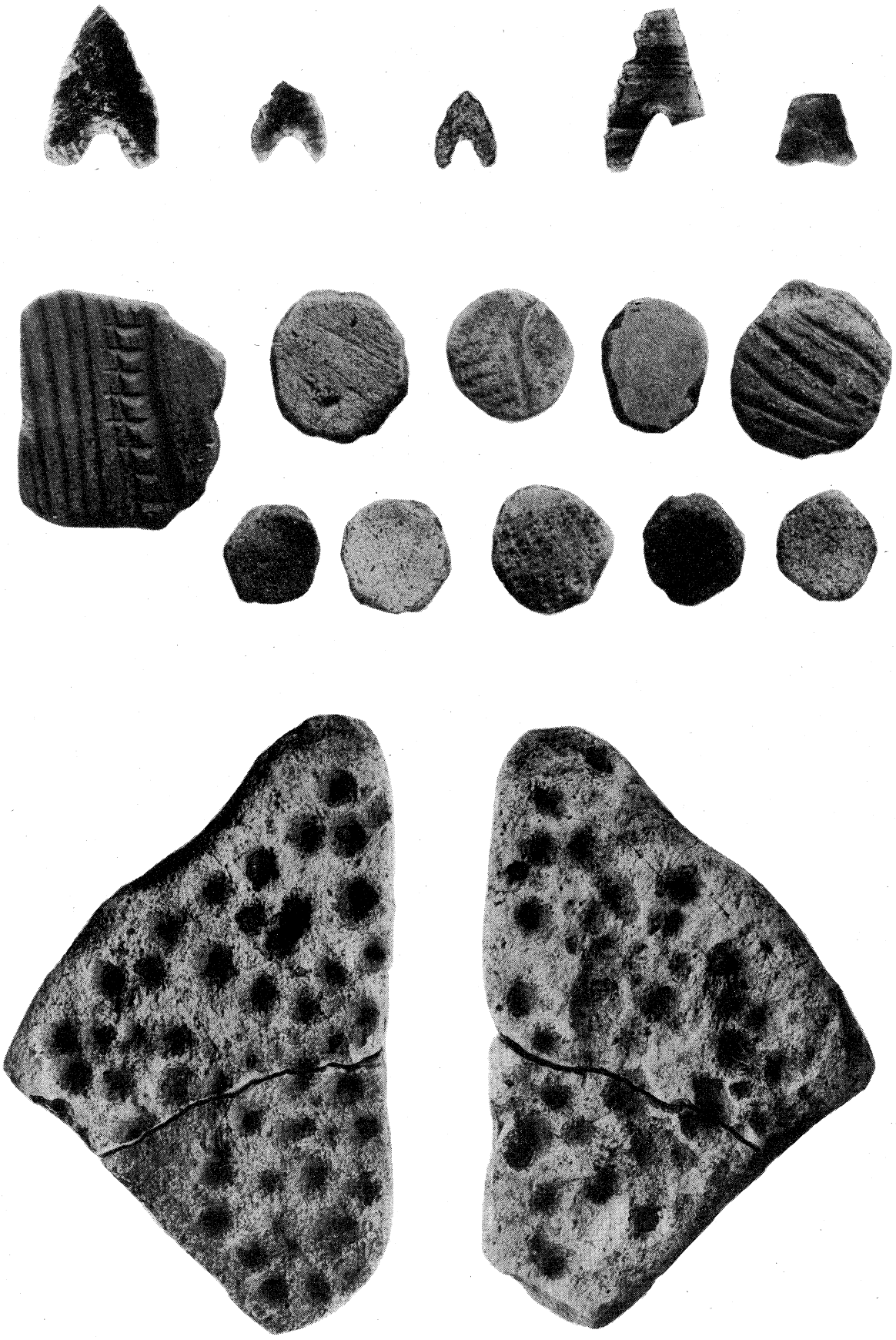




図版36　第２地区出土の石器(三)，(打製石斧)



図版37　第２地区出土の石器(四)
(礫器，磨製石斧，磨石，石皿，たたき石，石錘)



図版38　第２地区出土の石器（五）・土製品
（石鏃，土錘，土製円盤，凹み石）

常　盤　台　遺　跡

発　　行　　昭和57年3月31日
発行者　　横　浜　国　立　大　学

印刷　共進印刷有限会社